
GIRL LIRICAL NANOHA STRIKER 'S " GREED OF GREED "

最高総司令官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SPECIAL EDITION MAGICAL GIRL
LIRICAL NANOHA STRIKER'S "GREEN
D OF GREED"

【Nコード】

N4263V

【作者名】

最高総司令官

【あらすじ】

一人の少年が死んだ

その少年は、全てに嫌われていた

人・物・生物・星・宇宙、そして世界

拳句の果てには、一番信頼していた仲間に殺された

少年の魂は天へと昇ったはずだった

だが、神はそれを許さなかった

神は告げた　好きなように生きる

少年は条件を出した　俺を化物にしてくれるなら

神はそれを呑んだ　不敵な笑みを浮かべて

少年は笑った　不敵な声を上げて

神よ

彼方は少年に何を望む？

世界よ

何故少年を傷つける？

これは

全てに拒絶され

誰からも

理解されなかった

最凶最悪の

怪人の物語

プロローグ

（とある世界）

ドサッ

？「グッ・・・ガハア！」

一人の少年が破壊された町の道路に倒れこむ。

そしてその近くには、ナイフを持った少年が息を荒げて、倒れた少年を睨みつけていた。

？「てめえ・・・なんの・・・真似だ・・・」

倒れた少年はナイフを持った少年を睨みつける。対する少年は、多少は落ち着いたのか息を荒げておらず、先程とは打って変わって少年を見下すような目で見ていた。

少年「申し訳ありませんが、君は局にとって・・・、いや、世界にとって害悪以外の何者でもありませんからね。だから殺させてもらいます」

？「！？てめえ・・・・・・・・、まさか・・・・・・・・俺にち・・かづいたのも・・・・・・・・」

少年「そうです。彼方を殺すためです」

？「てめえ・・・・・・・・ガハツ・・・・・・・・！？」

少年は起き上がろうとするも、体中に激痛が走り、起き上がるどころか、意識まで持っていかれそうになった。

少年「あまり動かない方が得策ですよ？このナイフには致死量レベルにまで高めたゲドラ毒が重ね塗りされていますから。そんな物で刺されたらどうなるか、感の良い彼方なら分かりますよね？」

？「ツの野朗・・・・・・・・！！そこまでして俺を殺してえか・・・・・・・・！！？」

少年は倒れた状態から、持っていた機械紛いの杖を使って立ち上がり、ナイフの少年に向ける。

？「『ア、アスタブ・・・・アリシレス・アクデューム。天空に煌いで、奴を、う、穿て！！！！スカーレット・ボルト』！！！！」

少年は途切れ途切れの言葉で呪文を唱えて、杖をナイフの少年に向けてける。本来ならばここで、天空そらに紅い雷が輝き、相手に向かって落ちるはずだった。・・・が、

バチイ!!!

?「ギアアアアアアアアアアア!?!」

雷はナイフの少年に落ちることなく、なんと発動者の真上に落ちたのだ。それも、普段使っている魔力とは明らかに違う魔力を用いていた。

ドシヤ

少年は黒焦げの状態で、再び倒れ付す。

そして、さらに不思議なことが起こった。

少年の杖・・・『デバイス』が光だし、ペンダント状の待機状態へと勝手に戻り、ナイフの少年の手に収まった。同時に、纏っていた紅い服も消え、茶色主体の制服に変わった。

？「ガ……デイ……ア……ス……て……
め……え……。う……。ら……。ぎ……り……。やが……
……った……。な……。」

少年は先程よりも弱弱しい感じで、ナイフの少年の手に収まっているペンダントを睨みつける。

『裏切った？随分と心外な発言をなさるんですね。私を貴方を助けるよりも、このお方とともに居たほうが居心地が良い事に気がついたのですよ。私の“元”マスター』

？「……………」

少年は一言も言葉を発さなかった。否、発せ無かったのだ。今の彼には喋ることすら危険な状態なのだ。既に彼の五感のうち、聴覚を除いた全ての機能が停止し始めていた。

少年「安心してください。彼方一人の犠牲によって、世界が救われるんですから。ミカエル。セットアップ」

『yes, my lord. set up』

少年は何一つ悪く無いといった感じでナイフを捨て、自らのデバイスを起動させ、バリアジャケットを纏う。金色のマントに銀色のブーツ、そして天使を思わせる純白の衣、腰には純銀製の銃があり、金色の槍・・・悪魔殺しの槍を手に持つ姿は、正に神々しいの一言に限った。

？「・・・く・・・そ・・・。・・・く・・・くく・・・
・・・く・・・く」

少年「?どうしたのでしょうか?」

ガディアス『ついに頭がいかれたのでしょうか?』

少年「考えられなくもありませんけどね。まあ、知ったところで無意味ですよ」

少年がそういうと、デビルブレイクに莫大でいて神々しい魔力が充填されていく。

？「く・・・くく・・・。お・・・ほ・・・え・・・て・・・お・・・
け・・・よ・・・?・・・お・・・れ・・・は・・・か・・・
な・・・ら・・・ず・・・ふ・・・く・・・し・・・ゆ・・・
・・・う・・・し・・・て・・・や・・・る・・・」

少年「そんな死に掛けの体で何を言うのかと思えば、そんなことですか」

少年は心底ガツカリしたような感じで、魔力の充填が終わったそれを、同じ少年へむけ、そして

少年「『オール・ザ・デリート』」

カア！！！！

瞬間、倒れ伏していた少年の体は無残にも飛びちり、そして消し炭と化してしまった。

そして、まるでそれを待っていたかのように彼の後ろから、彼を呼ぶ声が聞こえる。

？「レイくん！！」

少年 レイ「なのは！無事だったのか！！」

走ってきたのは高町なのは。原作の主人公であり、レイに対して好意を抱いている一人でもある。

？ なのは「うん！・・・ところで・・・あの人は？」

なのはは一瞬嬉しそうな顔をするも、あの人と呟いた瞬間、顔に陰りが出た。それを見たレイは、なのはを抱き寄せ、こういったのだ。

レイ「・・・奴はこの現場が終結してから、遣り残した事があるっていつてどっかいつちゃったけど・・・」

なのは「そ。ならいいの。帰ろ？レイ君！！」

なのはは居なくなつたはずの人を心配するそぶりすら見せず、レイと腕を組んで帰つた。

結果

この事件は後に『J S 事件』とよばれ、管理局始まって以来の大事件となつた。重軽傷者は多かつたが、奇跡的にも死人は一人たりともでなかつた。

。 たつた一人、仲間と思つていた人物によつて殺された彼以外は・・・

そして、彼・・・『ジン・ヘイストーン』は、戦闘中に失踪とされ、捜索隊すら出されなかつた。

彼は管理局全体から嫌われていたのである。それどころか、管理局は彼の事は居ないような扱いをしたのだ。

そして、この事に抗議の声を挙げる者は誰一人としていなかった。

局内からは勿論、彼の所属部隊である『機動6課』からも。誰一人として、だ。

同時に、レイは管理局内では知らない人が居ないほど、有名になった。

正に、闇と光の違いである。

レイは光として祭られ、ジンは闇として忌み嫌われる。

だが、彼らは知らない。

1年後。彼が最凶の姿となって帰ってくることを。

彼らは知らない。

その者が管理局を崩壊させようとは。

神とメダルと化け物化（前書き）

この章から台本書きをなくします。

ついでに、異常とも言えるほど長いです。

神とメダルと化け物化

く?????

「……………ん」

少年が目を覚ました。そこは、漆黒の世界だった。

そして、見慣れない景色に顔を顰め、もしもの時のために、後ろに装備されているナイフ（刃は魔力で形成されている）に手をかける。

「気がついたかの」

「!?!」

少年の後ろから声がかげられる。少年は瞬時にナイフを抜き、同時に声をかけた人物から距離を取り、ナイフで牽制を図る。

「……………何者だ」

「ほっほっ。そう警戒するでないて」

少年は警戒心を高め、声をかけた人物を睨む。その人物は笑って警戒を解けといった。

しかし、その外見は決して安心できそうなものではなかった。

銀色の髭に銀で紡がれていそうな服。簡易に表現するならば、全身を銀で覆ったような感じの爺さんだった。

「もう一度聞こう。貴様は何者だ・・・」

少年はそういうも、内心は冷や汗をかいていた。

理解したのだ。

『こいつには勝てない』

そう感じたのだ。

「そうじゃのう。わしに名はない。文明のある世界では、わしは死神と呼ばれておる」

「死神・・・だと・・・？」

「そうじゃ。単刀直入に言おう。お主は死んだ。仲間には殺されてな。ちなみにここは無間地獄と呼ばれる地獄の最下層のさらに下じゃ」

「・・・・・・・・・・そうか」

自らを死神と呼ぶ者は、バツサリと言い捨てた。それに対し、少年は対して驚いていないようだった。

「ほう。君は暴れたりしないのか？」

「・・・・・・・・何故暴れる必要がある？既に死んでしまったこの身だ。今更暴れたところで何になる」

そついい捨て、少年はナイフを閉まった。

その言葉を聞いて、死神は顎を人差し指と親指で挟んで考え事を始めた。

(こやつ、相当肝が据わっておるのう……。どれ、少し探ってみるかの……。)

「のう、少年」

「・・・なんだ」

死神は手を離して、少年に問いかけた。

「おぬし・・・。人生をやり直してみる気はないのか？」

「・・・じじい。外見はともかく、中身までイカレてんのか？」

「わしは至って真面目なんじゃがな。で、どうなんじゃ？」

少年は少し考えるようなそぶりを見せてからこう答えた。

「・・・そうだな。できることなら生き返って、『奴ら』への復讐を企てたい」

少年は拳を握り、歯を食い縛る。その様子からして、彼女らに対して相当の恨みを抱いている事が伺える。

「少年よ。すまんが、君の記憶を見せてくれんかの？」

「好きにする」

少年がそういうと同時に、死神は彼の頭に手を乗せる。

「ふむ……（むう……。こやつかなり、いや、莫大な数の修羅場を潜ってきておる。これだけの数の修羅場を潜ってきた者は神界でもそうはおらんじやろう……。が、才能という才能がなく、結局は犬死か……。こんな奴が地獄行きになるとはな……。やはり、こやつしかおらんな）」

そう思つて、死神は手を離す。少年は不思議そうに顔を顰めていたが、死神はそれを無視して、話し始めた。

「少年。わしは君を蘇らせようと思つ」

「……そうか。で？用件はなんだ？」

「用件とな？」

死神は少年の言葉に首をかしげ、少年は死神のその言葉に僅かながらに溜息を吐いて、こつ切り替えした。

「惚けるな。死神と呼ばれている貴様が、そう安々と俺を蘇らせるとは思えない。俺に何かを頼みたいからだろ？お前と同じ『死神』の異名を持つ、世界からの溢れ者の俺に。大方、表沙汰には出来ないような・・・所謂、殺しか？それも、神々が関わっていそうな奴らを」

「!？」

死神は驚愕した。

その通りだからだ。死神はある『種族』を減らして欲しく、世界に嫌われ、死神が殺したがっていた『種族』に殺されし少年を使って、少しでも『種族』を減らそうと企てていたのだ。

しかも、復活させようとした理由も寸分違わなかった。

既に読者は察しているかも知れないが、彼には身内が居ない。

それだけではない。身内どころか、彼の身を案じてくれる人物すら居ないのだ。そこに目をつけた死神は、彼を利用しようとしたのだ。

が、それをほんの少しの会話だけで論破されたのだ。驚かない方がおかしい。

「その表情からして、どうやら真実みたいだな」

「……………」

少年は年相応とは思えぬ歪んだ笑みを浮かべる。それに対し死神は、ただただ黙るだけだった。

「……………沈黙は肯定と受け取るぞ。ついでに言うておくが、俺を蘇らせるに当たっては、条件がある」

「……………条件じゃと?」

そして少年は、死神に対してある条件を提示した。それを聞いた死神は驚愕と共に納得した。それと同時に反対もした。

そんな事したら、君が君ではなくなってしまう、と。

が、少年は逆にこう答えた。

「奴らを見返してやればそれでいいのさ。その為には、例え愚行といわれる行為もやってみる価値はある」

そう言う少年の目は濁り、そして何より絶望と狂気に染まっていた。

「……………よかろう。君の用件を飲もう」

「ふん………。さつさと始める」

「では、まずは如何なる姿になるつもりじゃ？」

そうやって死神は、いろいろな星が映し出された水晶体を出現させる。

「そうだな……。これとこの姿がいいな」

そういう少年の線の先には、赤を基調とした腕がプカプカ浮かんでいる映像と、上下3色に色分けされた戦士が映されている映像があった。

「よかるう」

死神がそういうと、水晶体が消え去り、代わりに死神の手には赤、黄、緑のメダルが各1枚ずつ握られており、反対の手には楕円形状の、3つの丸い窪みがある何かを持っていた。

「では逝くぞ。……次に会うときは、しっかりと使命を果たし終わった時かの？」

「ああ。期待せず待つてる」

「ふん。・・・では逝くぞ!」

死神は持っていたメダル・・・『コアメダル』を少年に向かって投擲し、鷹が描かれたメダル・・・『タカ・コア』は、少年に当たると、弾かれずに飲み込まれるように体内に入り込んでいった。

ジャラララララララ

そして、その体は銀色のメダル・・・『セルメダル』に分解され、床に落ちる。

「・・・座標軸固定、目標時間、彼が死んだ直後。転送!」

すると、散乱したセルメダルの下に巨大な魔方陣が出現し、セルメダルとコアメダルは彼が殺された世界に転送される。寸前、死神は残ったコアメダルと窪みがあるもの、そして一枚の紙を一緒に転送させた。

「・・・よし、転送完了じゃ。後は少年がやってくれるのを祈るまでじゃ」

死神はそうつぶやいて消えた。

〈ミッドチルダ・廃棄区画〉

廃棄区画……。管理局によって廃棄が確定している区画で、寂れたビルや高架が大破したまま残っている。

ここは、少年がレイと呼ばれる者に殺された、当にその場所である。

カアアアアアアア……

そこに、魔法陣と共に大量のセルメダルと3枚のコアメダルと何かが散らばる。

バチ……。バチバチバチ！！

ジャラララララ

そして魔法陣が消えると同時に、タカのコアメダルが電気を発し、それを中心に、セルメダルが磁石に引き寄せられるに集まり、鳥を模した腕のような物が出現した。さらに、それを基点として、さらにセルメダルが集まっていき、殺されたはずの少年が出現した。その右腕には、先程の腕が装着(?)されていた。

「……………メダルが足りない」

少年はそう呟くと、近くに落ちていた黄、緑のコアと楕円形の物、それと死神からの手紙を拾い上げ、手紙以外を腕の中に仕舞い、手紙を読み出した。

『名無き少年

こいつを呼んでおるということは、復活は成功したみたいじゃな。

さて、まず謝らんといかん事がある。君の体の事じゃ。

本来は完全なグリッド化をさせるつもりだったのじゃが、突然の事でコアを回収しきれなかった。

回収しきれなかったコアメダルは、その手紙の裏に地図があり、赤印の×印がしてある。

その×印にコアメダルがある。無論じゃが、そこにあるのは君のコアだけではない。他の、君を除いた6種類のコアもそこにある。

なお、金に関しては自力で何とかしてくれ。

復讐の成功を心待ちにしておるぞい

死神』

それを読み終えた少年は、手紙を裏返して、地図を見る。確かにそこには、地図が描かれていた。

「ふむ……。一番近い場所は、ここから南西に3km程の研究所か。……行くしかないな」

少年は小さく溜息を吐いて、歩き出した。

無論だが、移動手段がないため、徒歩で移動である。

〈ミッドチルダ・第7研究所〉

ヴィーヴィーヴィー……！！

研究所内に警報が鳴り響き、内部の研究所の科学者達が慌しく動き回る。

「侵入者だ……！！」

「本局に連絡しろ……！！」

「くそっ……何なんだあいつ……！魔力弾がちつとも効きやしねえ……！！」

研究所内では、護衛の職員達が一人の少年に対して魔力弾を放つ。しかし、その少年は近くの部屋に逃げ込む。これを好機と見た局員達は、すぐさま扉を開こうとする。しかし、その扉は固く閉ざされていた。

「くそっ！！中から鍵を掛けられた！！」

「ディスク・グライNDERと暗証番号解析装置持って来い！！」

「はい！！」

若い局員はベテランの局員に怒鳴られて、急いで格納庫へと向かう。

「くそ……。まずい処に入られたな……………」

そう言って、ベテラン局員は上を見上げる。

そこには、『ロストログア保管庫& a m p ; 押収物保管庫』と書かれていた。

〈ロストログア保管庫兼押収物保管庫〉

「さて、と……」

少年は近くにある壺やら剣やらには見向きもせず、奥にあった円盤の蓋をあける。その中には、鳥系グリードの象徴ともいえるコアメダル・・・クジャク1枚、コンドル1枚、そしてタカが1枚はめ込まれていた。

「よし。少なくともこれで特殊能力と翼は出せるようになるはずだ」

少年はそう呟いて、さらに周りを物色し始める。結果、猫系のコアメダルが7枚、昆虫系のコアメダルが5枚、そして新たに水勢系のコアメダルを3枚、重量系のコアメダルを6枚、爬虫類系のコアメダルを8枚、恐竜系のコアメダルを10枚見つけ出した。

同時に少年は思い出した。この施設は、地図に描かれてた研究所の中でも、ダントツに大きい施設だったな、と。

ギイイイイイイイ!!!

ドアの鍵が何かによって削られるような音が響く。どうやら、ディスク・グライндаが到着したらしく、それを使って鍵を切断しようとしているみたいだ。

(だが、もう遅い)

少年は心の中でほくそ笑み、自らのコアを除いた全てのメダルを宙に放り投げ、全てその腕に吸収させた。

ドクン!!!

「ツング!?!?ガアハアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!?!」

腕にメダルを吸収させたその瞬間、少年の体に一言では言い入れぬ激痛が全身を襲った。まるで、コアメダル同士が反発し合っているような感覚だった。

「ギツ・・・グツ・・・、引ツコめやいたみども。俺二はやらナキヤならナイコトガルんだ・・・」

少年は痛みに耐えるかのように右手と歯を食い縛る。だがその顔には、しっかりと笑顔が浮かんでいた。

「オレノフクシユウの力になりやがれ!!!メダルドモオオオオオオオオオオオオ!!!」

少年は叫んだ。自分の内の気持ちを全て吐き出すかのごとく。そしてその思いは、コアメダルをも共鳴させた。

そして、それに答えるかのように、赤、緑、黄、灰、青、紫、金の波動が、余剰エネルギーとなって体から噴出した。

バギーン！！

ジャギ

「そこまでだ化物！！両手を床について手を頭の後ろに回せ！！！余計な抵抗を試してみろ！！！貴様の脳天に魔力弾をぶち込んでやる！！！！」

同時に、ドアの鍵を破壊した局員達が部屋に流れ込み、一斉にデバイスを構える。しかし、少年は完全に相手を見下した目をし、鼻で笑った。

「ふん……。やりたきゃやれよ。お前達のような雑魚に俺は殺せやしねえからよ」

少年は手を広げ、局員達に一步近づいていく。それに伴い、局員達は一步ずつ引いていく。

「どつした？お前達が俺を殺さないなら」

トコッ

少年は一度手を手刀にして振るう。局員達は一斉に防御の構えに入るが、特に何も起こらなかった。

(・・・はったりか?)

そう思った局員は攻撃の構えに直そうとした。が、それは出来なかった。

ポトポトッ

「・・・え？」

誰かが動いた瞬間、隊長と思しき局員以外の首がズレ落ちた。

「俺が殺す」

「う、うわあああああああああああああ!!?!?!?!」

それを見た瞬間、局員は狂ったかのように魔力弾を発射する。その

全てが少年に当たるが、少年は意にも介さないようすでその場に立っているだけだった。

『こちら機動6課。あと30秒少々でそちらに到着します』

と、そこへ局員の通信端末に連絡が入った。同時に、局員の気持ちに余裕が生まれた。

「へ、へっ！！もうすぐ援軍が来る！！お前なんざイチコ」

局員はその先の言葉を紡ぐことは出来なかった。なぜなら、少年が局員の首を撥ねたからだ。同時に少年の体が怪人体から人間体へと戻る。

「機動6課……。新しい力を試すのには不足なし。いや、今の・
・」
『俺じゃ役不足か……』

少年は自嘲気味に笑い、先程は吸収しなかった鳥獣系コアを取り出し、一度真上に投げ、吸収するかのようコアメダルを取り込む。

バサアアアアアア……

すると、少年の背中に紅を主体としたエネルギー体の翼が出現した。

「……………」

少年は両側の翼を交互に見ると、無表情で翼をしまつ。

「……………いくか」

少年は全身をセルメダルに分解して、真上にあつた通風孔に入り、そこから表に出た。

そのすぐ後に、連絡を受けた6課が現場に保管庫に駆けつけたが、すでに少年は消えた後だった。

本当にコンマ1秒の差であつた。

「????」

「さて…………。これからどうするか」

研究所から離れた場所で休息を摂っていた少年は、ふと呟いた。

概説でも描いたとおり、少年は世界の嫌われ者である。当然、住む

場所も無ければ、行く宛てもない。

しかも、少年は知らぬ事だが、彼には公務執行妨害は勿論のこと、その他横領や恐喝など身に覚えのない罪で国際指名手配されているのだ。

理由は至極簡単で、管理局の上層部が保身のために、局内で最も評判の悪かった少年に自分達が犯してきた罪を全て擦り付けたのだ。さらには、彼はJS事件やPT事件の黒幕で、クローン技術や戦闘機人の製造方法を伝授したのは彼だと言い張ったのだ。ご丁寧にも偽造された映像つきである。

同時にこれはミッドチルダのみならず、管理世界全域にいきわたっていた。当初、局員や市民達は、JS事件の一件で上層部を信頼していなかったが、映像が流された事により、上層部の信頼は殆ど回復しなかったものの、少年の存在は悪の対象として憎むべきものとなっていた。

(・・・少なくとも、今復讐を行うのはマズい。俺のメダルが少なすぎる。やはり、メダルを回収する方が先決か)

そう考えた少年は立ち上がったが、ふと、自分には名前が無いことを思い出した。

ある事にはあるのだが、その名は既に捨てたものだし、新たに名前が欲しかった。

そして少年は、一つの名前を思いついた。

自分は今、無の存在。つまりは0だ。そしてこれは始まりだ。世界の終末に向けてのカウントダウンでもある。そして、俺は終末を見る目だ。

ゼロからの終末を見る目。

「・・・アंक。『アंक・エドゼロン』。それが俺の・・・、新たな名前だ」

そして少年は研究所から飛び立っていくへりを睨みつける。

「待つてるよ6課、管理局、そして　ども。ぬるま湯につかっている貴様らに冷たい物をぶっかけてやるぜ。冷たい冷たい血をな・・・」

34

少年・・・アंकは狂気がベツトリ張り付いた笑いを浮かべ、森の奥へと姿を消していった。

これで、アंकは世界各国の敵へと廻った。

嗚呼、なんと愚かな世界か・・・。

この時は誰一人として気づいていなかった。

後にアंकが、JS事件を遥かに超える恐怖を植えつける事を。

このとき、誰一人として気がついていなかった……。

神とメダルと化け物化（後書き）

やっと2話目だよ・・・。

次は少し休憩して、既出キャラやまだ出ていないキャラを含むキャラ説明を行いたいと思います。

ついでに世界観説明とかも一緒にやりたいと思います。

原作とは明らかな相違点があるんで。

ではでは。

キャラクター紹介&世界観紹介

まずは転生前のプロフィールです。

ジン・ヘイストン

年齢・・・24歳

身長・・・168・6cm

体重・・・49kg

レアスキル・・・なし

魔力量・・・C+

デバイス・・・ガディアス

階級・・・3等陸威

詳細

この小説の主人公で、冒頭で殺された際の姿。

管理局内では悪い噂しかなく、良い噂を聞いた日には槍が降るとい
う、嫌なジnkスの持ち主である。

また、裏世界では残忍で狡猾な性格で権力を手に入れており、知ら
ぬ者は居ないという、裏世界のやり手でもあった。

その結果、6課メンバーからは信頼は置かれておらず、逆に敵意や殺意を向けられていた。

物心ついた時には裏社会で暮らしており、人間の奥底に秘められた裏の感情を嫌という程見ている。

5歳の頃に管理局に入隊（この頃は、管理体制が崩れかけていた時期でもあったので、疑いのまなざしで見られることはあったが、咎められることは無かった）するも、レアスキルは発現せず、魔力も平凡以下のランクで止まってしまった。

それが原因かは定かではないが、再び悪の道に走った。このとき11歳。

そして、23歳のときに6課に入隊、そしてその1年後にレイと呼ばれる者に殺害された。

本来ならば、本人はすぐにも管理局を抜けたかったが、行く場所も無く、上層部に弱み（裏世界とのパイプの事）を握られてしまっていたので、仕方なしに在籍していた。

次は復活後の主人公のプロフィール。

アंक・エドゼロン

年齢・・・同上

身長・・・171cm

体重・・・65kg

魔力ランク・・・なし

レアスキル・・・なし（グリードの力はレアスキル扱いではないものとする）

階級・・・なし

顔・・・下の中

詳細

死神によって鳥類系のグリードとして復活し、名を変えた主人公。仮面ライダー000に変身する。

由来は『ゼロから始まる終末を見る目』。

現段階では怪人化は出来るものの、右の顔半分・左手の具現化が出来ない状態にある（顔はコアメダルが9枚以下だから発現できないのだが、左手に関しては詳細不明）。

性格は残忍且つ狡猾で腹黒い。狙った獲物はどんなに失敗しても必ずしとめる。

死亡した事を機に、必要な物は買うのではなく、強奪することで間に合わせている。

また、デバイスの改造や製造に関しての知識を独学で手に要れ、自分局に新たなデバイス（非人格型のストレージ）を制作した。

制作秘話

色んなリリカル作品を見てきて思ったが、どんなに悪役ぶっていても、最終的にはなのは達に懐柔(?)されてしまう主人公が多かったから。だから、たまには完全な悪でも良いのではないか?という考えの下創られたキャラクター。

レイ・メイスティーマ

年齢・・・20歳

魔力ランク・・・オーバーSランク

デバイス・・・ガディアス、ミカエル

顔・・・上の上(至高のイケメン)

階級・・・大将

性格・・・優しくてよく気がきく。

光
レアスキル・・・デビルブレイク悪魔殺、アタック・キャンセル攻撃無力化、サーヴァント・ウエボン英雄武器、ウエボン魔力変換資質

詳細

この世界でいう主人公的な立場の人間。同時にアंकを殺した張本人。

実は転生者で、原作はs t sの頃まで知っている。

転生したのは10年程前で、交通事故《女神のミス》で死亡し、女神によって転生してもらった。

そのため、なのは達とは幼馴染であり、彼女達は彼に好意をもっている。

現在はJS事件の功労者として、6課に在籍しながらも、実質的に管理局の権力者となっている（後に後見人にもなった）。

制作秘話

言わずもがな、最強のキャラを目指して書いたらこうなった。

オオシマ
大島 宗助 ソウスケ

年齢・・・15歳

魔力・・・なし

身体重・・・平均より少し高いくらい

顔・・・上の中

レアスキル・・・火竜召喚

性格・・・優しくも厳しい。若干兄貴臭あり。

詳細

レイと同じく転生者。レイと同じく女神のミスにより、転生してもらった者。

魔法ではなく、烈火の炎の主人公、花菱烈火の力である八竜の力を全て使う事ができる。

主にFW年長者から好意を寄せられている。

制作秘話

最強をめざしたr(ry

何故烈火の炎を選んだかはおぼえてない。

世界観説明

時系列はJS事件から1年後。

相違点は、

- ・PT事件からJS事件まで、誰一人として死者が出ていない事。
- ・ジェイル・スカリエッティが仲間として6課に居ること。
- ・クワットロの性格が明らかにおかしい(良い意味で)。
- ・プレシア親馬鹿。
- ・アリシア蘇生。(やったのはレイ・メイステイマー)

・6課は継続して活動中（JS事件での功績とレイ・メイステイ
マが根回しが原因）。

・・・以上で終了です。

これからも全力で頑張っていきます。

ではでは。

予言とチートとハッキング(前書き)

再び戦闘回。

でも、期待はしないでくれい。

予言とチートとハッキング

〔第1級暫定危険世界バイザム・惑星ムディ〕

「・・・・・・・・・・」

第1級暫定危険世界・・・。

そこは、宇宙の形が97管理外世界と酷似していながらも、危険な生物や異常とも言える酸素濃度の低さ（地球が10であるとすれば、この世界の殆どの星は1にも満たない）などから、文化レベルは0ながらも暫定的に危険指定とされている。

正直、指定された側としては良い迷惑だ。

その内の星の一つ、惑星『ムディ』のとある洞窟の奥にアंकはいた。

服は死ぬ寸前まで着ていた制服ではなく、赤と黒を基調とした洋服とマントを羽織っていた。その背中には、タジャドルのオーラングサークルを模した紋章が織り込まれていた。

そしてそのアंकの様子は、何かを考え込むような感じで、自分のコアメダル以外を上弾いては元に戻し、また弾くという動作を繰り返しながらも、視線は明後日の方向を向いていた。

(おかしい。どうして左腕が復活しない？それに羽根も・・・)

考え事とは、未だに復活しない左腕のことであった。

あの研究所を制圧した後、アंकは怪人化と人間化を繰り返した。しかし、何度やっても結果は同じで、左腕だけは復活してくれなかった。

おまけに怪人化すると、左翼も出現しなくなるのだ。しかも不思議なことに、生身の状態では左翼は出現するのだ。だが、右翼に比べると、明らかにエネルギー濃度が薄く、不安定なのだ。

アंकは初め、コアの不足による不完全復活が原因と考えた。だが、それならば怪人化をすることは愚か、翼を出すことすら不可能なはずだ。故にこれは却下された。

となると、考えられる事は一つ。

「俺と同じ存在・・・、アंकがもう一人いるというのか・・・？」

アंकはそう呟いて、首を横に振る。

馬鹿馬鹿しい。

しかし、少し考え直すとすぐにその思いは吹き飛んだ。

左翼の機能不全、左腕の未復活。

もし自分と同じ存在・・・、もしくは自分に近い存在が居るとしたら？

そいつが怪人態の左腕を持っていれば、全ての説明がつく。

そう考えた後のアングの行動は早かった。

すぐさま研究所から盗み出してきた機材を組み上げて作った手製のパソコンを使い、管理局にクラックを掛ける。

もし、怪人態の腕を持っている奴がいれば、糞共1《管理局》が放っておくわけが無い。きつと言葉巧みに勧誘をするに違いない。

そして、それは見事に的中した。

「居た・・・・・・・・・・」

アングは唇の端を吊り上げ、不気味に笑う。そこには、アングの左腕を構える青年が映し出されていた。

「俺の左腕を勝手に使いやがって・・・。糞餓鬼がア・・・」

アングは憎々しげに青年を罵りながらも、経歴に目を通していく。

名前は『高町アキラ』。どうやら、かつての古巣である6課の人間

らしい（おまけくっ付けて、高町なのはの弟らしい）。しかし、ア
ンクには納得のいかない事があった。

「……？12歳より以前の経歴が記録されていない……？」

アंकは、瞬時におかしいと悟った。

管理局の情報管理を一手に担う無限書庫。そして情報をかき集める
だけ集める情集一課（正式名称：情報収集一課）。この二つがたっ
た12年間の情報を集められないはずがないと思ったからだ。

アंकは生前、情集一課にも在籍していたことがある。だから、彼
らがいかに優秀か、アंकは知っていた。

そしてアंकは色々な仮定をつくり、頭の中で検証をしていった。
そしてある一つの答えにたどり着いた。

「……そうか。こいつが“転生者”か」

アंकは納得がいったような表情で電源を落とした。

それは、復活する際に死神から言われていたこと。

〈回想〉

『君の使命は、ある種族……いや、転生者と呼ばれる者達を減らして欲しいのじゃ』

『転生者……。文字通り、どっかの世界から姿形を変えてやってきた奴らか』

『君は飲み込みが早くて助かるわい。その転生者が君の世界の歴史を壊してしまっておるのじゃ』

『たとえば？』

『君の世界に、プレシア・テストロツサ、クイント・ナカジマ、アリシア・テストロツサ、ゼスト・グランガイツ、レジアス・ゲイジ、ティード・ランスター、クライド・ハラオウン、夜天の書の管制プログラム……。リインフォースと呼ばれる者達はおらんかの？』

『ティード・ランスターとゼスト・グランガイツは知らないが、ほかは聞いたことあるな。リインフォースは、あのちっこいユニゾンデバイスか？』

『いや、ユニゾンデバイスではあるが、小さくはなかったはずじゃ。風貌で言えば、目つきが悪い銀髪の女じゃ』

『……………ああ、あいつか』

アंकは八神はやてとともに居た目つきが悪い女……アインと呼ばれていた女を思い浮かべた。

『多分そいつじゃ。そやつらは本来、闇の書事件からの十年間で、全員死ぬはずじゃった』

『なに!?!』

アंकは珍しく驚愕していた。

『じゃが、転生者共はその歴史を変えてしまったのじゃ。最早、I Fだの、もしもだけで片付けられる状況ではなくなってしまった』

『なるほど……。奴らが良かれ良かれと思ってやった事が、世界にとっては害悪以外の何者でもなかったということか』

『そして、その反動は全て君に向かったというわけじゃ』

『……成る程。奴らが、人が悲しむのは見たくないとか甘っちょ

るい事を言っ行って行った事が、間接的に俺を泣かせてたということか。何とも矛盾してやがるぜ』

『全くじゃ』

『あ。ついでに一つ。転生者はどうやって判別するんだ？』

アंकは忘れてたかのごとく質問した。

『転生者は、君の世界の技術や異能力だけでは片付けられないような力を持っていたり、経歴が一部、空白になっているようなやつらがそうじゃ』

く現在

「……とか言ってたな。死神のやつは」

そう言っアंकは座標を入力する。座標は勿論、機動6課の上空だ。

「さあて……、楽しい楽しい皆殺フクシユウの始まりだ……」

カアアアアアアア

そしてアंकは転送ボタンを押す。転送ゲートが起動し、停止する頃にはアंकの姿は消えていた。

6課side

↳少し前・6課訓練場↳

「オオオオオオオオ!!!」

青髪の少女が、栗髪のツインテールの女に殴りかかる。

『PROTECTION』

しかし女は慌てず、前方に桃色の魔法陣を展開し、その拳を受け止める。

『ACCEL SHOOTER』

彼女の持つ機械的な杖がそう発するとともに、桃色の魔力弾・・・
アクセルシューターが準備され、彼女の周りに浮く。

「アクセルシューター・・・シュート!!」

彼女がそう発すると同時に、青髪の少女に向けてアクセルシューターが発射される。

バシュー!!

「わわわっ!!?あいたっ!!」

パシンッ

少女はそれをギリギリで避けるも、1発のみ当たってしまった。

ピュッ!!

『そこまで!!勝者：高町なのは!!』

それを待っていたかのように、ホイッスルのような音が鳴り響き、

審判である茶髪のセミロングの女から、栗髪のツインテール・・・
高町なのはに勝利が告げられた。

「いたたあ・・・。負けちゃったか」

『Please do not be discouraged .
b a d y . (気を落とさないてください。相棒) 』

「うん。ありがとう、マツハキヤリバー」

『You are welcome . (どういたしまして) 』

少女・・・スバル・ナカジマの言葉に答えるかのように、マツハキ
ヤリバーは点滅した。

「お疲れ様スバル。中々いい訓練だったよ」

「あっ！！なのはさんお疲れ様でした！！」

なのはが近づいてくると、スバルはさっと立ち上がり、頭を下げる。

「ところで、さっきの攻撃だけど、中々良かったよ。ISも中々使
いこなせてたし、もう私が教えることは殆ど無いかな」

『The master who is sympathy. W
ill it be that the judgment th
at is momentary for an unexp
ected situation if I add it is s
lightly slow? (同感ですマスター。付け足すとすれ
ば予想外の事態に対して瞬間的な判断が僅かばかり遅い事でしょう
か?)』

「あつ、それは自分でも感じました。まだ瞬間的な判断が出来てな
いなあ〜って」

「なら大丈夫かな。自覚があるなら、時間を掛ければ何とかなるは
ずだから」

そう言うてなのはは、スバルに微笑みかけながら自身の相棒・・・
レイジングハートを元に戻す。

「とりあえず後が聞えてるから、一回でようか?」

「はい!...!」

そう言って、スバルとなのはは訓練場を出て行った。

〈6課・食堂〉

「しかし、スバルの奴も強くなったよな」

そう言って、赤毛の三つ編み少女・・・ヴィータはスパゲティを放り込む。

「そうだね。でも、ティアナやエリオ、キャラだって負けちゃ居ないよ?」

「そうだな。我らもつかうかしていると、その内追い抜かれそうだ」

そう言って、ピンク髪のポニーテール・・・シグナムは食後の紅茶を飲み干す。ちなみに先程会話に入っていたのは、金髪のロングストリート・・・フェイト・T・ハラオウンである。

ドオオオオオオオオン!!!

「「「!?!?」」」

皆が談笑に耽っていると、突然、隊舎の前が爆発した。その音は凄まじく、隊舎のガラスに亀裂を入れた。

「シグナムさん！！ヴィータさん！！フェイトさん！！」

「アキラ！！」

シグナム達に近づいてくる少年。それこそが、アंकが狙っている者・・・高町アキラであった。

「何があつたんですか！？」

アキラは息を切らしながら、現状を聞き出した。

「分からん。だが、外で何か起きたことは事実だ！」

「とりあえず外に出よう！！」

「お前らは先に行つてろ！！あたしはなのは達に伝えてくる！！」

そう言って、ヴィータは訓練場のほうへと駆けていった。

同時に、残ったフェイト達も隊舎の外へと駆けていった。

〈6課・隊舎外〉

「うっ！ 凄い熱気だな・・・」

アキラは口を手でふさぎ、フェイトとシグナムは既にバリアジャケツトをセットしていた。

「おいおいおい・・・。すげえことになってんな、こりゃ」

そう言って隊舎からまた1人と出てくる。

「宗助さん！！」

突然現われた少年に、アキラは喜びを露わにする。

少年の名は大島宗助。

キャラクター説明でも説明したが、彼は八竜の力を全て使うことが

出来る。

「おう。久し振り。一体何がどうなってやがるんだ？」

「それが僕にもさっぱり」

フワアアアアア

「！！！！！！？」

そんな会話をしていると、突然、空から紅い羽根が大量に舞い落ちてきた。

「これは・・・羽根？」

「やっと見つけたぞ・・・。俺の片割れ・・・。」

シグナムが羽根を拾い上げていったと同時に、空から誰かの声が発せられた。6課一同は、一瞬でそれぞれのデバイスを起動させてそいつに向けて構えた。

6課 side out

「6課隊舎・上空」

カアアアアアア

「……………さて、久し振りだな。俺の古巣」

そういうアंकの眼下には、真新しい6課の隊舎が建っていた。

「さあ、GEAM STARTだ」

アंकはそういつと、自らを怪人化させて、右手から巨大な炎塊を出現させ、6課の前に投げはなつた。

ドオオオオオオオン！！

「ハッ！！中々にいい具合で燃えるなあ！！！！」

アंकは高笑いしながら、騒ぎを聞きつけて出てきた局員達を一人ずつ見定めていく。そしてついに、他の局員とともに出てきたアキ

ラを見つけた。

「ッ！見つけた・・・、やっと見つけたあ！！！」

アंकは歓喜と狂気に奮えながらも、残った右翼を広げて、ゆっくりと降下していった。

「やっと見つけたぞ・・・。俺の片割れ・・・」

「「「！？」」」

アंकがそう話しかけると同時に、その場に居た局員達が一斉にデバイスや拳を構えた。

「おいおい。何を構えてるんだよ？俺は平和的に交渉しに来ただけだぜ？」

アंकの表情は怪人態のために分からないが、きっと他の連中を見下したような表情で笑っていることだろう。

「交渉だあ？どの口が言ってるやがる化物が」

そういう宗助の腕には、三日月を半分にしたような炎の刃が装着されていた。その後ろには、体の各所が鋭そうな蛇……いや、火竜の一匹である『碎羽』がこちらを見つめていた。

「ハッ！！俺を化物つて言う割には、てめえらの方が化物揃いのようだがなあ？特にこの部隊に居る青髪の女とかも化物というか、寧ろ無機物に近いと思うが？」

「……てめえ！！今誰を化物呼ばわりしやがった！？」

後から来たヴィータがアंकに向かって怒鳴りつける。

「これはこれは。犯罪者までおそろいとはなあ……。っと！！」

アंकは今度はヴィータを罵倒しようとしたが、後ろから飛んできた火球を避ける。

「もういい。てめえは一言も喋るな……」

飛んできた先には、アंकの左腕と左翼を展開させたアキラが居た。

「ククク・・・、いいなあ。その怒りという欲望・・・」

「ふざけんな！！！！」

アキラは左手でアंकに殴りかかる。しかし、それはあっさり避けられ、逆に腹に膝蹴りを入れられる。

ヒュッ

ズドッ

「ガハッ！？」

アキラは鳩尾に蹴りを入れられた衝撃でうずくまってしまふ。

「ハッハア！！・・・何だよ・・・、大口叩いておいてその程度かオラア！！！！」

ドガア

「ゲホッ！？」

「くたばれ餓鬼が」

バキッ

ドガァン

アंकはアキラを蹴り上げ、さらに背中に踵落しを決める。ほぼ零距離からの踵落しを喰らったアキラは気絶。同時に地面に体がのめりこんだ。

「キヒヒ・・・、じゃあ、俺の腕と翼を返してもらおうか」

そう言つてアंकは左手を近づけるが、それをすぐに引つ込め距離をとった。すると、そのアंकの予想は当たっていたのか、アキラは炎が揺らめくように消えてしまった。

「なにっ！？偽者だと!？」

「本物はこつちだよ化物」

アंकは驚愕するも、声のした方を見る。そこには気絶したアキラを抱えたフェイトと、一つ目の火竜がこちらに向けて火球を構えて

いた。

「放て虚空!!」

ズドオオオオオ!!

「!?!?ツアアアアアアアアアアア!?!」

アंकは咄嗟に翼で防ごうとするも、間に合わず直撃を貰ってしまった。

そしてそのまま、10メートルほど吹き飛ばされてしまった。

「ヘッ!!ざまあみろってんだ!!」

「アキラ!!しっかりして!!」

宗助はアंकが倒れた方向に向けてFOOKをし、駆けつけたスバルは気絶したアキラを気遣っていた。

「おいおい……。いてえじゃねえかよ」

「!？」

「う、嘘……」

スバルや他のメンバーが驚愕する中、アंकはゆっくりと出てくる。その身には、先程とは比にならないような火球を携えていた。

「ば、馬鹿な……。俺は全力で打ったはずだ!!!なのに「五行比和」……五行比和だと？」

宗助は明らかに動揺しながら、アंकに向けて叫ぶが、アंकはそれを聞きなれない言葉を被せた。

「即ち、火に火は聞かねえってことだあ!!!!」

ブン!!!

アंकは叫ぶと同時に宗助に向けて火球を放った。

「!!!『伍式・円』!!!」

宗助は瞬時に結界の能力を持つ火竜『円』を召喚し、結界で防ごうとした。

バリーイイイイン！！

「なっ！？ゲアアアアアアアア！！？」

「宗助さん！！！」

「大島！！！」

しかし、結界はあっさりと破られ、宗助は吹き飛ばされて隊舎の壁に激突した。

「オマエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！」

それを間近で見ていたスバルは、瞳の色が黄色に変わり、戦闘機人モードへと変化してアंकに殴りかかる。

「ふん」

ガシッ

それを見てもアंकは避ける事をせず、右手のみで受け止めて防いだのだ。

「なっ!？」

「ふん!!」

アंकは気合を入れると、右手一本でスバルの腕を後手に捻り上げる。

「ッヅウ!!」

その痛みには耐え切れず、スバルは苦痛に満ちた声を漏らす。

「チィ!!スバ「おっと、動くなよ餓鬼共。この娘の命が惜しけりやな」てめえ!!卑怯だぞ!!」

ヴィータが助けに入ろうとするも、アंकにスバルを盾に出されて、動こうにも動けなかった。

「はっ！！好きなだけ言え！！素直に俺のメダルをよこせば、こいつが死ぬことは無いんだぜ？」

そう言って、アंकはスバルの腕にさらに負荷を掛ける。

「さあ、俺の残りのコアを渡せ。それでこの娘の命だけは助けてやる」

ギリギリ

「ツツアアア！？」

「スバルさん！！分かった！！お前のメダルを返す！！」

「アキラ！？お前何を！！」

「大丈夫です」

そう言って、アキラは自らの左手から内包してあるコアメダルを全て取り出す。すると、アキラの腕が人間のものに戻る。

『・・・本当にいいのか？アキラ』

シグナムがアキラに念話で話しかける。

『良いんですよシグナムさん。このままじゃスバルさんがヤバイです。コアを渡してでも、やつからスバルさんを取り戻さないと。それに、俺の本当の力はこれじゃないのは、周知の事実でしょう？』

念話でそう言って、アキラは一步前が出る。

「ふん。さあ、1、2の3で同時に交換だ」

「分かった」

アキラはコアメダルを構えて、右手で投げようとする。だが、アークはその瞬間、別の場所が気になった。

(左手を後ろに隠してる・・・？まさか、何かを隠してる！？)

そう考えたアークは、右手にセルメダルを握り締める。

「1、2の3!!」

そういつた瞬間、アキラはコアメダルを投擲し、同時に左手に持っていたオレンジ色の缶・・・『クジャク・カンドロイド』を起動させて放り投げる。

すると、クジャク・カンドロイドは文字通り、孔雀のような姿に変形し、メダルをアंकとは反対方向に弾き返そうとする。

「させるか!!」

「きゃあっ!!」

ガキン!!

アंकはスバルを横に放り投げ、右手に握っていたセルメダルを親指で弾いてクジャク・カンに当てる。そのメダルは弾かれた事によって、弾丸なみの速度を生み出し、クジャク・カンを破壊した。

そして、5枚のメダルは全てアंकの足元に落ちた。それをアंकは拾い上げる。

「ククク・・・。残念だったなあ。小僧。約束どおり、メダルは返してもらったぜ?」

そう言って、アंकはメダルを胸に当てて全て吸収させた。

「ハアアアアアアアアアア!」

ゴオオオオオオ!

すると、アंकの右側の顔、左手、左翼にセルメダルが集中し、それがなくなると、紫の表皮が丸見えだった顔は、金の羽根を思わせるような形へと変わり、左手と左翼も右側のものと同じく左右対称の姿となった。

「あ・・・ははは・・・ははははははははははっ!!! あはははははははははは!!!」

ゴオオオオオオオオオオ!!!

「ぐう!!!」

アंकは歓喜のあまり高笑いをする。それに応えるかのように、ア

ンクの体から余剰エネルギーが波動として体から漏れ出す。その波動に、6課メンバーは膝を付いたり、体を抱え込んだりしてしまう。

「はあゝあ……。さあ、ここからは俺の独壇場だあ……覚悟はアアアアアア!?」

ドゴオオオン!!

アंकは6課メンバーに近づこうとするが、何者かと衝突して吹き飛ばされる。

「つつつ……。お前……!!ゾウ・ヤミーか!!何でここに居やがる!?!」

「グウウウ……」

アंकと激突したのは、重量系メダルの力を使って、足止め用に生成した象の姿をしたゾウ・ヤミーだった。アंकはそいつに怒鳴りつけるも、ゾウ・ヤミーは呻くばかりで立ち上がろうとしない。拳の果てには、セルメダルに戻ってしまった。

ガキンガキン!!

「何！？バインドだと！？」

突然アंकに桃、黄、白色のバインドが掛けられる。そして、その掛けた相手がゆっくりと空から降りてきた。

「よくも私の部下と弟を痛めつけてくれたね・・・」

「許さない……。貴様だけは絶対に・・・！！」

「貴様を公務執行妨害及び管理局員への暴行の容疑で逮捕する。覚悟しろ化物」

「やっとのお出ましか。フェイト・T・ハラオウン、高町なのは、そして・・・レイ・メイステーマー！！」

アंकは叫ぶと、バインドをセルメダルに還元させ、レイに向けて炎を放つ。

「レアスキル・攻撃無力化」

しかしレイは全く動じずに、そう唱えると、炎がまるで消しゴムで

消されたかのように消える。

「チィ！！ハアアアアア！！！」

アंकは遠距離からの攻撃を諦め、レイに殴りかかる。

「ガディアス。ミカエル」

『set up』

するとレイの体はあの時と全く同じ神々しい姿へと変わり、左手にはアंकがジンであった時の相棒であるガディアスが握られていた。

レイはガディアスでアंकの拳を次々に捌き、反対の手に持っているデビルブレイクでアंकを切り裂いた。

「ガハア！？」

ジャララ

アंकのきられた箇所からセルメダルが零れ落ちた。そしてそれを見た瞬間、アंकの怒りが急速に収まっていった。

「チィ!!おぼえておけ小僧共!!てめえらは必ず!!俺が地獄に叩き落してやる!!!!」

ゴスッ

ドガアアアアアアン

「ぬっ!?!」

アंकは地面に拳を叩きつけ、そこに炎を注入する。すると突然、地面が爆発した。レイを含む6課メンバーは、突然の爆発に目を瞑り、それが収まって目を開いた時には、すでにアंकは転移した後だった。

「ちい……、逃がした、か……」

「あんまり歩かないほうがいいよ宗助」

宗助はフラフラの体でレイに近寄る。レイは一応は忠告していくも、宗助は首を振る。レイは、宗助が話を聞くような奴ではないと知っているので、半ば諦め状態である。

「みんな！！遅くなってごめん！！怪我は無い！？」

「大丈夫です。でも、アキラさんの腕が・・・」

そう言ってスバルは、元に戻ってしまったアキラの腕をチラリと見る。

「気にしないでスバルさん。僕としては、化け物の腕から開放されて清々してるところだから」

そう言って、アキラは無事を表すように手をブラブラとふる。

一方、レイと宗助は二人きりで話し合っていた。

「・・・レイ。奴に会ったことは？」

「今のところは覚ええないよ。宗助は？」

「あんな化物にあつたら、忘れたくても忘れられるかっての」

そりゃそうか、とレイも同意するかのようにはやく。

その後、聖王教会に出向していたはやてとティアナは、正面の庭が大変なことになっているのに若干啞然としたが、レイに事情を聞いて皆がたいした怪我が無いことを知ると安堵すると共に、自分達の居場所である6課を襲撃したアंकに対して激しい怒りをおぼえた。

「アंकのアジト」

「ガハア！！ウツ・・・グウウウ！！！！？」

アंकは何とかアジトに戻るも、撤退する前に喰らったデビルブレイクの攻撃が尾を引いて痛んでいるため、戻ったと同時に床に倒れこんでしまった。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ふう」

数刻後。

アंकはどうかか激痛を乗り越え、何とか人間態に戻る。同時に拳を地面に叩きつける。何度も何度もたたきつけた。

「クソッ！！やっと奴を倒せるかと思ったのに！！クソッ！！クッソオオオオ！！！！」

アंकは嗚咽を出しながら、何度も拳を地面に叩きつける。叩きつけている手からセルメダルが零れ落ちるが、その程度知ったことではない。

彼は悔しかった。

死ぬほどの痛みを味わって、やっと手にした力だった。だが、奴には届かなかった。

所詮、落ちこぼれはどんな力にしても天才には敵わない。

誰かがそんな事をいつていたような気がする。まったくもってその通りだ。

自分を落ちこぼれや凡才だと思っている奴は、自分の才能に気がついていないだけだ。

誰かがそんな風にも言っていた気がする。確かにそれも一理あるだろう。

だが、彼はどうなのであろう？

彼は生前、ありとあらゆる事を試した。

ミッド中にある戦闘に関する記述や古文書、果ては禁忌とされたミッドと他の魔法を混合させて実力をあげようとした。

しかし、それらのどれ一つとして実らなかった。

一つの事を極めようとした。

だが、所詮は落ちこぼれ。極めるどころか、初歩中の初歩を習得するのがやっとといった状況だった。

それは復活した後も続けた。

いつか実る。必ず実る。俺には必ず力が宿るんだ。

彼はそう信じ続けた。そしてついに彼は手に入れた。

グリードという力を。自らの身を犠牲にしても、ようやく手に入れた力だった。

それはあっさりと破られた。

レイという名の少年テンサイによって。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

暫くしてアंकは泣き止んだ。しかしその目は虚ろで、何処を見ているのかすら分からなかった。

アंकは徐に懐に手を伸ばし、オーズドライバーを装着する。すると、そこからベルトが伸びて、両サイドにメダルケースとオースキヤナーが装着された。

そして、腕から10枚程メダルを取り出して、宙に投げる。同時に、

スキャナーを手にとって、なんと投げたメダルをそのまま読み込ませた。

『クワガタ！ライオン！シャチ！ゴリラ！コンドル！タカ！カマキリ！プテラ！コブラ！ワニ！』

するとメダルからオーリングサークル型のエネルギーが現われ、順にアंकクの体に取り込まれていく。

そして、それが全て吸収されると、アंकクは歪な笑いを見せた。

「・・・すっかり忘れてたぜ」

そう言って地面に座りこんだアंकクの顔は、清しい程に邪悪に満ちた顔をしていた。

「所詮この世は弱肉強食。強い奴が生きて、雑魚は食われるのみ。それは人間界でも変わりはないんだっとなあ・・・」

「そして、落ちこぼれは死ぬほどの努力をしても、天才には勝てない。だったら、確実に死ぬるほどの努力を積み重ねればいいだけだつて事をなあ・・・ククク」

そして、アंकは再びメダルの力を体に取り込み始めた。

↳機動6課・会議室

そこには、オリキャラを含めた全てのメンバーが揃っていた。その中には、かつて大魔導士と呼ばれたプレシア・テスタロッサやその娘、アリシア・テスタロッサ、そしてJS事件の首謀者であるジェイル・スカリエツィやその娘達であるナンバースも殆どが揃っていた。だがその顔は、緊張のせいかわわばっていた。

それを視界に納めつつも、はやては話を切り出した。

「さて、早速やけど、先日起こった研究所襲撃事件と今回起こった6課襲撃事件はうちら機動6課が担当することになったんや」

その一言に、殆どのメンバーはざわめいたり、目つきをキツクしたりした。それを踏まえてはやては話を進めていく。

「それにはキチンとした理由があるんや。カリム」

『ええ』

すると、はやての隣にモニターが出現した。そこには、長髪でお淑

やかそうな女性『カリム・グラシア』が映し出されていた。

「実は、つい先日新たな予言が出たのです。」

その言葉に再びざわめきが起こった。

カリムのレアスキル『プロフェーティン・シユリフテン』。通称『予言者の著書』は、二つの月が合わさる時にしか発動せず、大体10年に1度しか発動しないといわれている。そしてJS事件の時に既に発動しているのです、本来はつぎに発動するのは後9年近く待たなくてはならない。

それが、JS事件が終息して1年しか経っていないのに発動したというのだ。寧ろざわめかない方がおかしい。

カリムもそれを承知しているので、皆が納まるまで待ち、収まった所で予言の内容を切り出した。

「・・・では、今回の予言の内容を話します」

そしてカリムは予言を読み上げ始めた。

その予言は、周りを凍りつかせるのには、十分な言葉だった。

カリム」

王は法と秩序に守られし世界を恐怖と絶望に

陥れるであらう」

．．．NEXT EXPECT

予言とチートとハッキング（後書き）

今回は予言の内容が明らかになります。

多分、ほとんど戦闘はないです。

ではまた、次回にてお会いしましょう。

聖と欲とオリヴィエの記憶（前書き）

ヤミー……。いつ登場させよう……。？

今回は予言以外にも、この世界のアンク達が登場します。

もちろん、アンクだけではなく、ウヴァやメズール達も登場しますよ。

ただし、現実世界というわけではなく、あくまでもある人物の記憶上のなかでの話ですが……。

ついでにいつておきますが、最初にupしたところとは展開はともかく、そこに至るまでの過程が全く違います。

なお、この章は残虐な表現どころか、かなり暴力的なシーンがあります（もはや性癖の1v1）。心臓が弱い方は、お医者様がいらっしゃる所で読んでください。

聖と欲とオリヴィエの記憶

SPECIAL EDITION MAGICAL GIRL
IRICAL NANOHA STRIKER'S "GREED
OF GREED"

前回の三つの出来事。

1つ。アंकが6課を襲撃し、自らのコアメダルをすべて取り戻す。
2つ。完全体として完全復活を果たしたアंकは6課を圧倒するも、過去に自分を殺したレイ・メイステイマによって深手を負わされてしまう。

そして3つ。アंकはコアメダルの力を、今度はオーズの力で取り込み始めるのと同時に、6課では新たに出現した予言の内容を聞かされていた。

↳6課・会議室↳

そこには、前回と同じメンバーが座っていた。ただ一つ違うところがあるとするれば、本来はやてが座る場所に、高町なのはの娘、高町ヴィヴィオが座っていることだ。

そのヴィヴィオの頭には脳波計のようなものがつけられており、その調整を、ナンバーズの4番目・クワットロ・ハラオウン（何故かハラオウン家の養子となっていた）と、6課専属メカニックのシャ

リオ・フィニーノ（通称：シャーリー）が行っていた。

そしてクワットロは、調整中の画面に目を向けたまま、説明を始めた。

「この装置は、頭の奥底に眠る記憶を私たちの脳に直接ダウンロードする装置よ。もしさっきの予言が当たってるなら……クローンであるヴィヴィオの記憶にやつを倒すヒントがあるはずだわ」

クワットロはクローンという単語を余り出したくなかったのか、苦い顔をしながら話した。ちなみにクワットロの手は、右手ではコンソールに何かを打ち込みながらも、左手は無意識の内にヴィヴィオの頭をなでていた。

「聖王に破壊されし紅き欲望、死神のてにより別の意思を持って蘇らん」

「紅き欲望は十字架を折り、法の船の船員である地、海、空の猛者達をことごとく薙ぎ払い、夜天の主を守る4人の騎士達をも倒し、救世主達すらも消滅させ、法と秩序によって治められし世界を絶望の淵に陥れん」

「その者は最強の救世主に敗れし者。欲望は復讐を糧に生きていく」
「紅き欲望は緑、青、灰、金、紫、黄の欲望の塊を摺りこみ、欲望の王へと進化するであろう」

「王を倒したくば、聖王の記憶を辿ると良い」

上記の文は、カリムが告げた予言の内容である。

その内容に6課メンバーは啞然とした。

普段のカリムの予言ならば、何らかの文章体で成り立っていた。しかし、今回は文章どころか豪く短絡的な文章なのだ。

しかし、今までカリムの予言はかなり曖昧ではあるが、ハズレたためにはあまりないため、メンバー達は渋々ながらもヴィヴィオに了承を得て彼女の頭の中にある、聖王・オリヴィエの記憶をダウンロードすることとなったのだ。

「それじゃいきますよ。用意はいいですか？」

その言葉と共に全員が輪を作るように手をつなぐ。何でも、対象の記憶をダウンロードするためには、その計器を繋いだ相手と肉体的に繋がる必要があるらしく、それが手を繋ぐという手段になったのだ。

「では、いざ記憶の旅へ」

そう言ってシャーリーはコンソールを操作する。シャーリーが操作をし終わり、視線を皆の方に戻すと、全員が目を瞑って微動だにし

ないのを見て、シャーリーとクワットロは成功を悟った。

（過去・聖王神殿）

巨大な神殿の真ん中にて、ヴィヴィオと同じ外見をした女・・・オリヴィエ・ゼーゲブレヒトが立っていた。その周りにはこの精鋭ともいえる5人の人間が集まっていた。

全員は前にある扉を、一瞬たりとも気を抜かずに睨みつけていた。

ドガアアアアアアン！！！！

「「「「「！！！！！！！！！！」」」」」

すると突然、扉が爆発した。そしてそれを見た瞬間、全員が一斉に構えた。そして、その爆発した扉の奥から、5人の男と1人の女が姿を現した。

「これはこれは聖王陛下。ご機嫌麗しゅう」

中央にいる男は、わざとらしく大降りに礼をした。

「……よくも抜け抜けと私の前に姿を現せましたね。欲望王・アストラ」

「おやおや。なんのことです？」

「とぼけるな！！貴様が自らの欲望を満たすために、多くの民達を殺害したのは分かっているのだ！！」

オリヴィエの近くにいた精鋭の一人が、アストラに向けて声を荒げた。それに同調するようにオリヴィエはアストラをにらみつける目を再び強くする。オリヴィエは伝承にあるような温和な性格とは真反対に、アストラと呼ばれた男に対して、激しい怒りを向けていた。

「……アストラ。もう体裁図るのは無理っばいよ？」

「……らしいなあ、カザリ」

今まで黙っていた灰色の髪をした青年『カザリ』がそついうと同時に、アストラは聖王に対して敬語を使うのをやめた。

「ああそうさ。確かにおれは民共を殺した。だがそれがなんだ？おれが欲を満たしてはいけないのか？あ？」

「……アストラ。あなたには失望しました。せめて反省の念を持っていれば、刑は軽くしてあげよう思っていました。あなたをここで倒さねば、未来に悪影響を与えます」

そういつてオリヴィエはファイティングポーズで構え、精鋭たちも一斉に各々のデバイスを出現させる。

だが、構えたのはオリヴィエ達ではなかった。カザリ達はそれぞれ、猫、鳥、サイ、シャチ、昆虫を模した怪人へと変貌し、アストラは楕円形の物体・・・オースドライバーを腹部に装着させ、懐からタカ・トラ・バッタのコアメダルを取り出してスロットに装填し、バツクルを傾けた。そして右側に着いていた円形状の物体・・・オースキャナーを持ち、コアメダルの上に滑らせていき、終わったのちにこう呟いた。

キキキーン！！

「変身」

『タカ！！トラ！！バッタ！！タ・ト・バ タトバタ・ト・バ』

すると彼のまわりを無数のメダル状のエネルギーが回転し、その中からタカ・トラ・バッタの順にメダルが選択され、スキャナーから若干くぐもった男の声で歌が流された。

「欲望の王・・・オーズ」

「みんな。おれは聖王を殺る。お前たちは好きなやつをやれ」

ドン！！

「!?!?くっ!!」

ガギイン！！

そう言つて、アストラ・・・いやオーズはバツタレッグの力を用いて高く跳びあがり、トラクローを展開してリヴィエへと奇襲を仕掛けた。それにいち早く気がついたオリヴィエはバックステップで後ろに回避する。

「陛下!!」

「おっと。お前の相手は俺達だ」

精鋭の一人がオリヴィエの元へ向かおうとしたが、それを虫型の怪

人・・・昆虫系のグリード『ウヴァ』が阻止する。

「チィ！！どけ貴様ら！！」

「それは出来ない相談ね。だって私達は王の命令で動いてるんですもの」

そう言つてシャチの頭をした怪人・・・水棲系のグリード『メズール』はおふざけ半分で対峙をしようとする。

「メズール。おふざけ半分でこいつらの相手をしてないほうがいい。こいつらはそんじょそこらの奴とは違うからなあ」

「わかつてるわよアंक」

そついつてメズールを咎めたグリードに、記憶を見ているものたちは驚いた。その注意した人物は、現実世界で対峙しているアंकに名前も姿もそっくりだったからだ。

「メズール。俺、お腹空いた」

「だったら、こいつらみ〜んな、セルメダルに還元しちゃいましょ

う。だから頑張っつてね？ガメル」

「うん！！俺、頑張る！！」

そういつて敵に突撃していくのは、重量系のグリードである『ガメル』である。子供のような無邪気な性格と、よくメズールやアストラに甘えているのが特徴だ。

ガメルは精鋭に突進していく。精鋭は魔力弾を放ってそれを止めようとしますが、ガメルはどこ吹く風で突進していき、そいつにアツパーを一撃食らわせた。その一発でその精鋭は隣の部屋の壁を突き破って別の部屋へと吹き飛ばされてしまった。

「あつ！？待てメダル！！逃げるな！！」

〇〇〇本編を見ている方ご存知であろう。ガメルは巨漢な分、スピードはないが力が強い。だから、例えばアツパー一発でも喰らうと、先ほどの精鋭のようになってしまふのである。例えるならば、一切武装していない人間がゴジラに登場したデストロイヤーという怪獣と素手で戦おうとするくらいである。

まあ、兎にも角にもガメルは自分で吹っ飛ばした精鋭を追って別の場所に行ってしまった。

「ちよつとガメル！！どこいくの！？・・・はあ、まあいいや。僕

はこいつの相手をするこじょうつと」

カザリは一度はガメルを止めようとすも、その性格を思い出して止めた。そして、自分の目の前にいる敵に目を向けて爪を構える。

「ふん……。こい化物」

精鋭は自らの手の甲に着いている鉤爪を舌で舐め、再び構える。

「言われなくても!!」

ズドン!!

そういつてカザリは精鋭へと突っ込んだ。

ガギン!!

「はっはー!!..!どうした聖王!その程度かあ!?!」

「ぐううー!!調子に乗るなあ!!!」

バチィ!!

「ぬっ!?ツアア!!」

ドガア!!

一方、オーズとオリヴィエの死闘は、何とオーズが戦局を握っていた。オーズはコンボ以外の亜種形態を上手く使いこなし、少しずつオリヴィエを追い詰めていった。

しかし、たった今オリヴィエはトラ・クローを弾き、今まで当たらなかつた拳がついにオーズの腹にクリティカル・ヒットした。その瞬間、オリヴィエは流れを掴み、戦局は変わった。今度は終始、オリヴィエが圧倒し始めたのだ。

ドガッ

「ツアツツ!?調子に乗るな小娘!!」

オリヴィエに吹き飛ばされて地面を転がるオーズ。オーズは立ち上がりながら、メダルを交換してスキヤナーをベルトに走らせる。

キキキーン!!

『クワガタ!ゴリラ!チーター!』

するとオーズの体が、今までのタカ・トラ・バッタを模した物から、クワガタのような頭の角、ゴリラのような強靱で鋼の腕、チーターのように素早そうな足へと変わった。それに伴い、胸のオーラングサークルも、タトバからクワガタ・ゴリラ・チーターのものへと変わり、その姿を『オーズ・ガタゴリーター』へと姿を変えた。

「オラア!!」

ヒュッ

「ふっ!!」

スカッ

オーズはゴリラアームでアッパーを繰り出すものの、オリヴィエはそれを紙一重で避け、一度距離をとる。

「下がったのが運の尽きだ!!喰らえ!!」

ドガガン!!

「なっ!?!ウアアアアアア!?!」

オーズは一瞬腕を引いて、すぐに突き出す。すると、腕の装甲がまるでロケットパンチのようにオリヴィエに向けて発射された。それを確認したオリヴィエだったが、回避行動中だったために咄嗟に腕を前に出して防御の体制にして、ロケットパンチのような物・・・『ゴリバゴーン』を受け止める。しかし、その衝撃を勢いを受け止めることは出来ず、壁に叩きつけられた。

「・・・ふう。どうだ聖王?これがめえが信条とする守る力とやらの限界だ。所詮欲望には勝てやしねえんだよ」

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・。だ、黙りなさい!!」

オリヴィエはそういうも、左腕は変な方向に曲がり、過激な戦闘で足元はおぼつかない。

「やれやれ。その減らず口がどこまで叩けるか、見ものだな」

そういつてオーズはゴリラのメダルを取替え、代わりにウナギのメダルをスキヤナーに通す。

『クワガタ！ウナギ！チーター！！』

するとオーズの体がゴリラから鞭のような武器を腕に着けた姿『オーズ・ガタウーター』へ姿を変えた。

「さあ、精々逃げ回れよ聖王さんよお！…！」

ビュン！！

「くっ！？」

バシィ！！

オーズは腕についているウナギウィップを器用に振るい、オリヴィエを追い詰めていく。対するオリヴィエは腕が折れてしまっているため、逃げ回ることが精一杯であった。

「さて、今度は避けられるかあ？はっ！！」

ドバアアアアアア！

「うあ！？み、水！？」

なんとオーズは手から水を放出し、オリヴィエの足元や周辺のみをぬらした。もちろん、オリヴィエにもかかったものの、多少しかかかっていなかった。

「・・・こんな水でどうしよう」と

「確かにただの水だな。・・・が」

そこまでで口を止めると、オーズは頭のクワガタ・ヘッドに力をこめる。すると、角から緑色に光る雷が奔り始めた。

「純度100%じゃない・・・不純物の水に電気を流せばどうなるかなあ？オラア！！！」

バリバリバリバリ！！

ついに気絶して首を枝垂れさせた。

「チッ。なんだよもう終いか」

ブンッ

ドサッ

詰まらなさそうにオーズは気絶したオリヴィエを捨てる。

「なんだ。そっちも終わってたのか」

「ん？なんだ、アंक。お前らの方は終わってたのか」

そういつて血みどろのアंकが此方にやってきた。その手には多分
精鋭だと思われる死体が引き摺られていた。何せ、血みどろ状態だ
から判別不能で、アंकがその場でセルメダルに換金してしまった
ため、不能というよりも不可能だった。

「……その様子じゃまだ終わってなかったみたいだな」

「いや、もう終わる」

そういつてオーズは、先程のゴリラを含めた灰色系のメダルを3枚取り出し、ドライバーに読み込ませた。

『サイ！ゴリラ！ゾウ！！サゴーズ・・・サゴーズ！！！！』

「ふん！」

オーズは余波を吹き飛ばすかのように腕を振る。その姿は、クワガタとは違う、サイのような角と、ゴリラに似た腕、そして像の顔があしらわれた足・・・、所謂重量系の動物達で揃えた姿だった。その名を『オーズ・サゴーズコンビ』である。

オーズを見ていた方ならご存知かもしれないが、オーズには大きく分けて2種類の姿に分けることが出来る。

属性や種類に関係なくメダルを使う『亜種コンビ』。

そしてアंकのならアंकのもの、ウヴァのならウヴァの、といった風に特定（簡単に言えばグリードが持つ全3種）のメダルを使った形態の『コンビ』の二つである。

今回はパワーに優れるガメルのメダルを用いて組んだ、サゴーズに変身した。

「さあ聖王。この世とのお別れをしなあ！……！！……！！……！！」

そう叫んだと同時に、オーズはその拳を振り下ろす。

ガギンバギイ！！

「グオ！？」

しかし、その拳はオリヴィエの中から出てきた何かによつてはじかれ、逆にオーズは吹き飛ばされてしまう。そしてそれに従うかのようになりヴィエは立ち上がり、そして何かは彼女の周りをクルクルと回る。

「アストラ！！何だ今の音！？」

その何かの音に気づいたのか、別の部屋からメズールやガメル達がやってきた。

「俺が知るわけねえだろ！！とにかく奴を全力で潰すぞ！！」

キキキイン！！

『スキヤニングチャージ！！』

オーズは若干うるたえながらも、すぐさまメダルを再度スキャンさせる。同時に、両足を揃えて空に跳び上がる。そしてそのまま地面に着地する。すると、彼女の周りを抉れた地面の破片やらなんやらが彼女の足を包み、そのままオーズの方へと引き寄せられていく。しかし、なぜかオリヴィエのは焦る様子が全くない。

「ハアアアアア……」

オーズはそれを気にしながらも、腰を落として、両手を腰につけて深く構える。そして彼女が零距离まで来た瞬間、角と拳をオリヴィエの体に突き立てた。

「おら「はあっ！！」「ウグウアアアアアア！！？」

パキイイイイイイン！！！！

はずだった。彼女は当たる瞬間、紫の波動と虹の波動を発して、必殺技……『サゴーズインパクト』を破壊し、さらには装填されていたコアメダルが全て排出されてしまったのだ。

「ゴハッ！…ど、どうなってる！？」

「俺が知るわけねえだろ！…この！…」

ボウ！！

「フン！！」

ズドオオオオン！！

「なっ……」

怒鳴り散らしながらもアंकは炎を噴射してけん制を図る。しかし、その炎はオリヴィエの手から発せられた冷気によってあっさりと相殺されてしまったのだ。今の炎は決して手を抜いたわけではない。完全態であるアंकの全力である。それがあっさりと相殺されてしまったのは、彼も啞然とするしかなかった。

「お前！！アंक達困らせたな！！許さない！！！」

「ッ！？止せガメル！！お前が敵う相手じゃねえ！！」

突っ込んでいくガメルをオーズはとめようとしたが、ガメルは聞かずにそのまま突っ込んでいく。

「お前！！メダルになっちゃええええええええ！！！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ふっ！！」

ガメルは今出来る全速力でオリヴィエに向かって走り出す。それを見たオリヴィエは、何処からか紫色の斧を出現させ、そのまま腰を落として構えて、そして

「はぁっ！！！！！！」

「うぐうっ！！！！！！！！」

そのままガメルの腹部のベルトをきりつける。それは、ベルト（この小説のグリッドはみな、腹部のベルト状の物に自分の意識が宿ったコアメダルを嵌め込んでいる。無論、そこは透明で厚いバリア状の物に守られているため、スキヤニングチャージのような攻撃でも壊れることはない）に嵌め込まれていたサイ・コアに亀裂を入れるには十分なちからだった。

「きゃあああああああ!?!?」

すると、虹と紫のエネルギーがメダガブリューを包む。それをオリヴィエはメダガブリューを右手に持ちながらそれを下段に構え、身体を流体化して突っ込んでくるメズールに対し反対の手で冷気を放出して凍らせた。そして、先程のガメルと同じようにベルト部分を両断する。同時に、腹部のシャチ・コアが砕け散った。そして氷が砕けてグリードの体に戻ったメズールは吹き飛ばされてウヴァ達の下へと戻ってきた。同時に巻き添えを食らったガメルも吹き飛ばされてきた。

「メズール!!しっかりしろ」

「ウ・・・ウア・・・」

シューウウウウウウ

ウヴァはメズールを抱きかかえるものの、メズールはウヴァの名前をつぶやいただけでセルとコアへと分解されてしまった。

「アストラ・・・、アंक・・・。今までありがとう・・・」

「・・・・・・・・・・アバよ」

「先行って待ってる。ガメル」

「また・・・ね・・・・・・・・・・」

シューウウウウウウウ

一方、ガメルはアストラとアंकが看取った。ガメルが消滅したのを看取ったアंकとオーズはゆっくりと立ち上がり、オーズは無言でメダルを・・・今度は緑系一色に纏めてベルトに装填して、一気にスキャンさせる。

『クワガタ！カマキリ！バッタ！！ガータガタガタキリ バッタ
ガタキリバ』

すると、オーズの体が今度は緑系一色に変わり、その姿を『オーズ・ガタキリバコンボ』へと変化させた。

「・・・・・・・・アストラ。わかってるだろうな？コンボは」

「わかってる。だが、ここで手加減をしていつ本気を出すんだ？」

アंकがいつもにもまして真剣な口調でいつてきたので、オーズは一応答えておく。

「だね。たまには策略なしの戦闘も面白いしね」

そういつてカザリとウヴァも前が出る。

「おっし。行くぞお前ら！！！！」

「「「ああ！！！！」」」

ババババババババ！！！！

すると、一瞬でオーズの体が無数に分裂し、自身の分身であるブレンチシェイドを作り出し、いつせいにオリヴィエに襲い掛かる。

「くっ！？ハアアアアアアアアアアア！！！！」

ゴオオオオオオオ！！！！

『スキヤニングチャージ!!』

『『『『『『『『『『『スキヤニングチャージ!!』』』』』』』』』

「『『『『『『『『『『『オオオオオオオオオオ!!』』』』』』』』』

」

「っ!?!しまった!?!」

オーズ達は一瞬の間を見て、一気に必殺技の体勢に入っていた。オーズ達はいつせいに跳び上がり、キツクの体勢に入った。

「（あの技は体に負担がかかるものですが・・・、致し方なし!!）
聖王・大風壁!!!!」

聖王は突然、バリアの展開をやめ、自身を中心として急速回転をして竜巻を起こした。

ドガアアアアアアアアン!!

そして、そのままガタキリバの必殺技・・・『ガタキリバキツク』と大風気壁が衝突した。そしてそれによって発生した土ぼこりがある。

たりを包んだ。

オオオオオオオオオオオオ・・・

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「う・・・ツァ・・・!!」

「イ・・・ギア・・・!!」

「うぐう・・・!!」

「う・・・ウギィ・・・」

煙が晴れると、肩で息をしながらも立っている聖王と、変身が解けて倒れこんでしまっているアストラ、そして意識が宿ったコアを破壊されかけて、もだえ苦しんでいるアンク、ウヴァ、カザリだった。

「もう・・・諦めなさいアストラ。はぁ・・・貴方に勝ち目は・・・はぁ・・・ありません」

オリヴィエはそういきつて、足に力を入れ直してアストラ達を見る。

「ク・・・クカカ・・・。勝ち目が・・・無いだと・・・？おかしなことを言うなあ・・・！！！」

アストラはふらふらしながら立ち上がり、そして懐から赤のコアメダルを三枚取り出し、ベルトに装填する。

キキキン！！

「へん・・・しん！！！」

『タカ！クジャク！コンドル！タジャドル』

するとアストラは紅く煌く炎を纏って、その姿を最強形態『オーズ・タジャドルコンボ』へと変えた。

「よ、止せアストラ。今そいつを使えば」

「うるせえ。黙って寝てるアंक」

「……………チツ。俺ら先いつて待つてるぜ」

アंकはその危険性を熟知してるのか、とめようとするが、アストラに一喝されて渋々下がった。そしてアंकは、カザリ、ウヴァとともに分解された。

「さあいくぞ。こいつはFINAL ROUNDだ!」

『スキヤニングチャージ!』

『ガブリ!ガブリ!ガブリ!ガブリ!ゴツツツツクン!』

オーズはベルトのメダルをスキャンさせて空中に舞い上がり、オリヴィエは手持ちのセルメダルを全てメダガブリューに装填し、飲み込ませる。そして、もち手の部分を変形させて銃のような構えを取り、銃身と思しき部分をオーズに向ける。

「オラアアアアアアアア!」

『プ・ト・ティラ ノ・ヒッサッ』

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

そしてタジャドルの必殺技・・・『プロミネンス・ドロップ』とオリヴィエの必殺技・・・『ストレンジドウム』はいつせいに衝突して再び土ぼこりを激しく舞いあげる。そして

「・・・・・・・・へっ」

「・・・・・・・・ぐっ」

そこには倒れてひざを突くオリヴィエとふらつきながらも立っているオーズの姿があった。

「・・・・・・・・フッフ」

「何笑つていやがる・・・・・・・・？・・・・・・・・!?!」

しかし、明らかにオリヴィエの様子がおかしい。それが嫌に気になり嫌悪を募らすオーズ。しかし、ふとベルトを見て驚愕した。何故なら、絶対に無くてはならないものが不足していたから。それは

「てめえ!!!タジャドルのコアメダルとスカイナーを奪いやがった

な!？」

「いいえ。貴方から奪ったのはそれだけではありません。これらもです」

「ウヴァ達のメダルまで……………!!」

そう。それはシステムの根幹ともいうべきスキャナーとメダルの二つがなくなっていたのだ。そして彼女は懐からメズール達のコアメダル9枚を全て取り出したのだ。

そしてそれを空中に放り投げて、スキャナーを構える。それだけで、オーズは彼女が何をしようかわかってしまった。

「や、やめろぉ おおぉおおぉおおぉおおぉおおぉおおぉおお!!!!
!!!!!!」

キキキキキキキキキキキキキキキキキキーン!!

『タカ!ライオン!クワガタ!シャチ!サイ!ゴリラ!クジャク!
カマキリ!トラ!ウナギ!チーター!バッタ!タコ!ゾウ!コンド
ル!……………』

グワアアアアアアアアアア！！！！！

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！?!?!? ?!?!?!?!?!?!?!?!」

そしてそれら無数のコアメダルの力を取り込み、オーズは石化・瓦解した。

その後、メダルとドライバーは戦争による混乱とゴタゴタで紛失。その真実を知るオリヴィエも大戦で死亡したため、真実は迷宮入りとなった。

く回想終了く

そして記憶を読み取った直後、部隊長命令によって解散となった。

しかし、そこにいた人物達は誰一人として気がついていなかった。

紅いコアメダル……『タカ・コア』は機械の間に入り込んで記憶を盗み見し、コッソリと立ち去ったということ……。。。。。。。

N
E
X
T

P
E
R
G
E

聖と欲とオリヴィエの記憶（後書き）

やっと終わったよ。1日でこれ仕上げるとか……。無理ぽ。

ではまた次話でお会いしましょう。

永遠と初殺しと恐竜コンボ（前書き）

早くも第6話か……。早いもんだ。

今回は執筆している時に聞いている音楽を書いておきます。

Time Judged All

さあ、地獄を楽しみな

微笑みの行方

小さな手のひら

sweet time

はるかなる愛にかけて

星よ、にじむな！

Bad Apple!!

恐怖の軍団

ロンリー仮面ライダー

………鬱な曲ばっかじゃん。

P・S・

何でだろ。サブタイをオーズの題名に真似たつもりなのに、何かが違うような……。

ついでに、この章から他のライダーの変身アイテムが登場します。

永遠と初殺しと恐竜コンボ

（惑星ムディ）

「・・・・・・・・・・」

アंकはモニターを睨みつけていた。そこには、『L・H・C・J・M・T・S・E』のアルファベットが描かれた8本のUSBメモリに似たような物が順番に並んでいた

「・・・・・・・・・・成る程。これはガイアメモリという名なのか」

そう言つてアंकは一旦モニターから目を離した。

ガイアメモリ……。それは常人が使えば意思を持たぬ怪物へと変化し、選ばれし者が使えば別名『魔性の小箱』と呼ばれる物である。

今回、管理局開発部はある人物から与えられた設計図と方程式図を基にして計8本のガイアメモリを開発し、その内の7本は既に機動6課へと配備したらしい。

しかし、Eのメモリは開発が遅れたため、今日陸士108部隊に配備されるらしい。

「コイツを手に入れば良い手駒になる……。これは奪う他にはないなあ」

そう言っつてアंकは管理局の機密ファイルにクラックを掛けて、運送ルートを調べ上げる。だが、最近は自分達以外からのクラック回数が多いのか、初めの頃に比べれば随分と防壁が硬くなっている。まあ、クラック専用のデバイスがあるので半端な防壁は意味をなさないが。

『I completed a crack. Do you open data? (クラックが完了いたしました。データを開きますか?)』

「そうしてくれ」

アंकはデバイスの呼びかけに応える。するとモニターが勝手に動き出し、クラナガンの地図が表示される。そして道路と思しき場所には所々赤いラインが走っていた。

「成る程……。これなら待ち伏せて襲って奪った方が手っ取りはやいな」

そう言っつてアंकは転送ポートに立ち、何処かへと転移された。

くクラナガン・廃棄都市近くく

シユン

「さて、と……と……」

アंकは懐から赤くしかもどこか黒み掛かった缶を幾つか取り出して、すべてのプルタブを立てる。

プシユ!

すると炭酸の抜けるような音がした後、それは全てタカを模した機械の鳥へと変形した。それを確認したアंकは、配送ルートをプリントした紙を鳥のような物に見せ付ける。

「この配送ルートを周って運搬車を探して来い。見つけたら機体は電波を発して俺と他のカンドロイドにしらせる。そしたら俺が着くまでの時間稼ぎをしている。分かったら早く行け」

アंकの言葉と同時に、鳥……『ダークタカ・カンドロイド』達は一斉に散らばっていった。

「さて、あいつらが戻ってくるまでに、俺は少しでも体力を温存させておくか」

そう言って、アंकは近くの木陰に身を置いて眠り始めた。

さて、カンドロイドが戻ってくるまでの間、アंकが持っているカンドロイドについて説明をしておこう。

言うておくが、前章で高町アキラが使ったクジャク・カンドロイドのように、このミッドチルダにもカンドロイド及びライドベンダーは存在する。ただ、利用者の大半が管理局員やその関係者であり、使用にはマジックコインと呼ばれるコインが必要なため（名前の通り、莫大な魔力が封じられたコインである。ちなみにライドベンダーも魔力を動力源としている）、その存在が余り知れ渡っていないだけである。

アंकはそれを改造し、セルメダルで動くカンドロイドやライドベンダー・・・我々三次元の言葉で言うのなら、本来のライドベンダーやカンドロイドを開発したのだ。

ちなみにカンドロイドはオース本編で登場した全種類が両者（管理局とアंक）共に開発されている。なお、アंकのカンドロイドが若干黒みがかっているのは単純な理由があり、管理局製の物と区別をつけるためだそうだ。

『ピュイイイイイイ！！！』

「ん……。やっと見つけたか」

アंकはダークタカ・カンの鳴き声で起き上がり、自身を怪人態へと変化させてダークタカ・カンの案内の元、その場所へと飛んで行った。

くミッドチルダ・某区く

「な、なんだこいつら!？」

「くそつ!?! 邪魔だどけ!！」

アंकが案内された場所に着くと、大量のダークタカ・カン達がメモリを運搬していた局員(?) 達を襲撃していた。ただ、アंकはその局員達を見て不思議に思ったことがあった。

(……。ん? なんであいつら修道服なんか着てるんだ?)

そう。彼らは茶色を主体とした服ではなく、何故か修道服を着ていたのだ。あの積荷の中身はEのガイアメモリのはずだ。それは先ほど、能力を使って確かめたから間違いない。

となると、考えられる可能性は二つある。一つはクラック先を間違えたか、二つ目は管理局が聖王教会に運搬を委託したかになる。

だが、アंकはすぐに委託の線だと悟った。何故なら、彼が作った（プライム）は現在まで間違いを起こしたことはない。だから、その線は薄いと思ったからだ。

「……………応答せよプライム」

『What will it be?（なんでしよう?）』

すると、左の指についている觸體の指輪の目が点滅する。これはプライムの仮の器である。本体はムディのアジトにあるコンピュータだが、情報が乏しくなると、彼は指輪を中継してプライムの本体にアクセスして情報を得るのだ。

「カリム・グラシア、シャツハ・ヌエラこの二人の現在の動向を10秒で調べる。」

『I sat up straight……became clear.（かしこまりました。……判明いたしました）』

「何処だ」

『I hold a meeting in a place
umber 100km away from here, an
d a place is the Administration
n Bureau main office, and the
pigs of the upper echelon seem
to attend it somehow or other,
too) (ここから数百km離れた所にて会議を行っております。
場所は管理局本局です。どうやら上層部の豚共も同席しているよう
です)』

「そうか。では通信を断つ」

『Warrior's destiny (ご武運を)』

そう言ってプライムは通信を切った。そしてアंकはある物を調達
するために一度アジトへと戻り、戻ると同時にすぐさま局員・・・、
いや、教会の騎士達の元へと向かった。

「しつげえんだよ!!このxxxどもがあ!!!」

下品な言葉を叫びながら騎士の一人が刀を振り回してダークタカ・
カンを撃墜していく。実はこの男、名前を『宮島博人』ミヤジマヒロトと言い、転
生者の一人である。そのため、顔はイケメンでレイ・メイスティー
マ程にはないにしても、かなりのものである。

ちなみに能力は『東方projectの全キャラクターの能力を使えるようになる程度の能力』であるため、記憶にある東方関連の能力を使うことができる（ただし、何故かスペルカードは使えない）。

「ハアアアアアアアアアア！」

そうこうしていると反対車線から一台のバイクが走ってきて、右手に持ったトンファーを一薙ぎした。するとダークタカ・カンはそれを見ると、慌てて撤退していった。

「ふう………。大丈夫ですか？」

「は、はい……。って、シスターシャツハ!？」

宮島を救ったのは何と現在会議をしているはずのシスターシャツハこと、シャツハ・ヌエラであった。その横には、ライドベンダーがバイク形態で止められていた。

「どうして此処に？本日は会議のはずですが？」

宮島は偽者ではないかという疑いを持ちながら問いかけた。

「ああ。それは騎士カリムが忘れ物をしたので、取りに戻るんですよ。……はあ」

シャツハは心底呆れたような表情を見せて、溜息をつく。宮島は念には念を入れてカリムの心を読んだ。しかしその思考はカリムに対して呆れている物が多く、偽者と断定出来る思考は愚か、本人しか知らないような情報まで知っていたので、宮島は本人だと断定した。

「ところで、あなた方はここで何を？」

「はい。我々は管理局から依頼された物を届けに行くところです」

「そう」

そう言って、シャツハは後ろを向いて、僅かに微笑む。それを不思議に思った宮島のつれの男はシャツハに質問した。

「あ。……。どうかなさったのですか？」

すると、シャツハは口元を左手で抑えてこういった。

「やっぱり間違ってたなあ。」

その瞬間、シャツハは大量のセルメダルに包まれて、アंकへと変態した。同時に、連れの男の首を一瞬で撥ねた。男の首は力なくコロコロと転がった。

アंकは騎士達と接触する前に、自身の姿を本来の姿ではなく、シャツハへと変えたのだ。

この行為は擬態というもので、原作でもロストアंकが行っており、その際は赤いチェック柄の服を来た少年に変身し、本物のアंक以外のグリードは皆、これを行っていた。

ちなみに先程用意していた物はシャツハ・ヌエラの写真とライドベンドーであった。

「なっ!?!何をするんですか!?!シスターシャツハ!?!」

「ああ?そのシャツハとか言っやつなら、まだ会議中だろうっよお」

宮島は怒鳴り声を上げるも、アंकは鼻で笑ってそう答えて、変態を解除してオーズドライバーを取り出し、腹部に装着した。

そして、タカ・トラ・バッタのメダルを装填して、オースキャナーでメダルを読み込ませた。

キキキーン!!

「変身」

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ タトバ・タ・ト・バ 』

オーズに変身したアंकは、宮島に向かってトラ・クローを構える。それを見た宮島は、怒りをあらわにしながら刀を構える。

「貴様……。まさかシスター・シャツハの名を語って悪事を働くとは、不屈き者の風下にも置けねえ野郎だ。こい。俺様の愛刀『桜観剣』と『白桜剣』で切り刻んでくれる」

「はっ！！やってみろよ雑魚！！」

「ほぞけ！…！」

ビュッ！！

宮島は叫ぶと同時に白桜剣で切りかかった。

「ぶん」

ガギイン!!

しかし、それは左のクローで防がれる。オーズはメダルをシャチ・カマキリ・コンドルに変えて、再度スキャンする。

『シャチ!カマキリ!コンドル!』

するとオーズの体が、シャチを模した頭・両手に装着されたカマキリのような刀、コンドルのように鋭く紅い脚に変わり、亜種形態の一つであるシャキリドルへと変身させた。

「変わっただと!?!」

「ああ。変わったよッ!!」

ジャジャガイン!!

「ゲアア!?!」

オーズは宮島が驚いた隙を使い、カマキリソードで宮島を切りつけ

る。そこからはオーズは先程とはまるで別人のように両手のカマキリソードを振るい、一撃一撃を確実に入れていく。

「……………さあ、これでフィニッシュだ!!!」

バキッ

「あグっ!!!」

オーズは右手のカマキリソードを仕舞って、空いた手で宮島を殴る。そして奴が接地する寸前に、スキヤナーでメダルをスキャンさせる。

『スキヤニングチャージ!!!』

「はああああ……………」

オーズは深く腰を下ろして、カマキリソードを下に降ろす。すると赤、緑、青のエネルギーがアーマーに走るラインドライブを伝ってカマキリソードへと移る。

「オラアアアアアアアアアア!!!」

それを確認したオーズはそのエネルギー斬撃のように飛ばした。

「時よ止まれ!!」

カチッ

「なっ!? チィ!!」

ガギギギギン!!

そんな声がすると共に一瞬で宮島はオーズの背後に回り、大量のナイフをオーズに向けて投擲する。オーズは一瞬驚いたような顔をすも、すぐにカマキリソードでナイフを全て弾いた。

（何だ今は……。いつ後ろに回った？俺が全く気がつかなかったと？）

「どんどん行くぜ!! オラァ!!」

ゴオオオオオ!!

宮島は右手から炎を放ち、オーズを攻撃する。

「フン!!!」

バシャアアアアア!!!

それに対しオーズは、シャチ・ヘッドから水流を発射して炎を相殺させる。相殺させると同時に、メダルをウナギとバツタに交換し、宮島の炎の放出が終わると同時にスキヤナーにメダルを読み込ませる。

『シャチ!ウナギ!バツタ!』

するとオーズの体が、約3/1が青主体になった、シャウタコンボの亜種形態・シャウバへと変わる。

「ハア!!!」

ビュッ!!!バチィ!!!

「又ガア!?!」

オーズは腕に装着されていたボルタムウィップを振るい、宮島を攻撃する。宮島は突然の事に対応が出来ず、鞭の攻撃を貰った。

「っづう……。この化物があー!!」

ガギユギユギユギユ!!!

宮島はそう叫ぶと同時に、右手の人指し指と親指を伸ばして拳銃状にする。するとそこから、白い弾丸状の物が幾つも発射される。

「ふん……………」

オーズをそれを見て鼻で笑うと、電気を纏わせたボルタムウィップを回転させて盾のようにする。すると銃弾はそこに吸い込まれるかのように近づいていき、すべてが粉碎される。

「化物で結構だ。にしてもめえはうぜえな」

バシィー!!

「ウツッ!?!」

オーズは宮島に向けて話しながら鞭を当てる。

「大した覚悟もないのにこのご戦場に出てきやがって」

ビシィー！！

「アギッ！ー！！」

宮島は苦痛に満ちた声を上げるも、オーズはやめようともしない。

「てめえらは良いよなあ。能力があるから認めてもらえてよお！！」

ギユル！！

「グッ……………て……………め……………何……………言って
や……………が……………る」

オーズはボルタームウィップで宮島を巻き上げ、上空につるし上げる。

「まっ、どの道今からくたばるてめえには関係ねえだろうがなあ。
転生者さんよお？」

「!?!」

宮島は驚愕した。

何故こいつは俺が転生者だって事を知っている？

俺が転生者だと知るのには騎士カリムやシスター・シャツハだけだ。

「さあ、話はここまでだ!!」

ブン!!

「ツアア!!」

そう考えている間に、宮島は上空に高く放り投げられる。

『タカ!トラ!バツタ!タ・ト・バ タトバタ・ト・バ
』

『スキヤニングチャージ!!』

宮島が上空から落下してくる間に、オーズはタトバコンボへと戻り、再度メダルをスキヤンした。すると脚がバツタのような形状になり、オーズは上空に跳び上がる。そのジャンプ力は凄まじく、落下しているとは言え、かなりの上空にいるはずの宮島をあっさり追い抜き、その跳距離はさらに伸びる。

そしてその上昇が止まると、赤、黄、緑のリングが出現する。そしてオーズはそこを潜り抜けていく。すると、鷹・虎・飛蝗のようなエフェクトが出現し、そのまま必殺技『タトバキック』を喰らわせた。

「ゲアアアアアアアアアア!!?!」

ドガアアアアアアアアアア!!

弱りに弱りきっていた宮島はタトバキックの直撃を受け、爆散した。オーズはそれと同時に着地し、ゆっくりと立ち上がる。しかし変身だけは決して解こうとはせず、じっと爆発した場所を見ていた。

グチュ

するとどういうことだろうか。段々と爆散した肉片が集まってくるのだ。そしてそれは、元の宮島の姿へと戻っていった。

「やはりか」

「てめえ……………よくもやってくれたな」

宮島は最早騎士とも呼べない目付きでオーズを睨み、オーズは再生するのが分かっていたかのような立ち振る舞いをみせていた。

「もうてめえは生かしておかねえ。殺してやる!!!!!!」

宮島は殺気を発して牽制を仕掛けた。しかし、宮島の復活前からそれを予期していたのか、オーズは一切慌てやうろたえを見せることもなく、オースレイター（ベルトの中央にあるコアメダルを装填する部分）を水平に戻し、メダルを全て体に戻す。

「どづした!!怖気づいたか化物!?!」

「怖気づく?……………誰に向かっていつてやがるんだ雑魚が」

そう言って、オーズは胸に手を当てる。すると一瞬タカ・アイが紫

に光り、光りが消えると、その手には唯一欠番《10枚目》を含む全てのコアメダルを回収し終えた、種類が違う紫のコアメダルが3枚鎮座していた。

「言ってる化物！！俺には不老不死になる程度の能力が備わってるんだよ！！それになあ、てめえ見たいな化物に安々と殺されてたまるかよ！！俺にはカリム達を墮してハーレムにするって夢があるんだよ！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

カシャ

宮島は聞いても居ない事をベラベラ話し出す。それをオーズは無視し、テイラノザウルスが描かれたメダル『テイラノ・コア』を一番左側のオースレイターへと装填する。

「大体テメエも転生者だろうが！？どうして転生をした！！ハーレムがしたいのか！？それともこの世界を「いい加減その口を閉じる下種野郎が」ヒツ！？」

カシャ

オーズは苛立ちを表に出して、宮島にぶつける。それを殺気と勘違い（あながち間違いいはないが）した宮島は、情けない声を出す。

そしてオーズはトリケラトプスが描かれたメダル『トリケラ・コア』を中央のオースレイターに装填する。

「・・・俺には嫌いなものが無限とあるが、その中でも特に嫌いな物が3つある。1、努力をしないで才能だけでのし上がる屑」

カシャ ガチャ！

オーズは相手にも聞こえるような声で独り言を呟きながら、最後の・
・プテラノドンが描かれたメダル『プテラ・コア』を右端のオースレイターに装填して、それを傾ける。すると、一瞬メダルが紫に光った。

「2、好き勝手に歴史を改変しておいて、それで迷惑を掛けているのにも関わらずそれを知ろうともしない屑共」

そう言って、オーズはオースキャナーを手取る。すると、アップダウンが激しい待機音が辺りに響き渡る。

「3つ目、死ぬ覚悟も殺す覚悟もないのに死神に立ち向かおうとする馬鹿だ」

キキキイン

『プテラ！トリケラ！ティラノ！！プ・ト・ティラ ノ・ザウルス』

オーズはスキヤナーにそれを読み込ませる。すると、プテラノドンのような翼を持った頭部『プテラ・ヘッド』が形成され、肩にはトリケラトプスの角を縮小したような角『ワイルドスティンガー』を携えた胴体『トリケラ・アーム』、ティラノザウルスのような強靱な脚『ティラノ・レッグ』が装着された身体……。『オーズ・プトティラコンボ』が此処に参上した。

「ふう〜……。さあ、糞餓鬼。覚悟は出来てるだろうなあ？」

「ヒッ!?!」

ドガン!!

宮島は再びおびえたような表情を見せるも、オーズはそれを無視して地面に手をつき込む。オーズが地面から手を引っこ抜くと、その手には恐竜を模した顔が付いた、刃の部分がクリスタル状のもので構成された斧『メダガブリュー』が握られていた。

「ふん!!」

ズバン!!

「あぎやああああああああああああああああ!?!!?!?!?!
!?!」

オーズは怯えた表情を見せていた宮島に向けてメダガブリューを振る。その斧は一振りですべての右手を切り落とした。

「ギ……………こんな……………もん……………腕を再生させれば……………!!!」

そう言って宮島は腕を再生させようとしました。しかし、

ビュウウウウウウウウ

ピキン

オーズはその隙を突いて、口から冷気を放出して宮島を完全に氷漬けにした。

読者の諸君は、彼の残酷さを知っているだろう。

アंकは隙を見逃す程馬鹿ではない。

では何故先程から積極的に攻撃を仕掛けようとしなかったのか？

答えは一つ。見極めていたのである。彼が全力で殺すに値する人物か。それを見定めていたのである。

しかし結果は期待はずれもいいところで、全力どころか10/1程度の力を使わずとも殺せる事が分かった。

なら何故、本編では最強とも名高いプトティラを使ったのか？

それは宮島が持つ再生能力に原因がある。彼の再生能力は凄まじい。恐らく、他の技を使って木っ端微塵にしたとしても、細胞の一片でも残っていれば復活が可能だろう。例としては、先程のタトバキックがいい例だ。先程のタトバキックは今もてる全力の力を使って放った。しかし、結果は知つての通り復活されてしまった。ならば細胞の一片どころか、この世にいたという痕跡を消し去るといっただけの出力を持つプトティラコンボの必殺技で消滅させてしまえばいいだけの話だ。

「さあ、GEAM SETだ」

ゴキベキベキ!!

そう言つてオーズは左腰のメダルケースからセルメダルを四枚取り出し、それを全てメダガブリューの口(?)と思しき部分に投入する。そして、手前にあるレバーを操作して、メダガブリューの顎でそれを全て噛み砕かせる。

『ゴツクン!!』

そんな音がすると同時に、オーズはメダガブリューの持ち手の部分进行操作する。すると、メダガブリュー自体が銃のような形になる。それをオーズは銃のように持って照準を合わせる。

「good by」

『プ・ト・テイラ ノ・ヒッサ ツ』

ズドオオオオオオオ!!

そしてオーズは躊躇いなく引き金を引き、必殺技の一つである『ストレンジドウム』を発射した。メダガブリューから放たれた光線

は、宮島を細胞の一片も残さず消滅させた。おまけで最初に殺した騎士も消し飛んでしまったが、まあ問題はないだろう。

「・・・・・・・・ふう」

カシヤ

オーズは溜息を吐いて変身を解除してアंकへと戻った。

「やっと一人殺せたか……。まさかプトティラに変身するとは思っても見なかったがなあ。まあ、さっさとガイアメモリとやら・・・・・・・・ヨッ！？」

バチ・・・バチバチバチ！！！！

突如、メモリの回収をしようとしたアंकだったが、いきなり身体に電撃のようなものが走った。そして次の瞬間

キュイイイイイン

「なっ！？何だこの身体は！？」

アंकが緑色の光とともにメダルに包まれた。するとその姿はいつもの猛禽類を思わせるような姿ではなく、昆虫・・・全体的にクワガタ虫を思わせるような姿へ変わったのだ。

そして、アंकはこの身体に見覚えがあった。

以前6課に侵入した時、奴らが聖王オリヴィエのクローンである高町ヴィヴィオの記憶見ている際にドサクサに紛れて彼女の記憶を盗み見た。

その際に聖王と戦っていたグリード衆の一人の姿と、一部の装甲が剥げ落ちて表皮がむき出しになっているもの、酷似していたのだ。

その名は『ウヴァ』。かつて昆虫の王として名を馳せ、聖王によって破壊されたグリードの一人だった。

キユイイイイイン

しかしそれも一瞬で、すぐに元の人間態に戻った。

「な、なんだっただんだ今は……………」

バサア

アंकは冷や汗を描き、疑問を口に出しながらも、メモリ及び一緒に輸送されていた赤い機械質なベルト『ロストドライバー』を奪い、いつものように翼を出してその場を去ろうとしていた。

「……………」

しかしアंकは一瞬上昇を止め、何を思ったか腕を怪人化させて十数枚単位のセルメダルを近くに放り投げると、そのまま上昇して姿を消した。

残されたセルメダルは、太陽の光を浴びて鈍い銀色に光っていた。まるで元の持ち主であるアंकがここにいたということを証明する目印のように……………。

それから数分後。

いつまで待ってもメモリが到着しない事に疑問に思った108部隊の部隊長『ゲンヤ・ナカジマ』が搜索をしたところ、ほぼ全壊している輸送車を発見。搬送をしていた二人の騎士の行方は、輸送車に搭載されていたカメラによって何者かに殺された事が判明した。

だが、ここでアंकにとって予想外な事が起こってしまった。

何と、その搭載されていたカメラにアंकの姿が若干だが映りこんでしまったのだ。しかも、変身を解除している状態のものである。

運よく顔が写らなかったのが不幸中の幸いであった。

}
T
o

t
h
e

n
e
x
t

s
t
a
g
e

g
o
o
d
-
b
y
e
}

永遠と初殺しと恐竜コンボ（後書き）

ねむ・・・・・・・・。

（現在の時刻、午前2：17）

今回は余りにも眠いので、あとがきは簡素なものにさせてもらいます。

ではでは皆さん。

次回までごきげんよう。

昆虫と進化と水棲コンボ（前書き）

さてようやくの更新にございますね。

今回は6課メンバーはほぼ出ませんでした。今回は一応出てきません。

ちなみに、ナンバーズに関しては性格を把握している者のみ出演します。

今章は個々によっては聖者を侮辱しているような表現が含まれています。なので、もしそういった方々がいらっしゃいましたら、今章の閲読はご遠慮及び次章までお待ちください。

閲読できなくしてしまったことに、多大なる不満をお持ちになられた方々がいらっしゃると思いますが、ご理解をいただくと共に、最大限の謝罪を申し上げます。

昆虫と進化と水棲コンボ

「惑星ムディ・アジト」

「……………」

アंकがETARNALメモリを強奪した1週間後……。アंकはアジトでクワガタ・コアを握り締めて瞑想を行っていた。アंकが瞑想を行っている理由は、1週間前にメモリを強奪する直前に起きた現象……。自身の身体が聖王時代の逆賊であるウヴァへと変身したことである。

もしこれが自由に変身することが可能となれば、戦力と戦略の幅が広がるからだ。そのため、アंकはETARNALメモリの解析をプライムに任せて、自身は自由に変身が可能になるように精神統一も含めて思考の海に潜って方法を探っているのである。

「……………フウッ！」

ゴオオオオオオオ！！！！

アंकは突然立ち上がって、エネルギーを開放し始めた。その色はかつてのような色採々のものではなく、完全に緑一色だった。

アंकは途切れ途切れに自分に対する皮肉と苛立ちに口にしながらウヴァへの変身を解いて床に座り込む。どうやらまだなれない変身のため、本来の姿になるよりもエネルギーを消費するようだ。

「I wonder if I am just available
le Your Majesty?」(陛下。今よろしいでしょうか?)

「なんだプライム」

アंकは疲れているものの、プライムの仮媒体である指輪に顔を近づける。

「I caught the reaction of the
core medal.」(コアメダルの反応をキャッチしました。)

「何処だ?」

「It is the fifth management world,
official name Algarve and
supposes it from a reaction a

nd thinks whether it is an
ect pro-core medal by the esta
blishment of 98.79% . (第5管理世界、正式
名称アルガルヴェです。反応から推測して、98.79%の確立で
昆虫系のコアメダルかと思いません。)

「分かった。コアメダルの正確な座標を調べ上げる」

『Isat up straight . (かしこまりました)』

アंकはそう言って、立ち上がった近く岩をセルメダルへと還元して、それを一度上に放り投げてから身体へと吸収させる。アंकはグリードになったため食事や水分補給を必要としなくなった分、不定期でセルメダルを補充しなくてはならない身体になっていた。所謂グリードにとっての食事である。

『All of you having summons ability I became clear, and the coordinator is 2j8fi3-or39fjc-io
wje326d3-92kdgk-d6y234, and the
obestill called the lusher
e whole families by this spot
settles down, and there is a c
onnection, and of "God wells
and does a core medal, and the
guy and others seem to worship

p t h e A d m i n i s t r a t i o n B u r e a u a s
a s a c r e d m e d a l” (判明しました。座標は2j8
f i 3 - o r 3 9 f j c - i o w j e 3 2 6 d 3 - 9 2 k d g q k
- d 6 y 2 3 4です。なお、この地点にはル・ルシエ一族と呼ばれ
る召喚能力を持つ者共が住み着いており、奴らは管理局とも繋がり
がある上に、コアメダルを『神の力が宿りし聖なるメダル』として
崇めているようです)』

「ほお………。神の力が宿るメダルねえ……ハッ！馬
鹿らしい」

アंकは小馬鹿にしたような表情で嗤う。彼自身は生前も復活後も
架空の神の生存を信じては居ない。というよりも、本物の(死神と
はいえ)神に会ったことがあるために、架空の神を信じる事が馬鹿
馬鹿しくて仕方ないらしい。

『By the way, what kind of inte
n t i o n t o g o f o r b y h a n d i s i t
t h i s t i m e ? (ところで、今回はどどういう手で行くおつも
りですか?)』

「メモリ奪った時に使った手で行く。今回は適当な局員を捕まえれ
ばいいはずだからなあ」

アंकの清々しい程の笑顔を見たプライムはすぐに悟った。

陛下はきつと、捕まえた局員をセルメダルに還元するんだろうなあ
と。

「プライム。ル・ルシエー族の村に転送ポートはあるか？」

『A certain thing has it, but a system for person himself confirmation arrives disgustfully so that a thief and a criminal cannot invade it from a transfer port. (あることにはありますが、盗賊や犯罪者が転送ポートから侵入出来ないように本人確認の為にシステムがウンザリするほど着いています。)』

「いくつだ？」

『There are ten total. Affinger print authentication, the ethernet certification, the voice print certification, the magic all power certification, the locks certification, the figure certification, the device certification, the handwriting certification, the

tification, the DNA certification, the blood type certification are all in this. (全部で10つあります。指紋認証、網膜認証、声紋認証、魔力認証、人相認証、体型認証、デバイス認証、筆跡認証、DNA認証、血液型認証。これです)」

「……やけに多いなあ。それに7つは突破できるが、魔力、DNA、血液型はごまかすことが出来ない。プライム、局の人事部のサーバーにアクセスして俺の偽造戸籍と局員証を作れ。それを使ってル・ルシエ一族の集落に赴く」

「I sat up straight and haven't meto making a little. (かしまりました。作成までのお時間を少々いただきます。)」

「分かった」

アंकはプライムとの相談を終えた後ウヴァへの変身と解除を繰り返す。いくら変身が出来るようになったとしても、まだ一度しか成功していない。だからいざという時感覚を忘れて変身できなくて意味がない。そのため、何度も変身と解除を繰り返すことでその感覚を身体に叩き込むという手段を行なっているのだ。

『Your Majesty. The making of t

he identification of official
was finished. The set of the c
ordinated is completed at the
same time, too. (陛下。局員証の作成が終了致し
ました。同時に座標のセットも完了しています。)

「ご苦労。局員証は？」

『Wait a minute . . . (少々お待ちください . . .
 . . .)』

そう言ってプライムは少し沈黙する。すると10秒程経つとプライム本体からカードキーのような物が出された。そこには『時空管理局・安全管理部所属、レーゲ・カヌード二等陸尉』と書かれていた。

「よし出るぞ。プライム」

アंकはそう言って転送ポートの上に乗る。

『It is transfer the consent!! (了解。転送!!)』

そしてアंकはアルガルヴェという世界にあるル・ルシエ一族が住

む集落へと転送された。

しかし、この情報は別の場所にも知らされていたのを、アंकは知らなかった。

〈6課メンバー・ヘリポート〉

機動6課の移動の要であるJF704式ヘリがプロペラを回して待機しており、そこには6課メンバーと、ナンバース数人が集結していた。

ちなみにそこにいるのは、

高町なのは

ヴィータ

ティアナ・ランスター

スバル・ナカジマ

フェイト・T・ハラオウン

シグナム

エリオ・モンディアル

キャロル・ルシエ

クワットロ・ハラオウン

チンク・ナカジマ

ジェイル・スカリエッティ

ノーヴェ・ナカジマ

八神はやて

高町アキラ

大島宗助

レイ・メイステイマ

の、15人である（他のナンバーズは留守番だったり、他の部隊に出向中）。

「皆集まっとなるな？今回は第5管理世界へ行くで」

「第5管理世界!?!」

はやての言葉にキャラは驚愕した声を出す。それを見越していたかのようにはやてはゆっくりと頷いた。

「第5管理世界・・・正式名称『アルガルヴェ』。そこは召喚が得意な一族・・・つまり、キャラの部族であるル・ルシエ一族が定住しとる世界や」

そう言っではやては一旦話を区切り、キャラの様子を伺う。

一見する限り、キャラは特に落ち込んだ様子はなかった。その目は真っ直ぐ前を見ている目だった。

「（ふう。何とか大丈夫そうやな）ほならそろそろ「部隊長!!!大

変です!!」どないしたんやシャーリー？」

はやてがそろそろ行こうと言おうとした時、6課のメカニック・・・
シャリオ・フィニーノ（通称シャーリー）が焦った様子ではやての
所へ駆けて来た。

「アルガルヴェが何者かによる襲撃を受けているそうです!!」

「何やて!?!」

シャーリーの言葉に全員が驚愕した。これから自分達が行こうと
している場所が、今襲撃を受けてるなんて報告を受けたら、誰でも驚
く。

「場所は!?!」

「場所はポイントk・d6y234・・・ル、ル・ルシエ一族の集
落です!!」

カアアアアアアア

その瞬間、メンバーの下に魔法陣が展開された。

「僕の転移魔法陣だ。このままル・ルシエの集落に転移する。スカリエツティ。あなたはここに残って防衛を固めてくれ」

「ほかならぬ君の頼みだ。断るわけがないよ」

レイがその言葉を言い終わり、スカリエツティが魔法から退いた後すぐに、6課メンバーは隊舎から姿を消した。

〈アルガルヴェ・ル・ルシエ一族集落〉

カアアアアアア

「ふん。此処がル・ルシエ一族の集落か」

さて、時を少しばかり遡るり、6課に集落襲撃の知らせが入る約30分前。

アंकは一足早くル・ルシエの集落の転送ポートにいた。そしてセキュリティをあらかじめ手に入れておいた偽造した局員証や人口血液でごまかした。なお、デバイス認証に関してはプライムにクラックさせてプログラムを弄らせた。おかげでどうにかセキュリティを突破し、集落に入る事が出来た。

セキュリティを突破したアंकは一通り集落を見学した。いざというときの逃走経路を確認するためだ。

（平時は南側入口の警備が薄い……。しかもそこから先は、木々が生い茂った山があり、その先には切り立った崖がある。逃走には持って来いの場所だな）

そこまで考えて、アंकは村長の自宅へと向かった。どうやら事前にプライムが仕入れた情報は本当らしく、神の器と崇められているコアメダルを見るためには、村長の許可が必要なのだ。

「っと、その前に……………」

ピイイイイイイイン

アंकは思い出したかのようにセルメダルを取り出し、丁度人気がない路地にいた人間にメダルを投擲する。すると、人間の後頭部にスロットが現れ、そこに吸い込まれるかのようにメダルが入り込む。

チャリン

すると。その人間の体からミイラ男のようなもの……………白ヤミ

が這いずり出してきたのだ。

「ヒ、ヒイイイイイイイ！！？なんだコイツはあああああ
あ！！？」

男はあまりの恐怖に気絶した。すると、白ヤミーは何かを求めるか
のように何処かへと消えてしまった。

「さて、これで下準備は終わりだ。…………おっと、言い忘れ
たぜ」

アंकはその場を立ち去ろうとしたが、何かを言い忘れたかのように
男へ近づいていき、ある言葉を呟いて今度こそ立ち去った。その
言葉とは、

その欲望、解放しろ…………。

「いちらです」

「ほう。これが噂に名高き神の器ですか」

それから数分後。

ようやく村長と会うことができたアंकは、村長の案内の下、ようやく神の器として崇められているコアメダルの場所へとたどり着いた。

「この神の器は、とある錬金術師が生み出したといわれる器の一部です」

そういう村長の目線の先には、クワガタ・コアが1枚、カマキリ・コアが3枚、そしてバッタ・コアが2枚、岩壁に埋め込まれていた。

「やはり耳で聞くより目で見たほうが一番ですな。さて、では早速神の器に張ってある結界をチェックしましょ」

ドオオオオオオオン！！

アंकがそう言おうとした瞬間、巨大な爆発音が聞こえた。

「なんじゃ今の音は!?!」

突如響いた爆音に、村長は耳を抑えながら問う。

「とりあえず村長さんは村人の安全の確保と現状確認を。私は管理局に連絡を入れていからすぐに結界のチェックをします」

「わかりました！！頼みましたぞ！！」

そういうと、村長はどこから呼び出したのか巨大な獅子に乗って外へと駆けて行った。それを見送ったアंकは、不敵に笑ってオーズドライバーを取り出し、腹部に装着する。するとベルトが伸びて、体からクワガタ・トラ・コンドルのメダルが放出され、自動で装填・カテドラルが傾いた。

オーズはスキャナーを手に取り、カテドラルを沿うようにして、スキャナーにメダルを読み込ませた

キキキーン！！

「変身」

『クワガタ！トラ！コンドル！！』

「オラア！！！！」

バリバリバリバリ！！！！

アंकは一気にオーズ・ガタトラドルへと変身すると、クワガタ・ヘッドにエネルギーを溜め、そのままコアメダルに張ってある結界に向けて放出した。

「チィ……………！意外と堅いな」

ガギンギン！！！！

オーズはそう呟いて、電撃の放出をやめた。そしてトラ・クローとコンドル・レッグの真空刃を使って、結界を切りつけていく。しかし、亀裂どころか傷すらもつかない。

「クソツ……………。こうなれば最終手段だ」

キキキイン

『スキヤニング・チャージ！！！！』

オーズはメダルを再度スキャンして、必殺技を発動させた。すると、ヘッドから両手のトラ・クローに電撃が集まっていき、レッグからもエネルギーが集まっていき、トラ・クローに緑・黄・赤の順番で

エネルギー状の爪が形成された。

「オオオオオオオオオ!!!」

ガギャアアアアアアン!!!

オーズはそれを全力で振り下ろす。その衝撃で火花と余波が飛び散るが、オーズは知ったことじゃないといった感じで、トラ・クローで斬りつけ続ける。

ピシ

「!!!」

ついに待ちわびていた音がした。オーズはその音がした箇所に目を凝らす。そこには、僅かだが小さなヒビが入っていた。

それを見たオーズはすぐさまトラとコンドルを交換し、ゴリラとゾウに変えて、スキヤナーでスキヤンする。

キキキイン!!!

『クワガタ！ゴリラ！ゾウ！！』

「ハア！！！！」

ズドン！！

ピキキツ！！

オーズは姿が変わると同時にゾウ・レッグで亀裂を蹴りつける。すると、今までビクともしなかった結界に、亀裂が入った。

「オツラアアアアア！！」

ドゴン！！

パキイイイイイイイイン！！！！

オーズは止めとばかりにゴリラ・アームを振りかぶって、結界に思い切りぶつける。するとあれ程堅く壊せなかった結界が、まるで飴細工を砕くように、心地いい音を立てて砕け散った。

オーズは変身を（何故かベルトは装着したまま）解除して、嵌め込まれていたコアメダルを慎重に抜き取り、不敵に笑った。

「これでウヴァのメダルは9枚。ウヴァはこれで全て揃ったなあ」

そう呟いてアंकは外に出る。そこでは、左が黒、右が緑の、W型の銀の触角が付いた戦士が、『イカテントウ・ヤミー』と戦かいを繰り返していた。見ると、イカテントウ・ヤミーが不利なようだが、なぜか、その近くには6課メンバーがいた。

戦士はそれを好機と見たのか、ベルトに挿してあったUSBメモリを抜いて、右側の長方形上のスロットに装填した。

『JOKER!! MAXIMUM DRIVE!!』

すると竜巻が巻き起こり、その竜巻を利用して戦士は上にあがっていき、再びスロットをたたく。それを合図にしたように風がやみ、戦士はドロップキックの体勢のまま急降下していく。するとなんと、戦士の体が半分に割れ、そのままヤミーに直撃した。

ヤミーは悲鳴を上げる間もなく、セルメダルへと還元された。

「風……。そしてメモリとあの腹の機械……。なる程、あれがWか」

アंकはそう呟いて、右手と翼を発現させて、手を前に伸ばす。

ジャララララララ

するとヤミーから零れたメダル諸共、全てアングのほうに引き寄せられていき、腕や体に吸収されていく。そして、驚く6課メンバーに対して、アングは不敵に笑ってこういった。

「こんにちわ。元”同僚”さんよお」

「同僚だと？我らは貴様のような奴と同僚になった覚えはない」

シグナムがアングを睨みつけ、デバイスであるレヴァンティンを構える。それを合図にしたのか、ほかのメンバーもデバイスを構え、クワットロは何故か気絶しているティアナを連れて、自身も背後に下がった。

「そうか。やはり俺のことは覚えてないか……。そいつは残念だなあ」

バシユー！！

アングは少し残念そうにいうと、体からメダルが3枚放出され、カ

テドラルに装填、ベルトが傾けられる。

「!?!?あのメダルは!?!」

なのはが驚いたような表情と声をあげると同時に、アंकは口の端を吊り上げてニヤリと笑った。

「俺を覚えてれば」

キキキイン

すると、アंकの言葉に合わせるかのように自動でメダルがスキヤンされ、コアメダルを象ったエネルギー状のオーラングサークルが浮かび上がっていく。

『タカ!』

「もしかしたら俺を」

『トリア!』

「倒せたかもなあ」

『バツタ!』

「変身」

『タ・ト・バ タトバタ・ト・バ』

アंकの最後のワードによって、アंकはオーズへと変身した。

「欲望の王……!」

「ふん……。偽物が」

フェイトは自身の相棒であるデバイス・バルディッシュを構えて、オーズをにらみつける。そしてオーズが一瞬視線を話した瞬間、レイが先制攻撃に転じた。

「デivainバスター!!! バージョン・スタッグ!!!」

『OK・DIVINE BUSTER・ver・staagg』

オーズが飛び上がった上空には、レヴァンティン・シュランゲフォルムを構えたシグナムと、グラーフアイゼン・ラケーテンフォルムを構えたヴィータがいた。

ガシヤンガシヤン！！

両者はデバイスにカートリッジをロードさせ、アイゼンは炎を噴射し、レヴァンティンは紫色の炎をまとわせた。

「ラケーテン・シュラアアアアック！！」

「紫電一閃！！！！」

二人はたがいが得意とする技を放ち、オーズを撃墜させようとする。

（ふん。挟み撃ちで相手を上空に追いやって、空からの追撃で潰す。個人技任せの雑把で対処のしやすいプレーだな）

しかし、オーズはこんな状況でも冷静に分析とを評価を下していた。それらの状況からオーズは、メダルをすべて抜き取り、代わりにシ

ヤチとウナギ、そして新たにタコのコアメダルを装填し、スキヤナ
ーでメダルを読み取らせる。

『シャチ！ウナギ！タコ！！シャ・シャ・シャウタ〜 シャ・シャ・
シャ〜ウタ』

バシャア！！

オーズは復活してから初めてとなる水棲系コンボ『オーズ・シャウ
タコンボ』に変身した。

そして、なんと自身を液化させて、ヴィータとシグナムの必殺技を
避けたのだ。

「「なっ！？」」

「シグナム副隊長の技を避けた！？」

「それにあいつ水になったぞ！？」

二人は驚愕を隠せない。それは下にいる連中も同じだった。

「ハッ！！この程度の事で驚くとはなあ！！」

キキキイン！！

『スキヤニングチャージ！！』

「オラア！！！」

ギユン！！

「なっ！？ムグツ！！！」

「ヴィータ！！！」

オーズは二人を嘲笑うと、メダルを再度スキャンさせ、ウナギウィップをヴィータに巻きつける。突然の行動に、ヴィータは何もすることができず、捕縛されてしまった。

「はああああああああ！！！」

ギユルルルルル！！

「副隊長!」

全員がヴィータに駆け寄り寄ろうとするが、変身を解いた(というよりもコンボを使った上でスキヤニングを使用した事による強制的な変身解除)アंकが、地面に落下し、気絶しているヴィータの頭を踏みつけていた。

「おいおいなんだよ……。俺をいたぶってたのはこんなに弱かったのかよ……」

アंकは心底ガツカリしたような顔でヴィータの頭を踏みつける。

「ヴィータから足を離しやがれ化け物ガア!!! 竜之炎参式ホムラア!!!」

ギョオオオオオオ!!!

宗助は怒声を上げながら、鞭のような炎をアंकに放つ。アंकはヴィータの頭から足を退け、ホムラをあっさりと避ける。

『LUNA JOKER』

しかし、頭から足を離したことにより、戦士・・・Wによって救出されてしまった。

「チツ……………。甘ちゃんどもがあ…………！」

キユイイイイイン

アंकは力を込めて、その姿をウヴァへと変身した。

しかしその姿は、メダルをすべて回収したのにもかかわらず、いまだにセルメン（コアメダルが足りない状態の姿の事。完全体と比べて、上下または一部を残して装甲がなくなり、ベルトがくすんでいるのが特徴）の状態だった。

「ふん…………！」

バチバチバチ…………！！

「…………？キヤア…………！」

ウヴァへと変身したアंक（以下、ウヴァと一括して表記）は、頭

のクワガタを模した角で電撃を放った。

「姉さん!!この!!」

『BURST MODE』

ズガガガガン!!

「何!?ツオアアア!!」

ドシャア

アキラは赤と銀色が施された携帯に『1 0 3 ENTER』と入力し、携帯を銃型に曲げる。すると、携帯から電子音声が響き、アンテナ部分から紅い光弾を発射する。突如発射された光弾を避けることができず、ウヴァはモロに喰らってしまい、地面を転がった。

「今だ!」

アキラはどこからか、武骨な機械のベルトを取り出し、それを腰にまきつけた。そして、先程光弾を射ち出した携帯を元に戻し、『5 5 ENTER』と押して、携帯を閉じた。

「ん」

『STANDING BY』

すると機械音声がして待機音が鳴り響く。

「変身!?!?!」

そう言つてアキラは携帯・・・ファイズフォンを、ベルト・・・ファイズドライバーに垂直にセットしてそれを倒した。

『COMPLETE』

すると、紅い光がアキラを包み、光が収まったところにはその姿はなく、代わりに、どこか鮫のような顔をした戦士・・・仮面ライダーファイズが悠然と立っていた。

「アキ・・・ラ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アキラ・・・いや、仮面ライダーファイズは自らの名を呼んだのはを一度だけみると、すぐに視線をウヴァに戻す。

「ふん・・・。どんな姿になるうが、所詮は雑魚だ。・・・フツ！」

ドン！！

ウヴァはファイズを貶し、跳躍してファイズに攻撃を仕掛ける。

「フリード！！ブレストフレア！！」

「駆けよ隼！！」

「エクセリオン・キャノン！！」

『METAL！！MAXIMUM DRIVE！！』

「メタル・イリュージョン！！」

「スタール・メッサーー!!」

「轟け雷神!!」

「エクセリオン・バスター!!」

「壱式崩!!」

「っ!?アグアアアアアアアア!!」

ズガアアアアアアアアアア!!

ジャリイイイイイイイン……

しかし、6課メンバーの集中砲火にウヴァはやられてしまった。さらに悪いことに、やられた際にセルメダルが剥離し、それと一緒にライオン、タコ、ゴリラ、チーター、トラのコアメダルを手放してしまったのだ。

『!!スバルツ!!』

「わかってる!!」

『LUNA JOKER』

どういふわけか右半身の目が光った瞬間、ティアナの声が出た。それと同時にWはメモリをMETALからJOKERにチェンジして、落ちたコアメダルを回収しようとした。

「ググツ……。さ、させるか!!」

キキーン!!

『タカ!カマキリ!チーター!!』

ウヴァは痛む体に鞭打ち、急いでグリッド化を解いてオーズ・タカキリーターへと変身して、トップスピードでコアメダルの元へと走った。

チャリリン

そんなコアメダルが擦れ合う音がすると、いつの間にかオーズはWの背後にいた。

「くそッ！！たったこれだけか！！」

オーズがあわてて手を開くと、その手にはゴリラ・コアしか握られておらず、悠然の立つWの手には、ライオン、トラ、チーター、タコのコアメダルが握られていた。

「ちい……。まあいい。用事は済んだ」

そう言つて変身を解いて、アंकは先程奪取したウヴァのコアメダルを取り出す。

「！？それはル・ルシエの神器！！」

村民の避難を済ませてやってきた村長がそれを見た瞬間、悲鳴にも近い声を上げていた。

「ハッ、馬鹿か。こいつは飾って見るものじゃないんだよ……。こいつはなあ」

そう言つてアंकは口角を釣り上げて、メダルを上投げる。コアメダルは一枚も下に落ちることなく、すべてアंकの体に吸収され

ガギイン!!

「なにっ!?!」

ウヴァは最高の気持ちに浸りながら、背後から迫っていた獅子の爪の防ぐ。絶対にはれないと思っていた村長は、あっさりと攻撃を防がれたことに驚愕していた。

「ゴミだ。フン!!」

ザザシユウ!!

『ガオオオオオオ!!?!』

「レ、レオオオオオオオン!?!」

ウヴァは獅子の爪を一度はじいて、その腹と顔を同時に切り裂いた。すると獅子は真っ二つに切れ、そのまま霧のように霧散した。

「ふん。たかがこの程度で俺に挑もうとすること自体間違いなんだ

「ガアアアアアア！」ん？」

ウヴァが突如した方向に顔を向けると、そこには火炎球を極限までためこんだフリードリヒがと怒りに満ちた眼をしたキャロがいた。

欲望と姉代わりと弟出現（前書き）

さて、もう8話目です。

早いもんだね全く・・・。

前回は切りのいいところで切ったつもりですが、何か納得のいかな
いところがありましたね・・・。

さて、今回は話が大きく動きます。新たな人物、アंकの心情、そ
して姉代わりともいえるべき存在が出現します。

その姉代わりの人物は、原作の人物のうちの誰かです。

というわけで、今回はプロローグ的なものを作ってみました。では、
お楽しみください。

私はずっと彼を見てきた。小さい頃からずっと。

だから闇に戻る時、私は反対しなかった。自分のやりたいことをやれ、そうとだけいった。

彼は私に何でも話してくれた。悩みも苦悩も何もかも。

だから入局してすぐに、彼が相談しに来た時は全力で相談に乗った。私は彼ではない。けど、相談に乗って手助けをすることは出来る。

私は彼の力になりたいと感じた。しかし、それは敵わなかった。

だから、6課に配属されたものの全メンバーから嫌われている事を知った時は、憎々しさがにじみ出ると同時に、悲しかった。

いつの間にか私は、彼を愛おしく思うようになっていた。

だから彼が犯罪者になったと聞いた時は、悲しみ怒り狂った。

何故彼がこんな目に遭わなくてはならない？

彼は生きるのに必死だったのに。

生きるためには裏の世界に身を墮とすしかなかったのに！！

しかしその言葉は誰一人として届かなかった。

私は側近の一人に聞いた。

「もし、あなたの知人がその身を闇に墮としたらどうする？」

その側近はこう答えた。

「私はその者を軽蔑します。如何なる理由があろうとも、闇に身を墮とすなど人としてあるまじき行為であり、それを生かしておくこと自体、恥ですので」

側近は何を今更といった感じで答えた。

私は悟った。

”ここに私の居場所はない”と。

私は必死に彼を探した。

そして見つけた。

彼は名前を変えて局員や騎士の殺害に奔っていた。

彼が何故殺人に奔っているのかを聞かなければ。

そして、彼の力になれるのなら、なつてあげたい……………。

SPECIAL EDITION MAGICAL GIRL
IRICAL NANOHA STRIKER'S "GREED
OF GREED”

始まります……………。

欲望と姉代わりと弟出現

SPECIAL EDITION MAGICAL GIRL
IRICAL NANOHA STRIKER'S "GREED
OF GREED"

前回の4つの出来事!!

1つ! アンクがヤミーを使ってル・ルシエ一族の集落を襲撃!

2つ! 集落に祀られていたコアメダルを使い、アンクはウヴァ・完
全体の力を手に入れた。

3つ! アンクはカザリのコアを3枚、メズールのコアを1枚失う。

そして4つ! キャロは怒りでフリードを使って、アンクに攻撃を仕
掛けた。

COUNT THE MEDALS!!

現在、アンクが使える欲望は……

タカ×3

クジャク×3

コンドル×3

クワガタ×3

コブラ × 2
テイラノ × 3
トリケラ × 3
プテラ × 4
タコ × 0
ウナギ × 1
シャチ × 1
ゾウ × 2
ゴリラ × 2
サイ × 2
チーター × 1
トラ × 2
ライオン × 1
バツタ × 3
カマキリ × 3

その火球は凄まじい音を起てて直撃した。

「はぁ．．．はぁ．．．。や、やったの．．．?」

キヤロは肩で息をしながら、薄らと笑みを浮かべて笑った。

「す、凄いよキヤロ!」

パートナーであるエリオはまるで自分の事の様に喜んだ。

「うん!! ありがとう」ちつ。この程度か．．．。「．．．え?」

キヤロが声のした方向に顔を向けると、そこには無傷のウヴァが何事も無かったかのように立っていた。

「そ．．．．そんな．．．．」

キヤロは力を失ったかのようにガクリと崩れ落ちた。

「召喚！！鋼竜クシャラダオラ！！」

村長はウヴァの隙を突いて、鋼が命を持って竜と化したようなドラゴン『クシャラダオラ』を召喚した。

「見たことの無い生物……。貴様……。転生者か」

ウヴァは転生者であろう村長を睨みつける。

「わしは……。いや、俺は原作には介入しないつもりだった……。だが、これだけは見過ごせるかあ！！クシャラダオラ！！」

『グオオオオオオオ！！』

ビュウウウウ！！！！

クシャラダオラはそれに応えるかのように咆哮を上げ、口から竜巻のような風を発射した。

キュイイイイイン

ウヴァはそれを避けて、その姿をアंक怪人態へと戻し、右腕に力を貯める。

「クシヤラダオラ！！もう一発だ！！」

『ガアア「ラア！！」アアアアアアアアアアアア！！?!』

ドオオオオオン！！

クシヤラダオラが再び風を発射しようとした瞬間、アंकは火炎弾を発射させた。それは見事にクシヤラダオラの口に命中し、クシヤラダオラはそのまま息絶えた。

「ク、クシヤラ」

グシヤ

「失せる。目障りだ」

ゴオオオオオオ！！

アंकは息絶えたクシャラダオラに近寄ろうとする村長の首を撥ね、さらにその首もろとも体を炎で燃やしつくした。

「あ……ああ……そんな……、そ、村長様あ……」

キヤロは顔を手で覆い隠して、悲しみにくれた。

『EXCEED CHARGE』

バシユウ！！

「グッ!？」

村長を殺したアंकは、一息つく間もなく、紅い円錐状のエネルギーにロックオンされる。その射線上を見ると、ファイズが雄たけびを上げながらこちらに突っ込んできた。

「お前だけは!!お前だけは許さねええええええええええ!!!!
ハア!!!!」

ドン!!!!

「駄目ッ！！アキラア！！」

なのはの止める声も聞かず、ファイズは空に跳び上がる。そして空で一回転すると、跳び蹴りの体制を整えた。

「クリームゾンスマツシュ！！！！」

そしてファイズは、必殺技・・・クリームゾンスマツシュを放った。

「グッ・・・、ククッ、グリードを・・・！！嘗めるなア！！！！」

ジャラララララ

「……………なっ！！？」「……………」

しかしアंकとて無策というわけではなかった。なんとアंकは、クリームゾンスマツシュが直撃する寸前、自身をメダルへ分解したのだ。対象を失ったターゲットスコープは消え、ファイズは地面に衝突する。

「ツァ……!!」

「今度はこっちの番だ」

『シャチ！ゴリラ！チーター!!』

バキィ!!

「ウグツ!?!」

ファイズが痛み悶えている間に、アंकは素早く変身を解いてベルトを装着し、オーズ・シャゴリーターへと変身した。そして、ファイズを空中に殴り飛ばして、落ちそうになれば再び殴り飛ばすという事を繰り返し行った。

「クハハハハ!! そらそらあ!! 早くなんとかしないとこいつが死ぬぞオ!!」

バキィ!!

「グアアア!!?!」

「や……やめて……。お願い……。やめてえ!!!」

「アキラが……。アキラが死んじゃうだろ!? 止めるよお!!!」

「キヒヒヒッ!!! 止めてほしけりゃ力づくで止めてみるよお!!!
まあ、止められないだろうがな!!! あははははは!!!」

ズドン!!!

「ゴッ……!!!」

なのはとヴィータが必死に懇願するも、オーズはそれを止めようとはしない。しかし、それも終わりの時が来た。なぜなら、オーズは誤って、ファイズを下に叩きつけてしまったからだ。

「あ……。……。チッ。輿が削がれたぜ。とつとと殺してセルに還元するか」

オーズはファイズを持ち上げる。その鎧はあちこちに亀裂や罅が入っていて、寧ろついていない場所を見つけるのが困難であるぐらいに傷ついており、仮面は約4分の1が失われていて、所々火花を噴いていた。

「さあ、GAME SETだ」

ブンー！

キキキインー！！

『スキヤニングチャージ！！』

オーズはファイズを上乱雑に放り投げ、そして必殺技の構えに入った。

「い……いやあ……いやああああああああ……！！」

「オラアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

ズドオンー！！

なのはもうこれ以上ないような声で絶叫した。他のメンバーも必死に手を伸ばすも、先程のウヴァによる電撃が効いていて、うまく立つことが出来なかった。そして無情にも、青く光るゴリバゴーン

は放たれた。

『スキヤニングチャージ!!』

「セイヤアアアアアアアアアア!!」

ドゴオオオオオオオン!!

「なに!？」

しかし、そのゴリバゴーンはファイズに届くことはなかった。なぜなら、何者かによってその必殺技は妨害されてしまったからだ。

変身を解除したアंकはすぐにその人物を見つけた。しかし、もその人物は、オーズ・ガタキリバコンボと寸分変わらぬ姿をしていたのだ。

アंकはオーズもどきを睨みつけた。

「貴様……。何者だ」

「何者ね……。少なくとも君は知っているはずだけど?」

「なに!?!」

オーズもどきは変身を解除する。そこには、長い黒髪を風に靡かせた女のような顔をした男がいた。

そしてその男はアंकにとって驚くべき言葉を口にしたのだ。

「僕の名前はヘイル・ヘイストン。君の弟さ」

「何だと!?!」

アंकは驚愕したようにオーズ・・・いや、もう一人の自分を凝視する。

するとヘイルは溜息を出して、言葉を紡ぎ始めた。

「それにしても、この男は醜いね」

「あ?」

アंकはヘイルの予想外の言葉に顔を顰めるも、それを知らない振りをしてしながらヘイルは話を続ける。

「だってそうじゃないか。たかだか才能が開花しなかったぐらいで悪の道に奔ったんだよ？」

「……黙れ」

アंकが右腕と翼を発現させるも、ヘイルはまるで何かに浸って陶酔するかのようには話を続けた。

「僕は君なんかとは違う。才能に恵まれ、人望もあり、何より自分の正義もある。君みたいな、頭首の成り損ないなんかじゃないんだ」

「黙れ……!!」

「つまり君は」

出来損ないなんだよ。

ヘイルがその言葉を出そうとした時には、既にアंकはヘイルの前において、右腕を振りおろしていた。

「ゲウ!?」

ガキイン!!

ヘイルは瞬時に自身のデバイスである剣型のデバイス『カリバー』を展開してそれを防ぐ。

「てめえに何がわかる……。戦場を知らず!!ぬくぬくと温室で育ち!!親や周りの愛情を一身に受けてきたお前に!!一体何がわかるんだ!?!ああ!?!?」

キュイイイイイイン

ゴオオオオオ!!

アंकは一度ヘイルから離れ、グリードへ変身すると同時に、炎を放った。ヘイルはキツイ表情でプロテクションを張るも、徐々に亀裂が入り始める。

「このまま燃え尽き」待つてジン!!!「!?!?」

アंकは突如かけられた声を見つけようと、炎を止め、あたりを見

渡した。

すると後ろにその人物はいた。

その人物は金髪で修道服を着ており、その顔は美少女ともいえる顔だちだった。

その人物は、アंकが子供の時から死ぬまで世話になり、そして、八神はやて達機動6課もよく知る人物でもあった。

「カ、カリム！？どうしてこんな処に！！？」

その人物とは、機動6課を陰で支え、予言や助言をしてきたはやて達の恩師『カリム・グラシア』であった。

「・・・・・・・・ジン」

カリムははやてを一瞥して、アंकに近づいていく。しかし、ヘイルがそれを遮った。

「お下がりくださいカリム少将。あのような化け物に近づいては・・・・・・・・」

パン！！

「分かったわジ・・・、いえ、アंक」

カリムは名前を言いなおして、本題に入ろうとした。

「単刀直入に言うわねアंक。私に貴方のやろうとしていることを教えてほしいの」

「・・・知って如何するつもりだ？」

アंकはそんな発言をしたカリムをにらみつける。それは、自分はいつでもお前を殺せる。それを表しているかのような顔だった。

しかし、カリムはそれに怯む事無く、言葉を紡ぎ続ける。

「貴方の手助けをしたいの」

「・・・手伝いはいらん。それと、別に話してやってもいいが・・・」

「分かってる。これからの事は絶対に、誰にも洩らさないわ。それに関しては、私の命をかけてもいいわ。だからお願い」

そうやってカリムはアंकをじっと見つめる。その瞳には一片の曇りもなく澄んでおいた。それを見たアंकは、一度溜息を吐いてから、コアメダルと端末を隣に置いて憎々しげに今までの事を話し始めた。

（十数分後）

「そんな……、そんな事って……」

「……それが現実だ」

今までの事を話し終えたアंकはそれきり黙りこみ、カリムは信じられないといった表情を浮かべていた。しかし、そんな表情も少し経つとなりを潜めて、スッと立ち上がった。

「……アंक」

「ああ。お前を聖王教会まで戻してやる。……これから何を
するのは、自分で考えてこい」

そう言ってアंकは、隣に置いておいた端末を手にとって、転送用

の魔法陣を展開させる。カリムはそれに乗った。

「おい」

「は……い!?!」

チャリイン

アंकがカリムを呼び止め、カリムがその方向に顔を向けると、何かが飛んできて、そのままカリムの額に何かが入り込んだ。

「な、何を入れたんですか!?!」

「面倒くさい事になっても困るんでなあ。お前の体にコアメダルを入れさせてもらった」

「アंक! せめて人の了解をe」

パシユウ!!

アंकはカリムが四の五の言う前に、転送魔法陣を起動させ、カリ

ムを教会の前に送った。

『楽しそうですね陛下』

「……楽しそうじゃない、楽しいんだよ。これから起ること
になあ」

『は？』

ジュジュジュ

プライムが疑問形で返すと同時に、プライムのクラックシステムに
コールが入った。

『陛下。新しい情報が入ったので少し見て「その必要はない。内容
は大体分かるからなあ」は？』

「大方、カリムが捕まったんだろ。やつらの事だ。たぶん、裁判に
かけずに死刑確定& amp; 執行だろうな」

そう言ってアंकはいつものタジャドルとは違う、タトバコンボの
紋章が入ったマントを羽織り、転送ポートに立った。

『どぢぢら入っ。』

「……………助けに行ってくる。俺の……………姉貴をなあ」

その言葉を言うと同時に、アंकは転送された。それを見てプライムはこう感じた。

『……………陛下はまだ、感情をお捨てになれないのですか』

その声色には、若干の呆れとともに嬉しさが混じっていたようだった。

〈NEXT STAGE〉

欲望と姉代わりと弟出現（後書き）

さて、この小説初の区切りですよ。

今回はついにアंकが管理局に宣戦布告！？

真実を知ったカリムは一体どうするのか！？

そしてETARNALの出番はあるのか！？（笑）

ちなみに今回はオリキャラのキャラ紹介です。くたばった奴らも一緒に紹介します。

なお、アंक人間態の顔を書いてくださる方歓迎いたします。

では皆さん！！次回のSPECIAL EDITION MAGICAL GIRL LIRICAL NANOHA STRIKE R'S "GREED OF GREED"まで、ドライブ・イグニッション！！！！

番外編 能力と道具とキャラ紹介(前書き)

さて、ここいらで貯まりに貯まったキャラクターやら能力やら道具の説明しなきゃね。

番外編 能力と道具とキャラ紹介

さて、この章では今まで貯まりに貯まった人物達の紹介です。

また、この章を書いている現時点で、最近出番のない奴らや、オリキャラ達は何をしているのかを書いておきます。

レイ・メイスティーマ

年齢・・・20歳

魔力ランク・・・オーバーSランク

デバイス・・・ガディアス、ミカエル

顔・・・上の上(至高のイケメン)

階級・・・大将

性格・・・優しくてよく気がきく。

レアスキル・・・デビルブレイク悪魔殺、アタック・キャンセル攻撃無力化、サーヴァント・ウエボン英雄武器、クリエーター魔力変換資質
光、創造者

詳細

この世界でいう主人公的な立場の人間。同時にアंकを殺した張本人。

実は転生者で、原作はs t sの頃まで知っている。

転生したのは10年程前で、交通事故《女神のミス》で死亡し、女神によって転生してもらった。

そのため、なのは達とは幼馴染であり、彼女達は彼に好意をもっている。

現在はJ S事件の功労者として、6課に在籍しながらも、実質的に管理局の権力者となっている（後に後見人にもなった）。

さらにアंकが死んだ後、レイを蘇らせた神から新たなる力として、創造者・・・即ち、ありとあらゆるものを創りだす力を入れた。

ただし、創り出すには自らの魔力を代償とし莫大な疲労が襲うので、あまりに力が強いものはポンポン出すことが出来ない。

高町アキラ

18歳

魔力ランク・・・SS+

デバイス・・・なし

顔・・・上の上

階級・・・一等空尉

性格・・・優しくて朗らか

レアスキル・・・英雄力

ヒーロ・ザ・パワー

詳細

転生者。なのはと時を同じくして魔導士になった。

彼は魔導士にしては珍しくデバイスを持っておらず、能力のみを駆使して戦う。

なお、英雄力とは、彼の世界に架空の存在として伝えられてきた戦士達の力を使うことが出来る。

その力は深く広いといった感じで、魔力を消費する事で戦隊やライダー、アニメのキャラクターの武器や変身道具を使用する事が出来る。

なお、一番最初に出てきた際に着けていたアングの左腕と翼は、一種のリミッターみたいなもので、転生当時は能力を制御できなかったため、神に与えられた(というよりも、元々この世界にあった物を神が5枚程回収して与えた)コアメダルによって、その力を抑えていた。

現在はレイの力によってその力が完全に使いこなされている。

オオシマ
大島 宗助 ソウスケ

年齢・・・15歳

魔力・・・なし

身体重・・・平均より少し高いぐらい

顔・・・上の中

レアスキル・・・火竜召喚

性格・・・優しくも厳しい。若干兄貴臭あり。

詳細

レイと同じく転生者。レイと同じく女神のミスにより、転生してもらった者。

魔法ではなく、烈火の炎の主人公、花菱烈火の力である八竜の力を全て使う事ができる。

主にFW年長者から好意を寄せられている。

レイ達と合流したのはs t sの初めの頃からだが、実はその前から既に転生しており、クイントを救ったのはこいつだったりする。

一応原作の知識や正規の歴史の記憶も持っており、それを変えようと奮闘するも、アंकというイレギュラーな存在に手を焼いている。

ミヤジマヒロト
宮島博人

享年23歳

顔・・・上の下

レアスキル・・・東方projectの全キャラクターの能力を使えるようになる程度の能力

詳細

作者が突発的に作り出したキャラクター！。

つい最近転生したため、レイや大島達はその存在を知らなかった。

カリムやシャツハを墮としてハーレムを作り出そうとしていたらしいが、シャツハはともかく、カリムが自分に見向きもしないので、だんだん腹が立ってきた時に、アंकに殺されたらしいです。

ちなみにあまり東方の能力を使わなかったのは、使いこなせていなかったからです。

使いこなせば、これ程強い能力はありません。

ヘイル・ヘイストン

18歳

顔・・・上の中

魔力・・・SSS+

武器・・・カリバー

レアスキル・・・クリエイト創造

詳細

戸籍上はアंकの弟。アंकの事は約14年前に知った。

前世では、人生を謳歌していたときにトラックに轢かれて死亡した。その後、それが神のミスだということが判明し、神を半ば脅して力を手に入れた。

能力は、想像で創造する力である。

その名の通り、想像するだけであらゆるものを作ることができる。しかしあくまでも想像なので、既存のものしか作り出すことが出来ず、なおかつ創りだす物の構造を全て頭に叩き込んでおかななくてはならない(言ってしまうえば、F a t e / s t a y n i g h t のアーチャーや衛宮士郎の能力に限り無く近い。違う点は、ヘイルが魔力切れになったり死んだりしない限りは、存在し続けることである)。

229

しかし、戦闘中に一々想像することは出来ないので、普段はエクスカリバーに酷似した西洋剣型のアームドデバイス『カリバー』を使用している。

村長

68歳

魔力・・・SS-

顔・・・中の上

デバイス・・・アストロスライド

レアスキル・・・サモン・ザ・イマジン空想召喚

詳細

転生者。

ル・ルシエ一族の村長をしていた。

無印が始まるよりも遙か以前に転生しており、転生当初は原作に介入しようと思っただが、里での生活に満足して、介入するのを止めた。

しかし、元とはいえ仲間であるキャラが殺されかけたのを見てアンクを攻撃し、パートナーもろともアンクに返り討ちにあつて死亡。

能力は空想の生物を召喚する力である。即ち、私達3次元の人間が存在しないと思っっている物を召喚することが出来る。

パートナーは鋼竜クシャルダオラ（出典元：MH2G）。

道具説明

Wドライバー・・・仮面ライダーWに変身するための道具。即ちガイアメモリ（後述）の影響を最小限に抑えるためのフィルターである。

外見・性能共に原作との誤差は無い。

ガイアメモリ・・・別名『魔性の小箱』。使用する者に対して、悪魔や神に限り無く近い姿や力を得ることが出来る。

こちらにも外見・性能ともに差異はないが、ETARNALのみ性能は少し違う。

原作がガイアメモリの記憶を永久停止させるのに対し、こちらのメモリは、メモリ自体を永久停止させるのと同時に、魔力の結合を停止させてしまう効果とともに、リンカーコアに干渉して魔法が使えなくなる効力を持つ。

しかし、一過性のためそれが出来るのは最大で24時間が限界である。

番外編 能力と道具とキャラ紹介（後書き）

多分これで全部だと思います。

ぶっちゃけ、誰を出したかなんぞ覚えてないです。

さて、次から本編を再開します。

次はいつ公開出来るやら……。

裏切りとコンボと宣戦布告（前書き）

さて、お待たせしました。第9話です。

タイトルにもある通り、今回は物語が大きく変動します。

なお、悪い意味で絶賛キャラ崩壊中。

あ、いつもか。

挿入歌：『POWER to TERROR』

『Time judged all』

裏切りとコンボと宣戦布告

くミッドチルダ・即席処刑場付近く

カアアアアアアア

「くそっ……。手を患わせやがって、あの馬鹿姉貴……」

強烈な光と共に、アंकは愚痴りながらも処刑場の近辺に転移して現われた。

「よし見つけた。……まだ処刑場に入る前か」

アंकはすぐさまカリムを見つけ出した。どうやらまだ処刑場には入っていないようだった。

しかしその護送の様は、まるで極悪な殺人犯を護送しているようだった。一応認識阻害魔法は掛けているようだが、アंकの力の前には成す術はなかった。

「これならまだ手はあるなあ。ついでに用事も済ませておきたかったしなあ」

アंकは不敵に口端を吊り上げ、行動を開始すべく、アジトからライドベンダーを取り寄せ、処刑場へと向かった。

〈処刑場・カリムside〉

「さつさと歩け！」

後ろの同員が私を急かして来る。私はそれに無言で答え、足を速めた。

「カリム」

すると、前からはやてが近づいてきた。

「どつもはやて（こいつらがアंकを……！！）」

私は可能な限り笑顔で挨拶する。しかし、その腸は煮えくり返ったままだ。

「カリム……。どうしてあんな化物なかに……」

「……あそこには私の求めるべきものがあるんです」

はやての一言に私は一瞬キレそうになったが、頭を冷やして冷静に対処した。彼女に悪気はないのだ。

「やからつて、あんな化物に味方するんか！？何でうちらを頼ってくれへんかったんや!？」

「あなたに話しても意味は無いからです。あのの方が私にとって有意義なものを与えてくれます」

彼女はそういいきつた私を怒りと悲しみを込めた表情で睨みつけてきた。

「……見損なつたでカリム」

「見損なつて結構。あなたと話すことなんて、更々ありませんから」

私はそう言って再び歩き始める。後ろではやてがすすり泣く声が聞こえるが、私には知った事ではない。今はただ、彼を待つのみ。

アंक……。

〈カリムside out〉

〈処刑場・裏〉

「その欲望、開放しろ」

チャリン

「よし、これで5体目だ」

そういつてアंकは不敵に笑う。アंकは裏で警備に当たっていた
適当な警備員達にセルメダルを投入し、ヤミーを作っていた。ちな
みに作ったヤミーは、ライオン・ヤミー、カブト・ヤミー、テント
ウ・ヤミー、軍鶏ヤミー、バイソン・ヤミーだ。

「さて、そろそろ始まる時間だなあ」

そう言つてアंकは金色のメダル『カメ・コア』、『コブラ・コア』
、『ワニ・コア』を取り出して、オーカテドラルに装填し、スキヤ

ナーでメダルを読み込ませる。

キキキーン！！

「変身」

『コブラ！カメラ！ワニ！！ブラカ〜ワニ』

するとアंकが金色の光に包まれ、それが収まると、蛇使いのターバンをイメージし、後頭部に弁髪を携えた『コブラヘッド』、亀の甲羅を半分にしたような盾『ゴウラガードナー』を両手に着けた『カメラーム』、そしてノコギリ状に発達したラインドライブ『ソウデットサイザー』を持った『ワニレッグ』等を装着した、オーズ・ブラカワニコンボがそこにいた。

「さあ、GEAM STARTだ」

オーズは地面を滑るように移動し、表の処刑場へと向かい、ヤミー達もそれに続いた。

「撃てえ！」

「はあ！！！！！」

ズダダダダダダ！！！！

オーズが処刑場に到着すると同時に、殺傷設定の魔力弾が柱に縛り付けられたカリムに向かって無数に発射される。オーズは一瞬で空に飛び上がり、カリムの前に着地、ゴウラガードナーをあわせて『ゴラシールドデュオ』を発動させ、衝撃に備えた。

ガギギギギギギン！！！！

「……………？」

衝撃と痛みを堪えるために目を瞑っていたカリムはゆっくりと目を開けた。すると

シュウウウウウウ……………

「チツ。送ったすぐ後に厄介ごとなんざ、お前も着いてねえなあ。姉貴」

「……………来ると思ってたよ、アंक」

そう言つてカリムは微笑んだ。その目線の先には、コウラガードナーから煙を上げて立っているオーズがいた。

「シフトアップ!!オート・パニツシャー!!」

「クロスファイアー!!シュート!!」

スガガガガガッ!!!

「!!!ラア!!!」

ガギギギギギン!!!

オーズは突然撃たれた死角からの攻撃に上手く対処し、全てコウラガードナーで防ぎきり、放ってきた場所を睨みつける。そこには、
『激走戦隊カーレンジャー・レッドレーサー』に変身したアキラと、
クロスミラージュを構えたティアナ、そしてリボルバーナックルを
構えたスバルがこちらを睨みつけていた。

そしてティアナは、懐からクリアグリーンの色を施されたガイアメ
モリ『CYCLONE』を、スバルは懐にダブルドライバーを装着
(同時に、ティアナの腹部にダブルドライバーが顕れた)し、黒み

掛かった紫色のガイアメモリ『JOKER』を取り出し、それぞれが隆起している部分を押しした。

「いくわよスバル!!」

『CYCLONE』

「オツケー!!」

『JOKER!!』

「変身!!」

二人はWを描くように変身ポーズを構え、ティアナはメモリを右のスロットに装填する。すると、メモリはスバルの方に転送され、ティアナは糸が切れたように倒れる。そして、スバルは転送されたメモリを深く押し込み、スバルも自身のメモリを左のスロットに装填させて、ドライバーをW状に展開させた。

『CYCLONE JOKER!!』

すると軽快な音楽とともに風が吹き荒れ、細かな装甲がスバルの身

体に張り付いていき、その身体を仮面ライダーWへと変身させた。

「『さあ、お前の罪を数えろ!! フッ!!』」

ダブルはそう言って、オーズに殴りかかる。

『タカ!トラ!バッタ!!タ・ト・バ タトバタ・ト・バ』

「オラア!!」

ガキーン!!

「ウグツ!?!」

オーズは瞬時にメダルを取り替えて、タトバコンボへと変身し、その攻撃を受け止め、逆にトラ・クローで切りつけた。

「タア!!」

「ツツア!?!」

ダブルは衝撃を堪えて、蹴りを放ち距離をとった。

オーズはダメージを受けるも、如何にかタカ以外のメダルを抜き取り、新たに孔雀が描かれたメダル『クジャク・コア』を中央に装填して、コンドル・コアを装填してスキヤナーを滑らせた。

『タカ！クジャク！コンドル！！タ〜ジャ〜ドル〜』

「ハア！！！」

するとタカヘッドが赤く輝き、額の宝石『オークオーツ』が菱形のガーネットから金色の鳥の嘴型へと変わり、左腕にクジャクアーム専用の武器『タジャスピナー』を装着した、アングのコアメダルの力を使った『オーズ・タジャドルコンボ』へと変身した。

「ハア！！！」

バシユツバシユ！！

「キヤアツ！！このお！！！」

『HEAT TRIGGER！！！！』

『TRIGGER!! MAXIMUM DRIVE!!』

「トリガー・エクスプロージョン!!」

オーズは左手のタジャスピナーから、ダブルに向けて火炎弾を発射する。ダブルはそれをかろうじて避け、メモリをチェンジして、ヒートトリガーへとハーフチェンジする。そして、専用のトリガーマグナムにメモリを装填しマキシマムを発動させ、オーズに向けて超高温の火炎を発射した。

「ティアナ!! スバル!! 俺も助太刀するぜ!!」
「竜之炎：参式!
! 焰!!」

すると何処からか宗助が現われ、火竜の一匹である焰を召喚し、炎の鞭のようにマキシマムに纏わせて、威力増強を図ったマキシマムを同時に放った。

「はあ!!」

ガギヤァン!!

「『なっ!?!』」

オーズは何と、タジヤスピナーを盾代わりにしてそれを弾き飛ばしたのだ。

「ちい……。こんな程度か」

「んにやるう!! 奇式な「はあ!!」「ツァ!?!」

ズダァン!!

「『宗助さん!?!』」

宗助が火竜：崩を召喚しようとした瞬間、オーズの火炎弾によって吹き飛ばされた。

オーズはさらなる追撃を掛けるため、タジヤスピナーの蓋部分『タジヤドルフェイス』を展開、セルメダルが嵌め込まれた台座『オークラウン』を露出させる。

オーズはタジヤスピナーに装備されている『フォースドロワー』を引いて、『リボルストーン』の上からスキヤナーを押し当てる。

キキキキキキイン！！

『タカ！ウナギ！クワガタ！チーター！ギン！ギン！ギン！ギガス
キャン！！！！』

ギユウウウウウウ！！

オーズは一気に7枚のオーメダルをスキャンし、は腰を落として左腕を腰に添えて後ろに引いた。すると、膨大なエネルギーがタジャスピナーに収束され、それに伴って地面が若干揺れる。

「くっ！！地震！？」

「恐らく、あの手甲から力が漏れているんだろうね。ヘイル！！」

一方なのは達は突如として現われたヤミー（先程アंकが作っていたヤミー達）を相手にしながら、状況を判断していた。

そしてレイは何を思ったか、ヘイルにライオン・トラ・チーター・タコのコアメダルをヘイルに向けて放ったのだ。ヘイルは瞬時にその意図を察してコアメダルをキャッチして、正規の物とは配色が反転しているオーズドライバーを創り、腹部に装着してコアメダルを装填してオーズキャンナーでスキャンした。

キキキーン!!

『ライオン!トラ!チーター!!ラタラタ〜 ラトラ〜タ〜』

「ハアアアアア・・・ムンツ!!!!」

「うおおおおお!!!!」

ドギヤアアアアアアン!!!

オーズがタジャスピナーから巨大な火球を発射した瞬間、ヘイルが変身したオーズ・ラトラーター（以下、Hオーズ）はチーターの力を使ってその前に立ちはだかる。そしてトラ・クローを展開させて火球を防いだ。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・。ザ、ザマアみやが・・・れ・・・?」

「ヘイルさん!!上です!!」

「ッヅ!?!」

Hオーズが肩で息をしながらオーズのいた場所を見ると、すでにオーズはいなかった。スバルの発した声に従って上を見ると、クジャクウイングを広げて飛行しているオーズがいた。オーズは滑空しながらオーカテドラルにスキヤナーを滑らせ、メダルを読み込ませた。

キキキイン！！

『スキヤニングチャージ！！』

するとオーズの足が猛禽類のような爪に変化し、炎を纏って滑空速度を早めた。

「チツ！！スバル！！ウイングロードを展開してくれ！！」

「わ、分かりました！！」

ダブルが答えた瞬間、青い道『ウイングロード』が展開され、オーズのところまで道が伸ばされる。

キキキイン！！

『スキヤニングチャージ!!』

「オオオオオオ!!」

それと同時に、Hオーズはメダルを再スキャンし、スキヤニングを
発動させてウイングロードを駆けて行く。

「ぬおおおおおお!!!!」

「セイヤアアアアアア!!!!」

ズドオオオオオオオオ!!!!

「ヘイルさん!!」

「アंक!!」

Hオーズの必殺技である『ガツシユクロス』と、オーズの必殺技で
ある『プロミネンスドロップ』が衝突し、物凄い衝撃と共に爆風が
他のメンバーを襲った。

そしてその土ぼこりが止むとそこには・・・

「ゲツ…………。ゴホツ!!」

「チツ…………。勝手に俺のメダルを使いやがって」

そこに立っていたのは、取り戻したコアメダルを弄んでいたアंकクと、地に倒れ伏せて吐血しているヘイルの姿だった。

「さあ、これで仕舞いだガキ」

グン

「ッグ!?!」

アंकクは右手を怪人化させ、怪人化していない左手でヘイルの喉を掴んで乱暴に持ち上げる。

「ヘイルさん!!」

「グオオオオオオオオ!!」

ガギイン!!

「ッ!! 邪魔をするな!!!!」

ダブルはヘイルの元へ駆け寄ろうとするも、バイソン・ヤミーによって妨害をされてしまう。

「あばよ」

ズン!!

「ツアアアアアア!!!!」

そしてアंकは右手を手刀状にして、一切の戸惑い無くヘイルの心臓を貫き息の根を止めた。

「ジェット・ザ・スマアアアアアッシュ!!!!」

「!?!? チイイ!!!!」

ジャラララララ

ズドオン！！

ヘイルを殺したアंकは、突如振り下ろされた巨大なハンマーを防ぐために、息絶えたヘイルの死体を無造作に放り投げ、右手から大量のセルメダルを放出し、盾状に展開してハンマーを防いだ。そしてそのハンマーがどけられると、その振り下ろしたと思われる相手が地に足を着けていた。

「ふん。またてめえか、鉄鎚の騎士」

「よくもヘイルを殺してくれたな化物！！！！」

「ふん。くたばるほうが悪い」

ヴィータの怒りに満ちた声にも動じず、アंकはさも当然といった風に返答する。そしてアंकは懐から、ダブルドライバーに酷似しているものの右側にしかメモリ装填口がないバックル『ロストドライバー』を取り出して、腹部に装着する。

そしてなんと、ETARNALを取り出して、そのスタートアップ

スイッチを押した。

『ETERNAL』

「変身」

ギューン！

『ETERNAL』

アंकはメモリを装填し右に傾ける。すると赤色の電気がメモリから発生し、それと同時に原子レベルにまで分解された白を基調とした鎧が装着され、その姿を『仮面ライダーエターナル・レッドフレア』へと変えた。

「それがア……どうしたアアアアアアアアアア！！」

「待てヴィーター！？」

ヴィータはシグナムの制止を振り切り、エターナルに突進していく。そしてエターナルにアイゼンを振りかぶると、そのまま薙ぎ払った

りたたきつづそうとする。しかし、エターナルはそれらをすべて紙一重で避け、右手に逆手で持ったエターナルエッジを奮って、ひとつひとつのダメージを的確に、着実に蓄積させていく。

「グッ!? ちょこまかしやがって!! とつとつと潰れるよこの野郎!!」

ブン!!

「……………貴様らはいつもそうだった」

ザシユ!!

「ツア!?!」

エターナルはまるで何かのスイッチが入ったかのように、話しながら切りつけていった。

「俺の事情も知らず」

ザン!!

「アアアアアアアアアア!!?」

初めに左腕

「自らの正義を他人に押し付け」

ベキッ

「イアアアアアアアアアアアアアア!!?!?!?!」

次に右足を折り

「自分の過去と罪を棚に上げ」

グシヤ

「ウゝアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!?!?!」

左足を潰し

「そして憂さ晴らしのために教導という名の暴力を奮う」

ズドン

「ゴボツ!!!」

ズシヤ

最後に腹を蹴飛ばされたヴィータは駆けつけてきたシグナムの元に転がった。

「キツサマアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

『EXPLOSION』

ガシヤン

ヴィータの変わり果てた姿を見たシグナムは我を失い、カートリッジをロードしてレヴァンティンをシュランゲフォルムへと変え、エ

ターナルへと放った。

「チツ……」

『SONIC!!』

『SONIC!! MAXIMUM DRIVE!!』

エターナルは一度舌打ちをすると、黒いガイアメモリを取り出してスタートアップを押して、右腰のマキシマムスロットに装填した。

バシユ!!

「なっ!? 消えただと!?」

『違います副隊長!! やつはたぶん、超高速で移動しているんだと思います!!』

「なにっ!? ツアア!?」

バキィ!!

シグナムはそのエターナルが消えた種がわかると同時に、そのエターナルによって殴り飛ばされ、先程まで《…………》転がっていたヴィータの所まで飛ばされた。

そしてそのヴィータは何と既に切り飛ばされた腕も含めて、完治し始めていたのだ。この現象にエターナルも顔を顰めた。

（成程……。メイステイマのサーヴァント・ウエポンの能力で無限転生の能力が無限再生の力へと変わっていたのか）

ヴィータの驚異的な再生能力の正体を見破ったエターナルは、ヴィータが完治する前に切り札を使うことにした。

ちなみに何故アंकがヴィータの驚異的な再生力のトリックを見破れたかは、勘などではなくちゃんと理由がある。

まだ6課に在籍していた時に、レイがありとあらゆる英雄の武器を作り出してみんなに見せていたのを覚えていたのだ。

レイの能力である英雄武器は、サーヴァント・ウエボンありとあらゆる英雄の武器を作り出すことができる。武具・防具・馬具等、そしてほかの世界の戦士のものですら作ることができ、それはほぼすべてといっても過言ではない。

そして、サーヴァント・ウエボン英雄武器にはある特性がある。それは、作り出す人間がその人物を英雄と上辺だけでも思っていれば、その武器を作り出すこ

とができるのだ。

英雄というのは、所詮人間の価値観だ。英雄や逆賊と呼ばれる前の人間が行った行為を見た人間が、素晴らしい・感動等の感情を抱けば英雄やヒーローに、残虐・気色悪いなどと思えば、逆賊となる。

そして逆賊と呼ばれた人物の中には、呪いやバグなどを消し去ることがができる道具を持つ人物がいる可能性だってある。

それが誰の武器だかはわからないが、おそらくレイはその武器の事を知り（もしくは転生前の記憶を探って思い出したか）、その武器を作り出して闇の書の歪んだプログラムや10年前にレイによってアインを除いて破壊された防衛プログラムを修復し、暴走する前の夜天の書へ修復したのであろう。

ドカッ

「グハア!？」

さて、読者諸君に説明をしている間に展開があつたようだ。

エターナルは先程までの場所を離れ、カリムを連れて上空（自分の翼を使って）へと上がり、炎を全身から噴出してメモリの適合率上昇を図った。

すると、まるで図つたかのようにエターナルメモリが共鳴を شدしたのだ。

「ハア！！！！」

バサア！！

エターナルが気合を入れるかのように声を出すと、腕・胸・足にマキシマムスロットが装着され、背中に黒いマントが出現した。そしてそのマントには、タジャドルの紋章があらわれていた。

「なっ！！なんだあの姿は！？」

するとその姿をみたレイは、珍しくうるたえた声を出した。それを見たアंकは仮面の下で若干のさげすみの笑みを浮かべたが、すぐに戻した。

「貴様に教える義理もなければ、教える気もない」

エターナルはそう言ってメモリをロストドライバーから引き抜いて、エターナルエッジのマキシマムスロットに差し込んだ。

『ETERNAL！！MAXIMUM DRIVE！！』

「うあああああああああ!??!?!」

「あああああああああ!?!?!?!、痛い痛い痛い
いいいいいいいい!?!?!」

「お、おい!?みんなどうした!?!」

メモリを差し込んだ瞬間、魔力を持った局員全員が苦しみ始めたのだ。同時に、ダブルも苦しみだし、変身も解除されてしまった。

しかしただ一人、大島宗助のみ全くの影響を受けず、皆が倒れる様子を見てうるたえていた。

「ふん。さすがに魔力やメモリを持たない奴には効かないようだなあ」

エターナルの変身を解除したアंकはそう言いながら、手からカリムに投入したものと同じ色のメダルを9枚取り出し、内6枚をカリムに投げて、残りの3枚を装着しなおしたオーズドライバーに装填した。

「これって・・・、別れるときに私に入れたメダルよね?」

「そいつを持ってろ。生き残った連中を片づけてずらかるぞ」

そう言っつてアंकはスキャナーをカテドラルに当てて滑らせる。

キキキーン!!

『プテラ! トリケラ! ティラノ!! プ・ト・ティラノ ザウルス』

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

ドガア!!

プトティラコンボに変身したオーズは、地面に手を差し込み、メダガブリューを取り出す。そしてどういいうわけか遠心力を着け、後ろに向けて薙ぎ払ったのだ。

ガギーン!!

「くっ!!」

「・・・・・・・・・・シャツハ」

オーズとカリムの背後にいたのは、なんとメダガブリューをトンフアー型デバイス『ウインデルシャフト』で防いでいるシャツハだった。シャツハは気配を消し、オーズの背後に回っていたのだが、どうやら気づかれていたようだ。シャツハはトンファーを薙いで後ろに後退し、構えを固めて二人をにらみつける。

「見損ないました騎士カリム。いや、お前はもう騎士と呼べるような器ではない！！貴様から騎士の称号を剥奪しここで殺す！！」

「どうぞ、好きにきなさい。だけど、貴女が私に勝てるなんて思わないことね」

シャツハの挑発を軽く受け流し、カリムは体内にあるメダルの力を解放しようとする。が、それをオーズは止めたのだ。

「・・・・・・・・時間がないからすぐに片を付ける。お前はそこで見てろ」

「アंक・・・・・・・・・・わかりました」

カリムは何かを言おうとしたが、何も言わずに傍らに退いた。

「邪魔だ退けえ!!」

「ラァ!!」

ガギイン!!

オーズは襲いかかってきたシャツハを防ぐと、一度弾き飛ばし、セルメダルをメダガブリューに1枚投入し、噛み砕かせる。

バキベキゴキ

『ゴツクン!! プトティラ!!』

「シャァ!!!!」

「くっ!!? ハァアアアアアアア!!!!」

ガギァアアアアアアア

オーズはグラウンド・オブ・レイジを発動させ、巨大なエネルギー状の斧をシャツハに振り下ろす。シャツハはそれを何とか受けとめようとする。

ベキンッ！！

「！？ツアアアアアアアアアア！！！？！」

ズシャアアアアアアアア

しかし、その威力と衝撃にウィンデルシャフトが耐えきれず、シャツハはそれによって、両断こそされなかったものの吹き飛ばされて近くの岩壁に激突した。

「さあ、止めだ」

バキベキゴキッ！！

『ゴックン！！』

オーズはメダガブリューにセルメダルを2枚投入し、メダガブリューをバズーカモードへと変形させる。そしてその引き金を引こうと

した。

「待って」

「カリム？」

しかし、カリムはそれを止めた。そして、彼にこう告げたのだ。

「ケジメを……つけさせて」

「チツ……。ほらよ」

カリムは懇願するような顔で頼み込み、オーズは少々不貞腐れながらもメダガブリューを手渡し、カリムはそれをシャツ八に向けて構える。

「カ……。カリム……」

「今までありがとうシスターシャツハ。私はアンクと行くわ」

「カリム……。その道に……。走れば……。二度と後戻りは出来な

『プ・ト・テイラクノ ヒツサクツ』

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

カリムはシャツハが呼びかけている途中にメダガブリューの引き金を引き、ストレンジドゥームを発射し、シャツハを消し炭へと変えた。

「この期に及んであなたの説教なんか聞きたくないの。私はこれからこの人と共に生きていくわ」

そう言いながらカリムはメダガブリューをオーズに返す。それを受け取ったオーズは変身を解除した。そしてカリムをつれてアंकは何処かへと飛び立った。

それから30分後……。

アंकとカリムはミッドチルダを始めとする管理局が管理する世界全てに以下のような声明を流した。

『始めまして管理世界の諸君。

俺はアंक・エドゼロン。またの名をジン・ヘイストンという。

ご存知の通り、お前達の心のよりどころ管理局が血眼になって探

している重犯罪者だ。

たった今から、俺は貴様らの命を手中に収める事にした。

精々余生を楽しむことだなあ。

なお、俺はすでにヘイル・ヘイストン及びシャツハ・ヌエラ、ルシエー族の長は殺害させていただいた。

お前達雑魚が何人掛かってこようが無駄なことだ。

まあ、俺に刃を向ける奴らは家族と別れの杯を交してくることだなあ

ハハハハハハハハハハツ!!!」

〔 THE NEXT STAGE 〕

裏切りとコンボと宣戦布告（後書き）

さて、急展開が起こった第9話（だったような気がするけど・・・）が終わりました。

ついに原作キャラが死亡するという事態に陥りましたね。ウェーイ！！！！

あ、今のはオンドウル語ではないのであしからず。

さて、説明をすっかり忘れていた頂があったので、説明をさせていただきます。

まず、ヘイルが持っていたコアは全て、転生の際にヘイルを転生させた神から受け取ったものです（各種9枚ずつ）。

そしてオクトバニツシュを喰らったヴィータが何故死んでいなかったのか？

これに関しては本編でも説明したとおり、夜天の書の無限再生も理由の一つですが、本編では明らかにされていませんが、ヴィータ・シグナム・シャマル・ザフィーラの身体の中には、ガイアメモリが二本ずつ組み込まれているんです。

ヴィータは『STANCH（頑丈）』『CLASH（衝突）』

シグナムは『KEEN（鋭利）』『SWORD（剣）』

シャマルは『HEAL（治癒）』『WIND（風）』

ザファイラは『FIGHTER（格闘家）』『SHIELD（盾）』

の計8本が搭載されています。

オクトバニッシュを喰らった際、ヴィータはCLASHの力を使ってオクトバニッシュが衝突する際の力を軽減させ、一命を取り留めたという事です。

ちなみにレイが作り出した武器は『F・B・K』と呼ばれるナイフで、正式名称は『Fate・Break・Knife（運命を壊す小刀）』と呼ばれるものです。

所有者は何と、欲望王アストラで、すべての事象を自らの思うがままにしてしまうというとてもチートなナイフです。

しかし、自分に使うことは出来ません。じゃなきゃ、聖王との戦いの際に死んだりしないからね。

さて、そろそろサヨナラして次回の作成に取り掛かるといたしますかね。

では次回もー、『DRIVE IGNITION!!』セリフ盗られた・・・orz

城とラボとキドラゴスコンボ（前書き）

さて、今回の話にはあまり戦闘はありません。つか、ほぼ説明回だね。うん。

今回はコアメダルの探索と伏線の回収です。

みんな忘れてるかもしれませんが、アंकには他系統のコアメダルが不足しています。特に水棲系のコアメダルは3枚しかありませんので。

ついでに、いくつか伏線を張る・・・のかなあ？

ついでに言っておきますが、前半会話がかなり多いです。だから描写が少ないのなんのって・・・。

あつ！！やめっ！！石を投げるな！！

やるなら岩を投げろ！！

p . s .

超中途半端wwwwww。ワロタwwwwww。

城とラボとキドラゴスコンボ

〈惑星ムディ・アジト〉

あの宣戦布告から1週間後……。アंकはミッドチルダ全域に探索魔法をかけていた。

「…………どうだプライム。メダルの反応はあったか？」

『No, I do not almost fall. After all, is there only there for possibility. (いえ、ほぼ引つかかりません。可能性としてはやはりあそこしかないかと)』

「そうか…………。」

そう言つてアंकはある建物の画像をモニターに展開する。そこには、いかにも中世に建てられたような物を感じさせる城が建てられていた。

『I think whether it is very likely that the even if I think reasonably. (道理的に考えてもその可能性が高いかと)』

」

「……………腹括るしかねえか」

アंकは寝てたカリムをたたき起して、ミッドの上空へと転移した。

↳ミッドチルダ北部・上空

「ねえ…………アंक？」

「あん…………？」

転移した場所のしたを見たカリムは頬をひきつらせてアंकに問うた。

「ここって…………エーデルシュワルト城よね？」

「ああ。それがどうした？」

アंकが来た場所…………、そこは聖王オリヴィエが暮らし、政治を行っていたといわれる城『エーデルシュワルト城』であった。

「どうしたって……。何でこんな場所に？」

「コアメダルの回収だ」

「……」

カリムはアंकの言葉に驚愕し、アंकは一笑してから一度地上に降り、木に寄りかかって説明を始めた。

「……俺は聖王オリヴィエのクローン体である高町ヴィヴィオの記憶を盗み見した後、アジトに戻ってコアメダルとドライバーの所在を血眼になって捜した。が、所在がわかったのは俺が盗み出したコアとル・ルシエ一族の所有していたコアメダルだけだった

だから、俺はずっとプライムにコアが存在しそうな場所をふるいにかけて続けた。

そして最終的に予想が高かったのは、生前やつが暮らしていたこの城だと判断した。……ここまでで質問は？」

アंकがいったん話を中断させると、カリムが手を挙げていた。

「・・・なんだ」

「いつ盗み見してたの？」

「6課が高町ヴィヴィオの記憶を読み取っているときにな。方法は俺の意識の宿ったコアメダルを配線の間にとッパーのように挟み込むようにすると出来る」

「それは私でも可能？」

「多分無理だろう。お前はまだ完全にグリード化していないからコアメダルに意識が定着していないからなあ」

「ふん」

「・・・他に質問がなさそうだから話を再開するぞ。人間ってのは不思議なもんでなあ。自分の物は常に目に入るところか近くに置いていなければ安心できないらしい。コアメダルはアストラがその基礎を作り出し、その装飾やデザインもアストラが担当した。だが実質コアメダルの製作者は二人いる。今の説明は一見して矛盾してるかと思うが説明は後だ。そして俺はこう考えた。『もしかしたら残りのコアメダルは聖王が関係、もしくは縁が深かった場所にあるんじゃないか？』ってなあ」

「じゃあ、さっきふるいにかけてたのって……」

「そつだ。生前聖王に縁が深かった場所や地域、もしくは聖王が作り上げた場所をかたっぱしからな」

そつ言つてアंकは端末を取り出して2枚の地図を展開する。

「右が今のクラナガン、左が聖王時代のだ。そして聖王時代の地図に聖王が作った建物や施設の場所をマーキングして今の地図に重ね合わせる……」

そつ言つてアंकは昔の地図に聖王が建てた建物や施設を赤くマーキングし、現在の地図と昔の地図を重ね合わせる。

するとなんとということだろうか。

赤くマーカーした場所はビルや店舗などを表す表記に変わり、無事のまま残っていたのは、聖王教会の本部や現在の時空管理局の本局が立っている場所、そしてエーデルシュワルト城のみであった。

そしてカリムは、赤くマーキングされ、店舗やビルになっていた場所にすべて見覚えがあった。

「あれ？ここのお店やビルって……、全部アंकが襲撃した場所

じゃない!？」

そう。これらマークされた店のほとんどは、すでにアंकによって襲撃された場所だったのだ。

「ああ。さっきの結論に至った俺はすぐにコアメダルが有りそうな場所を風潰しに探した。だが、エーデルシュワルト城は記念式典の真つ最中だったから後回しに、聖王教会や管理局本局は論外だ。あんな所に突出する程の力がないのに単身で突っ込む馬鹿はそうはいないしな。結果的に以前その建物や施設があった場所しか襲撃できなかった。ちなみに金品や服を奪ったのは一種の腹いせと八つ当たりだ」

そうはいないという事は一人二人は居たということだろうか・・・

そんな風に思いながらもカリムは口をはさまずにアंकの話の話を聞いていくのだった。

「で、さっきのコアメダルの製作者は二人いるってどういうこと？」

「・・・その説明に入る前にまずはアストラについて話をしなきゃいけないな」

そういつてアंकはアストラの肖像画をモニターに表示する。

「アストラ・ゼーゲブレヒト。享年24歳。名前の通り聖王家のことで、血縁と出生の関係上オリヴィエの兄にあたる」

「オリヴィエ殿下に兄！？そんな話初耳よ！？」

「最後まで聞け馬鹿野郎。お前が知らなくても当然だ。寧ろ知ってるやつのほうがおかしいだろうなあ」

アंकはカリムの頭を一度殴り、肖像画のモニターを消して話を続ける。

「アストラはとある理由から聖王家を追放されている。それに加え、ベルカ大戦が起こる前に起こした欲望事変（『聖と欲とオリヴィエの記憶』を参照）が原因で、奴は聖王家からいなかった事になるから知らなかったとしてもおかしくはない」

「追放って……、跡取りである男児を？」

カリムの言葉をアंकは無言で首を縦に振り、肯定の意を示す。

カリムの言葉はもつともだ。

元来、どこの世界の王族でも男児というのは重要視される。日本・江戸時代の武家屋敷では、出生したのが男児でなければ平民や商人の家に奉公に出させて、実質上の出家を命じていた家もあるようだから、それがミッドチルダでやられていてもおかしくはない。

しかし、逆に男児が破門されるとなればそれは疑問に出てくる。仮にも男児だ。言い方は悪いかもしれないが、多少の問題くらいなら権力を使えば揉み消すなりどうとでもなるのではないか？

カリムはその旨をアंकに告げると、アंकはああとだけつぶやき、説明を再開した。

「奴には欲望王という名のほかにもう一つの名前がある。それは『王の器がありながら器でない者』っていう名前がなあ」

「??????」

カリムは精いっぱい首をかしげながら、意味を理解しようと必死に頭を働かせていた。アंकは若干無視しながら話を進める。

「人間には三大欲求というものがある。『食欲』『睡眠欲』『性欲』。これ以外にも知識欲とか破壊欲があるが、それらすべての欲求をアストラは制御できなかったのさ。聖王は聖なる王・・・、即ち清く正しい者がならなくてはならない。ここまで言えば分かるよな？」

「ええ。つまりアストラが破門された理由は欲望に浸りきっていたのが原因で追放され、継承権が低かったオリヴィエ聖王女が聖王の座に着いた。そしてその破門が原因でアストラはコアメダル、セルメダル、そしてグリードを生み出し、欲望事変を起こした。体よく纏めるとこんな感じかしら？」

「・・・大方あつてるが一応話を続けさせてもらつぞ。豆知識程度に聞いとけ。」

無論、破門されたアストラも黙って指をくわえて見ているわけじゃなかった。

やつは自分を追放した聖王家に復讐するためにあるものを作り上げた。それは奴自身の長所でもあり短所でもある欲望を形に仕上げた・・・」

「コアメダルね？」

「ああ。そして一番最初に作られたコアメダルが、俺のタカのコアだ」

そう言ってアंकはタカを含む全てのメダルを取り出してカリムに見せる。

「ふん。・・・ちよつと待つて。仮にも一介の王族だったアストラが、材料はともかく、どうやって精製したっていうの？」

「アストラは俺と違って生来の天才だったらしい。一度見たものの理論や論理をすぐに理解し、そしてそれを一瞬にして形にして見せたといわれている。それに独自の理論をも組み上げていたらしい。現に、俺や管理局が使ってる電子端末やらデバイスの礎を作り出したのもアストラだ。表の歴史じゃ全く違う人間になつてゐるがなあ」

そう言つて呆然としているカリムを尻目にアंकは話を続ける。

「そしてタカのコアメダルを作り上げたアストラは、次にかつて聖王と霸王が飼つていた豹と比較的似た動物をモチーフにしたメダル・・トラのコアメダルを作り出し、さらに、当時農作物に多大な被害の爪あとを残したイナゴに似た生物・・バッタのコアメダルを作つた。そしてそれを制作順に並び替えて一つのコンボを作り上げた。それが『タトバ・コンボ』だ」

「そつか！だから他系統のコアメダルでもコンボが組めたんだ！」

「そついうことだ。あの3枚のメダルはアストラにとって思い入れの深いメダルだったから、奴はあの3枚でコンボを組んだんだ。」

その後、出会つたものに栄光を与えろという『クジャク』、ありと

あらゆる生物を捕まえる『コンドル』が加わり鳥獣系のコンボが
来上がった。

いっておくが、全てのコアメダルが同じ製法で作られたとは思
うなよ？」

「どういうこと？コアメダルは一枚一枚作り方が違うの！？」

「いや、殆ど同じだが入れる欲望が系統ごとに違うだけだ。

例えば猫系のコアメダルだが、あれはアストラの奥底に眠っていた
『自分の居場所が欲しい』という欲望から作られたんだ」

「居場所……？」

「……知つてのとおり、アストラは俺と同じように全てに忌
嫌われていた。普段は抑えこんでいて押し殺していたからこそ、そ
の欲望をコアメダルに入れたんだろうな」

「じゃあ、他のメダルは？」

アंकは少し疲れたような表情をしながら返答を始めた。

「ふう……。昆虫系は当時アストラの中に入っていた破壊欲を封入し、水棲系はアストラが欲しかったものの一つである愛欲を封入、重量系は甘えたいという欲求を封入したそうだ」

「ふうん……。あれ？私の恐竜系とアングの鳥獣系はどんな欲望を封入したの？」

そう言ってカリムは目を紫色に光らせながら問うた。アングはそれにも律儀に答えた。

「俺のメダルには命という欲望が込められている……。らしい」

「らしい？」

カリムがかわいらしく首を傾げるも、アングは一切反応せずに問いを返した。

「分からん。俺のコアメダルに関しては殆ど資料が残ってなかった。それも恐竜系の事もな。さて、これで話は終わりだ」

そう言ってアングは立ち上がり、右腕を怪人化させる。それにつられてカリムも左腕を怪人化させて青いマントを羽織った。

「突っ込むぞ」

「了解」

ズドオオオオオオオオ！

そう言つてアंकは火球を放ち、城壁を破壊して城の内部へと入つた。

くエーデルシュワルト城・大広間（多分）く

「ん、やっぱり何も無いわね」

「ま、当然のことだろうな。寧ろあつたら国家レベルで大変なことになりそうだがなあ」

アंकとカリムは現在、大広間と思われる場所に來ていた。しかしそこには、豪華な金品が飾つてあるだけで、オーズやアストラに係ありそうなものは何一つとして置いてなかつた。

なお、曖昧な表現しているのは、広すぎてどこにいるのかわからなくなつたので、数ある部屋を風潰しに探していたらそれっぽい場所に着いたからそう表現しているに過ぎない。

「さて、多分次の部屋で最後……のはずだ」

「ていうか途中で迷ってるから何処の部屋を調べたか分からないのよね」

カリムは捨てゼリフっぽいものを吐いて、最後の部屋の扉を開けた。

そこは、金で全体が作られ各所に宝石が鑲められた豪華な玉座、純金と純度の高いルビーで作られたシャンデリア、さらにはベルカに名高き巨匠が描いたと思われる立派な絵画が飾ってある部屋だった。

「ここって確か……」

「聖王の記憶で見た部屋だ。……間違いない。ここは王の間だ」

そう言ってアंकはコアメダルの力を解放して目を赤く光らせた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ

「……?なにこの音!?!」

するとものすごい音とともに玉座が回転しながら地面に消え、代わりにタトバの紋章と玉座が一体化したようなものが床からせり出し、床に大きな穴が空いた。その奥のほうには階段も見える。

「どうやらコアメダルの力をもつ者のみがこのカラクリを見破れ、さらにこいつを発動する事が出来るって仕組みか」

そういつてアंकはカリムとともに地下へと降りていく。そしてその最下層にあった扉をゆっくりと開いた。

「見る姉貴……。大正解だ」

「うわぁ……」

カリムは息をのんで驚嘆した。地下室には大量の金属やクリスタルと思われる物質や、緑色の培養液につけられた生物や何かの破片、そして木製の机にぼつんと置かれた一冊のノート、そしてその表紙に描かれたタトバの紋章。すべてのものが、ここがアストラの研究室である事を裏付けていた。

アंकはノートを手に取り、何枚かページを捲ると、近くの壁に手を当てて何かをつぶやく。

ゴゴゴゴッ

すると壁が縦にスライドし、その中から30枚のコアメダルが姿を現した。

「これは・・・？」

「・・・俺のロスト・コアとウヴァ達グリード軍団のロスト・コア、それからもしアストラやグリードの持つコアメダルが何らかの要因で破損した場合の予備のメダルだろうな。だが・・・」

そうやってアंकは金縁の藍色のメダルと同じく金縁で茶色のメダルを手取る。

「この2種類のコアメダルに関しては見たこともなければ聞いた事もない」

そういつてアंकはメダルをよく観察する。藍色の方には馬っぽい何か・おそらく竜・翼が生えた馬が彫られており、茶色の方には龍多分悪魔、多分天使のようなものが彫られていた。それらをしばらく見ていたアंकだったが、少しため息を吐いて、茶色のメダルをカリムに投げ渡す。その意図がわかったのか、カリムはそれを受け取り懐にしまい、アंकはオースドライバーを取り出して腰に着け、カテドラルにメダルを装填し、スキヤナーに読み込ませた。

キキキーン!!

「変身」

『キリン!ドラゴン!ペガサス!!キ・ドラ・ゴース キドラゴス』

バチバチバチバチ!!!

すると、アंकクの体にクワガタヘッドの電撃とは比べ物にならない電気が走った。そして、オーズの装甲が、

藍色の複眼・青く稲光った角曰く『キリンヘッド』、

腕部と胸部には藍色を主体とした鎧と爪が着き、肩には藍色の装甲と青く光る龍玉のようなものが装着された『ドラゴンアーム』、

ペガサスのような青白く小さい2対の翼が両足に着き、馬のような顔がゾウレッグのように着いた『ペガサスレッグ』

へと変わり、その姿を『オーズ・キドラゴスコンボ』へと変身させた。

「すごい力ね。でもなんでコアが3枚しかないのかしら？」

「おそらくこのコアは未完成品だったんだろう。しかし強大な力を持っていたから廃棄するわけにもいかず、ここに封印してあったんだらうなあ」

そうやってアंकは変身を解いた。その際にカリムが、もう一方の方は変身しないのかと聞いたら、アंकは「それはおそらく一回きりの変身しか出来ない」といったので、その場はおさまった。

ちなみに、撤退の際に城を吹き飛ばしたため管理局が来てしまったが、発見される直前に転移魔法で逃走、ラボも重要な物や証拠をすべて運び出して跡形もなく吹き飛ばしたため、管理局はラボの発見はおろか、痕跡さえ見つけることは出来なかった。

〈NEXT STAGE〉

城とラボとキドラゴスコンボ（後書き）

……さて、まずは謝ろう。マジでごめんなさい！！

書き終わって読み返してみたら、物凄いすごい中途半端で終わってるんだよね。正直ビックリした。

余談ですが、この回は初期のプロット上にはありませんでした。

しかしコアメダルとオーズに関しては、オリジナルとは完全に出生やその経緯が違っていたので、この回を急遽作ることとなりました。

でも作ってみたらこのやつちまった感満載な回になってしまい、滅茶苦茶公開している今日この頃。

ではまた、次の更新でお会いいたしましょう。

（ ）ノシ

Kの実力／現われた奴（前書き）

やっぱり冬はお茶だね。

どうも最高総司令官です。

さてさて、もう10話目ですね。早いねまったく……。

……一応言っておくけど、私は60超えた爺ちゃんじゃないからね。本当だよ？

さて、今回は前回の最後で登場したキドラゴスコンボが再び登場します。

そして今回の事件及び全ての元凶ともいえる人物達が登場します。そしてあの爺さんも久々の登場です。

ぶっちゃければ、一種の頂上戦争が起きるかもしれないです。

なお、今回は何をどう間違えたのか擬音が多いです（おもに後半近辺が）。

Kの実力/現われた奴

COUNT THE MEDAL!!

現在、アंकが使える欲望は・・・

タカ×4

クジャク×3

コンドル×3

ライオン×3

トラ×4

チーター×3

クワガタ×3

カマキリ×3

バッタ×4

サイ×4

ゴリラ×3

ゾウ×3

???
x 1

???
x 1

???
x 1

ペガサス
x 1

ドラゴン
x 1

キリン
x 1

ワニ
x 3

カメ
x 3

コブラ
x 4

ティラノ
x 3

トリケラ
x 3

プテラ
x 4

タコ
x 3

ウナギ
x 3

シヤチ
x 4

クラナガン・ミッド記念公園・PM：12：57

アंकとカリムの二人は、公園に生えている木に寄りかかっていた。二人の右手にはコアメダルが握られており、腰には他人からは見えないようにオーズドライバーが装着されていた（カリムのドライバーはヘイルが使っていたものをそのまま使用している）。

「にしてもこの世界のやつらは呑気だなあ。宣戦布告から一か月、まさか殆どの人間が避難も脅えもせず留まるとはなあ」

「あら。今更他人の心配？」

「ハッ。馬鹿か」

そう言っアंकは不敵に笑って談笑している主婦や砂場で遊んでいる子供達を見る。実に幸せそうな顔で遊び話していた。

なお、宣戦布告当初は管理局がデマカセだという広告や記者会見を開いたりしておさめようとしていたものの、ミッドから逃げようとしていた連中もいた。しかし一か月経てばその恐怖は薄れ、人々は元の生活に戻っただけであり、別に脅えていなかったわけではない。

「さて、そろそろ時間よアंक」

「そつらしいなあ」

そう言つてアंकは寄りかかるのを止めて、時計を見る。ディスプレイには、PM:12:59:30と表示されていた。

それを見たアंकとカリムはドライバーにメダルを装填して傾け、再び時計を見る。画面はすでに、13時10秒前を指していた。そして運命の針は刻々と時を刻んでいった。

5

「「「あ」」」

4

「「これが人類の」」

3

「「絶望の」」

2

「「始まりで」」

1

「「永久の闇の」」

0

「「始まりだ」」

キキキイン！！

「クワガタ！カマキリ！バッタ！！ガータガタガタキリッ バッタ
ガタキリバ」

「シャチ！ウナギ！タコ！！シャシャシャウタ〜 シャシャシャウ

レンチシエイド』と呼ばれる分身体を50体程作り出し、生き残った人間達を襲わせた。

「ハアアア!!!」

バリバリバリバリ!!!

「ギャアアアアアアアアアアア!!!?!」

一方、Kオーズもボルタームウィップを奮い、駆けつけた局員達を薙ぎ倒していた。

「このツ……!!化物がア!!!」

ズガガガガガッ!!!

すると一人の局員が懐から質量兵器であるマシンガンを取り出して、Kオーズに向けて発砲する。Kオーズはボルタームウィップをふるって、それを全て防ぎきる。

「……管理局のモットーは質量兵器の使用厳禁のはずだけど
？」

「ウルセエ!!!!てめえらなに道理を問われる気はねえ!!!!
死ねえ!!!!」

そう言つて局員はマシンガンを構えなおす。カリムは再びウィップを構えなおし、迎撃の構えを取る。しかし、両者のそれは実行されることは無かつた。

ドシユ

「ガ・・・ア・・・」

「ふん・・・。雑魚が・・・」

その理由は、オーズがカマキリアームで局員の心臓を貫き握りつぶしていたからだつた。

オーズは握りつぶした心臓の残骸を軽く払うと、骸となつた局員を遠くに放り投げ、一度変身を解除する。それに伴い、Kオーズも変身を解除した。

「デイバイイイイイイイイイイイインバスタアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

かレイとアキラが居ない。

「カリム……。本当に暗黒面に堕ちてもうたんやね」

はやては悲しげにカリムを見るも、完全に無視した。

「漸く来たか機動6課……。今日こそは「フザケルナ化物!!!」
……。あ？」

オーズが飛びかかるうとしたとき、宗助が吼えた。

「テメエらの勝手な行為でどれだけの人間が傷ついたと思ってやがる!!! テメエのせいで何人の人間が悔しみ泣いてたと思ってるやがる!!! てめえは消し炭一つ残してやらねえ! 燃やし尽くしてやる!!!」

宗助は言うだけいってオーズに襲い掛かる。オーズはそれをタジャスピナーで防ぎ、はじき返した。

「ふん。真実を知ろうとしない貴様らよりはマシだと思っがなあ。
ラァ!!!」

ゴオウ！！

「ちっ！？」

オーズは宗助に向けて火炎弾を放ち、宗助はそれを左に回避する。

「サンダー・スマツシャー！！」

バリバリバリ！！！！

「！！ちい！！！！」

キキキイン！！

ズドオオオオオオン！！

上空から迫りくる雷を見た瞬間、オーズは急いでメダルを換装するも間に合わず、雷をくらってしまった。

「あら、アंकが雷を喰らっちゃったわね」

「よそ見をしている場合かな？」

ヒュッ

そうやってシグナムは剣型デバイスである『レヴァンティン』を振り下ろす。

ガギイン！！

「まあ確かに、よそ見をしている場合ではないわね！！」

ズドッ！！

「ウグッ！？」

キキキイン！！

Kオーズはシグナムの腹部に蹴りを入れて一度後退し、メダルをすべて変えて再度メダルをスキャンする。

『ライオン！トラ！チーター！！ラタ・ラタ』 ラ・ト・ラ〜タ〜
』

「おおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

ゴオオウ！！！！

Kオーズはラトラーターへと変身し、熱風でシグナムを後退させる。

「クロスファイアー・シユート！！」

「ダイバインバスタアアアアアア！！！！」

するとティアナとスバルが各々の技を繰り出してきた。しかしそれを、Kオーズは体を寸分ズラしたただけですべてかわしてしまっただ。

「「なつー！？」

「あら。これしきの攻撃をかわせなくちゃ、アングの傍には居られないわ」

キキキイン！！

『スキヤニングチャージ！！』

そう言つてKオーズはメダルを再度スキャンして構えた。そしてチャーターの加速を最大にして、一気にティアナ達に近づき、トラ・クローで相手を切断する技『ガツシュ・クロス』で二人を切り裂いた。
・・はずだった。

「ロー・アイアス！！」

「なにっ！？」

ガギイイイイイイイイイイ！！！！

バキヤアアアン！！

突如、三人の間に割って入った人物が出した花型の盾によってそれは防がれ、逆にトラ・クローが折れ、トラが排出されてしまい、変身も解除されてしまった。カリムはそれをギリギリで掴み取ると、その人物を睨みつけた。

「くっ……。ついに現れましたが、レイ・メイステイマー」

カリムは間に入ってきたレイをにらみつけながら、排出されたコアメダルを装填し直し、ライオンをシャチに換装して、カテドラルを傾ける。

対するレイの方は完全に沈黙しており、動く気配もない。どうやら念話をしていたようで、後ろにいるティアナ、スバル、シグナムが互いに頷いてから、戦闘中のなのはの元へと向かった。

「……。あなたに真実を教えます。騎士カリム」

「生憎とあなたの話を聞く気は更々ないの」

「例えあなたの想い人の話だとしても、ですか？」

「なんですって？」

その言葉にカリムが反応したのを見て、レイは一泊あけるとこう問うた。

「あなたは、転生者を信じますか？」

「は？」

そうだったのだ。

く地上

「……………出てこないね」

「……………うん」

一方、地上で戦闘を行なっているオーズことアंकは、未だに巻きあがっている土煙の中に隠れながら、頭を抑えていた。

（ツウ……………ダメージはそこまで深刻じゃないか。しかし……………フェイト・T・ハラオウン。現役の執務官の中では最強に位置するといわれている人物で、ライトニング分隊の隊長格か……………。チツ、古巣の部隊とは言え、面倒な人材を持ってやがるぜ全く……………）

そうやってオーズは腕を怪人体にしてコアメダルとETARNALを取り出して戦法を練り始める。

(さてどうする？オーズの変身を解いてエターナルで行くか？・・・
・駄目だエターナルじゃ対抗出来る手が限られてくるし、何より決
定力不足だ。

ならやはりオーズで行くしかないが・・・、今はこいつを使うとき
じゃないしな。ならやはりこいつしかないか)

そう言つてオーズは茶色のコアメダルを取り出し、すぐにしまつて
幻獣系のコアメダルを取り出し、カテドラルに装填してスキャナー
に読み込ませた。

キキキイン！！

『キリン！ドラゴン！ペガサス！！キ・ドラ・ゴース キドラゴス
』

「ハアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

ズドオオオオオオオオオオン！！！！

「！！！！？」

オーズがキドラゴスコンボに変身した瞬間、巨大な雷がオーズの体に落ちた。その瞬間、6課陣は変身の失敗かと思ったが、すぐにそうではない事を悟った。なぜなら、土煙がけし飛び、中からとんでもない覇気と電気を纏ったオーズが現れたからだ。

「クツ！！バルディッシュ！！！」

『SONIC MOVE』

ビュッ

フェイトは何かを感じ取ったのか、ソニックムーブ（超高速で動く技。一応エリオも使うことができる）を使い、オーズの背後に回ってバルディッシュを振り下ろす。

ガギャゴン！！

「え……………」

「……………トロいな」

ズガアアアアアアアアアン！！！！

一瞬。

まさにその言葉があつていた。オーズは一瞬にしてバルデツシュの柄を粉碎し、ついでにフェイトの腹部に蹴りを20回たたきこんだのだ。フェイトは何をされたかわからずに吹き飛ばされビルの壁に激突、そのまま瓦礫に埋もれた。

「フェイト!!! テメ……!!!? 伍式『円』!!!」

バキヤアアアン!!!

「ガアアアアアアアア!!!?」

ドシヤア

オーズは右手から雷を放ち、宗助を襲わせる。それに気づいた宗助は、すぐに結界能力を持つ火竜『円』を召喚し、炎の結界を張った。しかし、それは2秒と保たずに破られ、宗助は火傷を負って地面に倒れ伏した。

「ふん……。オオオオオオオオオオオ!!!」

バリバリバリ!!!

オーズが雄たけびを上げると、オーリングサークルからラインドライブを伝ってキリンヘッドへとエネルギーが集中される。すると、キリンヘッドの角『キリンホーン』が光り輝き、莫大な電気を蓄えていく。

「させない!!! デイバインバスター!!!!」

ゴオオオオオオオ!!!

なのははそれに脅威を感じたのか、十八番であるデイバインバスターを放ち、発動の妨害をする。しかし、オーズをそれ避けてキリンホーンの充電を完了させた。

「さあ、チエックメイトだ」

キキキイン!!!

『スキヤニングチャージ!!!』

そして充電が完了したのを確認したオーズは、スキヤナーにメダルを読み込ませて、必殺技を発動した。すると、オーラングサークル全体が光り輝き、ペガサスレッグに装着されているペガサスの目が光り、さらにはドラゴンアームの宝玉『ドラゴン・クリスタル』やキリンホーンも光りだした。

「はあああ……ハア!!!」

「!!!? 跳んだ!?!」

すると、オーズは空中に飛び上がり、そこから急降下を始める。それと同時にキリンホーンに蓄えられた電撃を体全体に行き渡らせ、ペガサスの翼『ウイングプロテクター』が巨大化し円錐状になって足に纏われ、さらに蒼炎が足にまとわりつき、体をドリルのように回転させ始めた。

「お前達!!!何を呆けている!?!奴を止めるぞ!!!」

「……………は、はい!!!」

その光景に呆けていた6課メンバーはシグナムの叱責によって意識を取り戻し、各々の武器を構えてオーズの射線に向けてる。

「エクセリオンバスター!!」

「駆けよ隼!!」

「スターライトブレイカー!!」

「悪しきものを縛りし鎖よ今ここに!!アルケミック・チエーン!
!」

「ジェット・エッジ!!」

「ブレイク・ザ・フリーゲン!!」

「デイバイン・キャノン!!」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

6課メンバーはそれぞれが最強だと思っ技を出し切り、それらをすべてオーズに直撃させた。・・・はずだった。

スッ

「ツァ……!!!!」

突如何かが落下してくるような音とともに、地面に何かが激突する。アंकは何が落ちてきたかはわからなかったが、男のようなうめき声が聞こえたので、この場にはいないアキラかレイのどちらかだろうと察した。

「あらアंक。もう終わってたの？」

そんな声とともに、プトティラコンボと化したKオーズが地上に戻ってきて変身を解いた。

「お前が遅いだけだカリム。とりあえず状況の報告を頼む」

「はいはい」

そう言ってカリムは今まで何があったのかを説明しだした。

（ちょっと前（曖昧でごめんなさい））

「……………というわけなのです」

「ふう……。要約してしまえば、貴方達は狂ってしまった歴史（原作）を修正する為に、別世界から別世界の神に頼まれてこの世界に来た、そういうわけね？」

「はい」

そう言つてレイは一度黙る。その間にカリムはレイによる説明をまとめていた。

レイの話を要約すると、レイやアキラを含む年若の男の多くは、別世界からの転生者であるとのこと。

しかもレイを含む転生者達は、ありとあらゆる世界の能力や、自分で作った力を保有しているというのだ（レイは後者）。

正直信じられる話ではないが、それらが本当だとすれば、レイや宗助の並はずれた力やまるで何かを知っているかのような行動もすべて納得がいく。

しかしそんな事はカリムにとってはどうでもいい事だった。一番聞きたいのはアंकの事だった。

「それじゃなに？アंकもこの世界に転生したって言いたいわけ？」

「おそろく」

馬鹿げてる。

カリムは内心腸が煮えくり返っていた。アंकには元々ジン・ハイストンという確固たる名前がある。その名はすでにアंक自身が捨ててしまったものだが、それはこの世界に、ジン＝アंकという人物がいたという証明になる。

少なくとも世界がアंकを忘れても、自分だけは覚えていよう。

カリムは心の底にそう誓っている。

カリムはその気持を外に出ないように抑えつけ、必死の気持ちでレイに問うた。

「最後にあなたに問うわ。……なぜアंकを殺したの？」

「なぜ貴女がそれを知っているかは知りませんが、邪魔だったからですよ」

「……邪魔……ですって？」

カリムは右拳を握りしめ歯を食いしばり、話を何とか聞こうとする。

そんな様子はずゆ知らず、レイはまるで何かに浸るかのように話を
つづけていく。

「だってそうじゃないですか。彼がいるだけで6課の調和と穏やかな
雰囲気破壊されてしまふ。いくなれば真つ白なキャンパスの紙
にボツンと黒い染みのようがあるような感じですよ。僕はそのキャ
ンパスの紙を切り取っただけですよ」

(……………ふざけるな)

レイが話し続けている間、カリムは拳を更にきつく握りしめる。

こいつが憎い。

カリムの感情はただそれひとつだけだった。

「ああ、勘違いしないでください。貴女はまだ白いままだ。正直に
言って貴女にいなくなられると困るんです。だから……………!？」

ゴウツ!!!!

レイがカリムに触れようとしたその時、それを遮るかのように紫色
のエネルギー球がカリムの掌から放たれた。レイはとっさにそれを
避け、カリムの方を見る。

するとそこには、右腕をグリード化させて、オーカテドラルにコアを装填し、オースキャナーを構えているカリムの姿がそこにいた。

「……私は初めて貴方の話をアंकクから聞いた時、ただの理想屋かと思った。でもそれは間違っていたようね」

キキキーン！！

カリムはそこで一度言葉を途切ると、スキャナーをカテドラルの上で滑らせる。すると、カリムの体がメダル状のエネルギーに包まれる。しかし、他系統のコンボや亜種とは違い、カリムを包んだメダルはすべて紫のメダルだった。

「貴方は他人から見たら善人かも知れない」

『プテラー！』

「でも」

『トリケラー！』

「私達から見たら貴方は」

『ティラノ!!』』

「ただの屑よ。レイ・メイスティーマ」

『プ・ト・ティラノ ザウルス』』

「ふう……。残念ですよ。カリム・グラシア」

カリムはKオーズ・プトティラコンボへと変身し、周りに強烈な冷気を放出する。レイもあからさまに残念そうな顔をして、ガディアスを取り出し、Kオーズもメダガブリューを取り出す。

「悪いけど時間がないわ。だから早めに決めさせてもらっわ」

ドン!!

Kオーズはメダガブリューを奮って、レイへと襲いかかる。

「フッ!」

ガギャァン!!

レイはそれをガディアスで受け止め、互いに拮抗する。その力はほぼ互角といった感じで、両者一步も引かない状態だった。

「ふん・・・」

スカッ

「なにっ!?!」

「オリヤァ!!!!」

ドガァ!!

「グハッ!?!」

しかし、その拮抗はあっさりと破られる。Kオーズはメダガブリユ―に込めていた力を抜き、右に体を逸らす。すると、ガディアスに力を入れていたレイはそのまま振り下ろす体制となってしまうた。

その隙をKオーズが見逃す手はなく、大腿部の骨格の一つである『テイルデイバイダー』を尻尾型にして、レイにたたきつける。その衝撃に耐えきれなかったのか、レイは少し先に吹き飛ばされる。

キキキイン！！

『スキヤニングチャージ！！』

「ふっ！！」

ズドツ！！

「ガハアツ！？」

ピキイイイン

Kオーズは咄嗟にメダルを再スキャンさせ、必殺技を発動させる。そして、肩部の装甲に着いている『ワイルドステインガー』を伸ばし、レイに突き刺す。そして、頭部のプテラヘッドの能力である『エクスターナルフィン』を発動、レイを氷漬けにした。

「フウウウウウウウウ・・・フン！！」

ドガン！！

ズドオオオオオオオオオオオオ！！！！

そしてKオーズはテイルデイバイダーでレイを地面へとはたき落としました。そして、その生死の確認のついでに近くにいたアंकに声をかけた次第らしい。

ちなみにこれら一連の動作にはキチンと名称があり、名を『プラスディング・フリーザ』というらしい。

く現在く

「っていう事があったわ」

「そうか。よくやったな姉貴。後は奴を殺せばいいだけだ」

アंकはカリムをほめた後、気絶していると思われるレイに近づき、右手をグリード化させて構える。

「あばよ小僧」

ヒュ

そして、アंकはレイの頭を右拳で砕いた。……はずだった。

ガシッ

ゴバア!!

「なにつ!?!ガハア!!」

「!?!アंक!!」

突然レイの体から細い腕が出現し、アंकの拳を受け止めたのだ。

同時に、アंकに向かって金色の光の波動を放つ。その衝撃によりアंकはセルメダルを撒き散らしながら吹き飛ばされた。

「ツウ……!大した事はない!しかし今は……」

「やれやれ……やってくれましたね化物共」

「「!?!?」」

アंकとカリムが驚愕する中、レイの体から伸びていた手が残りの体と共に這い出してくる。そしてレイの体の中から出てきたのは、20代前半と思われる女性で、金髪のロングヘアに純白のワンピースを着ていた。

「……………チツ」

キュイイイイイイイ

「…………アंक?」

アंकはその女を見た後、軽く舌打ちして怪人態へと変身する。その顔はいつもの不敵のものではなく、焦燥感やその他の感情が入り混じっているものだった。

アंकはこの女を見て即座にマズいと感じた。そしてこの女に対しての感情がもう一つ。それは、

(この女には絶対に勝てない)

それは久しく忘れていた感情。かつて6課や裏社会に属していた時に常に抱いていた感情。

それは『恐怖』。

いつ死ぬかもしれない恐怖や親しい者に裏切られるかも知れない恐怖、そして自分よりも遥かに強い者と相対した際に生まれてくる恐怖。今回は3番目に値する感情だろう。

「チイイ!!!」

ボオ!!

アंकはその焦燥感や恐怖を完全に隠す事が出来ず、右手から火球を放って牽制を図る。

「無駄な足?きを・・・」

バシユツ

女はため息を吐いて手を横に振る。すると、火球がまるで紙に書かれた絵が消しゴムで消されるかの如く、消えてしまった。

「なっ！！アंकの火球がかき消された！？」

「クソッ！！逃げるぞカリム！！こいつはヤバイ！！」

アंकはカリムに呼びかけ、体内からシャチ・ウナギ・バツタのメダルを排出させ、カテドラルに装填し、スキャナーにメダルを読み込ませた。

キキキーン！！

「変身！！」

『シャチ！ウナギ！バツタ！！』

「オラアア！！！！」

ザパアアアアアアアア！！！！

オーズ・シャウバに変身したアंकは、シャチとウナギの能力を最大限に使い、右手から電気を纏った高圧水流を放つ。

「クッ！」

すると女は今度はその水流を消すのではなく、回避をしてやり過ぎた。

ズドン！！

「・・・逃げられましたか」

女は大して気にしていない様子で明後日の方向を向く。そこには、真木グリードと化したカリムといつの間にかタトバコンボへ変身していたオーズが撤退していく姿があった。

「まあ、やつらなんて私達の前では無力同然。そう思わない？」

「その通りだ」

女は誰もいない場所に声をかける。すると、近くの建物の残骸から同じく白い服を着た年若の男が腕を組んで近寄ってきた。

「ところで、お前の愛しの旦那様とその仲間達は放っておいていい

のか？」

「oh my gadd!!忘れてた!!」

女は本気で忘れていたような顔をして、倒れているレイの元へと近づいていった。

「…………さて、俺も宗助達を助けに行かんとな」

そう言っつて男は宗助達のほうに近づいていった。

くムディ・アंकのアジトく

「はぁ…………はぁ…………ア、アंक…………、彼女達は一体…………？」

カリムは息も絶え絶えといった具合に、変身を解除したアंकに尋ねる。アंकは少し言いずらそうな顔を見せるも、一言だけ言い放った。

「わからん。だがたった一つだけ言える事がある。俺達にはやつを倒せない。間違いなく」

「その通りじゃ」

「!? 誰だ!!」

アंकの話に割り込むかの様に、入口付近から声が聞こえた。その声を侵入者と勘違いしたのか、カリムが身構える。

そこには銀髪で半月型のメガネをかけ、銀色のローブらしきものを身に纏い、その手には30cmにも満たないであろう、小枝のような杖を握った老人が立っていた。

その人物を見たアंकは驚愕のような表情とともに、何かの合点がいったような表情を浮かべた。

「やれやれ・・・随分物騒なお出迎えじゃのう。ジンよ・・・、いや、今はアंकと言った方が適切かの？」

「好きに呼べ。・・・とりあえず久しぶりだな『死神』。何かあったのか？」

そう。アंकのアジトに訪れたのは、かつてジン・ヘイストンをアंक・エドゼロンとして復活させた死神だったのだ。

しかしその姿は、以前見たものとは何処か違っていた。以前は何処

となく頼りなかった覇気や風貌は何処となく鮮麗されたものとなり、死神の体内に感じられる力（此方も以前あった時は頼りなさげで弱々しかった）も、以前とは比べ物とはならない力を内包しているように見えた。

「まあ何かあったと言えばあったの。というよりも、お主ならもうわかっておるのではないか？」

「……チツ。なんでもお見通しって訳か」

「ほっほっ。そう不貞腐れるではないで。ところでそこのお嬢さんはカリム・グラシアかの？」

アंकは若干不貞腐れるかのような態度をとり、死神はそれをなだめ、カリムの方へと視線を向けた。

「ああ。お前の知っているカリム・グラシアで間違いない。俺の姉であり協力者だ」

「私はカリム・グラシアと申します。アंकの恩人だと知らずに働いた先程のご無礼、お許しください」

「初めまして。ワシは一般的に死神と呼ばれておる。あと、さっき

のことは別に気にして居らんわい。追われる者であれば、当然の反応じゃて」

そう言つてカリムは一礼する。それを聞いた死神はそれにつられて挨拶を返した。

「で？あいつらは一体何者だ？少なくともこの世界の生命体じゃないな？」

「まさしくその通りじゃ。やつらはこの世界の生命体でもなければ、別世界の生命体でもないのじゃ。いうなれば、精神体と呼ぶべき存在かの？」

「「精神体……？」」

アंकとカリムは死神の言葉に首をかしげる。それを見た死神は知らなくても当然といった。

「やつらは……ワシの世界の者達じゃ」

「なに！？じゃあまさかあいつらは！？」

「察しての通りじゃ。やつらこそ、転生者どもに力を与え、そしてこの世界を狂わせた元凶である」

神じゃ
「

{
T
H
E

N
E
X
T

S
T
A
G
E

}

Kの実力/現われた奴（後書き）

ああ、やっと終わった。疲れたあ。

どうも最高総司令官です。

さて、ようやく終わりましたよ第10話。

実はこのプロット、初期には存在しなかったのですが、どうしても必要になったので、概要等を3分弱でくみ上げました。我ながらビビりました。・・・穴だらけだったけどね。

さて、今回はキドラゴスコンボの各部位&コンボのデメリットおよびメリットについて説明させていただきます。

名称・・・キリンヘッド

詳細

オーカテドラルにキリン・コアを装填することで変身可能。

外見はおでこの辺りに麒麟の顔があり、耳の辺りに足と思われる装甲が着いている。

また、コンボ形態ならば、オークオーツの部分から麒麟の角を思わせる角『キリンホーン』が出現する。

ちなみにオークオーツの色は藍色で蹄を模した形。

スペック上は、3キロ先の針の穴が見え、6キロ先の石が落ちる音を聞き分けることができる。

能力は『電撃の放出及び蓄電』。その力はクワガタヘッドを遙かに超える力を持つ。

しかし、前述の通り亜種形態ではキリンホーンがないため、亜種形態ではその力はクワガタヘッドを下回ってしまう。

また、必殺技発動時はキリンホーンに大量の電気を溜めねばならず、その際に大きな隙が出来てしまうらしい（亜種は必殺技発動時のみ、キリンホーンが出現する）。

名称・・・ドラゴンアーム

ドラゴン・コアをカテドラルに装填することで変身可能。

外見は、肩に龍玉のような宝玉『ドラゴン・クリスタル』をつけており、腕には水色のラインドライブと手甲状の外骨格であり、龍の鱗状に変化した『ドラゴン・ガーディア』、手には五指に着いている鱗が爪のように変化した『ドラゴン・ネイル』等が装備されている（ちなみに掌にも宝玉のような物があり、そこから炎を発射したり、吸収したり出来る）。

能力は『火炎放射攻撃の発射&吸収』

簡単に言えば、火炎系の攻撃を吸収する事が出来、更に自身も炎や火炎球を放つ事が出来る。

ただし、吸収できるのは火炎系の、しかも放出系に限るので使い勝

手はあまりよくない。

スペック上、厚さ2.5メートルの鉄板を切り裂くことが出来、1メートルの鉄板を貫く事が可能。

名称・・・ペガサスレッグ

ペガサス・コアをカテドラルに装填する事で変身可能。

外見は、ペガサスのような青白く小さい2対の翼『ウィングプロテクター』が両足に着き、馬のような顔がゾウレッグのように着いている。

スペック上、100メートルを0.5秒で走り切ることが可能。また、空をマツハ2で飛行可能。その際はフライヤー・フィンのように翼を展開して飛ぶ。

能力は『高速移動と高速飛行』

その名の通り、高速で走ったり飛ぶ事が出来る。

チーターレッグとは違い、トップスピードで走っても急停止が出来る。しかし、小回りが利かないという欠陥がある。

また、亜種コンボ時はウィングプロテクターが消えて飛行が不可能になり、移動速度も100メートル2.5秒と少し遅くなってしまふ。

名称・・・キドラゴスコンボ

詳細

キリン・ドラゴン・ペガサスのコアメダルを用いて変身するオーズのコンボ形態。

その力は凄まじく、他系統のコンボでは苦戦していた6課メンバーを手玉に取ってしまった程である。

固有能力は『電氣化』。

文字通り自身を電氣と化し、相手の攻撃を無力化する。また、電氣化する事によってコンピューターの中に入り込めたりする事が出来る。

しかし、1度コンボを使った後は、メダルが色を失い力もなくなってしまう。色と力は3日経過しないと元に戻らない。

なお、メダルを単体で使った場合はこの現象は現われない。

さらにキドラゴスコンボを使った際の反動は凄まじく、1度に100枚単位のセルメダルを消費してしまうらしく、戦闘中もセルが消費してしまうため、最大でも1時間以上変身する事は出来ない。

さて、以上でキドラゴスコンボの説明を終了いたします。

なお、感想や質問はドシドシお待ちしております。

ちなみに、今作品の更新スピードは大体月1のペースで執筆しております。

ではまた次回、お会いいたしましょう。

死神とメモリと秘めたる心（前書き）

恋愛成分を入りたい今日この頃。

どうも最高総司令官です。

さてさて来ましたよ11話目！！

今回はモブキャラでの死亡者が出ます。そして巻き起こる阿鼻叫喚の嵐。

そしてトンでも発言大連発&設定の捏造偽造の嵐！！

正直に言おう！！

収集つきませんゴメンナサイ！！

以上！！異論は認める！！

追伸

以前読者の方から、”グリードのスペルが違う”とのご指摘をいただいているので、散々悩んだ挙句、次回から前半のGREEDをGREEDに変更致します。

簡単に説明すると、

BEFORE

SPECIAL EDITION MAGICAL GIRL
IRICAL NANOHA STRIKER'S
OF GREED” “GREED

AFTER

SPECIAL EDITION MAGICAL GIRL
IRICAL NANOHA STRIKER'S
“GREE
D OF GREED”

こんな感じになります。

ですので、検索機能を使って私の作品を閲覧してくださっている方々は、充分にご注意ください。

死神とメモリと秘めたる心

前回の4つの出来事は……

1つ！アंकとカリムがミッドチルダ・クラナガンを強襲！！

2つ！アंकがキドラゴスコンボで6課陣達を撃退。そして、カリムもレイ・メイスティーマを撃退した！

3つ！レイにとどめを刺そうとした瞬間、奴の体から神が出現。二人はアंकの咄嗟の機転により、その場を脱出した！

そして4つ！！アंकを蘇らせた死神が出現し、アंकとカリムに『奴らがすべての元凶だ』と伝えた！

COUNT THE MEDAL!!

現在、アंकが所持しているメダルは……

タカ×3

クジャク×3

コンドル×3

クワガタ×3

コブラ × 2
テイラノ × 1
トリケラ × 1
プテラ × 1
タコ × 2
ウナギ × 1
シャチ × 2
ゾウ × 3
ゴリラ × 3
サイ × 3
チーター × 3
トラ × 3
ライオン × 3
バッタ × 3
カマキリ × 3

カメ×1

ワニ×2

キリン×1

ドラゴン×1

ペガサス×1

???×1

???×1

???×1

そしてカリムが所持しているメダルは・・・

タカ×1

トラ×1

バッタ×1

サイ×1

シャチ×2

ウナギ×2

タコ×1

プテラ×3

トリケラ×2

ティラノ×2

コブラ×2

カメ×2

ワニ×1

〔惑星ムディ・アングのアジト〕

「……………神……………ですって?」

「やはりか……………」

死神の言葉にカリムは愕然とし、アングはやはりといった表情で胡座をかいていた。

そんな二人をしり目に死神は言葉を綴っていく。

「・・・本来、神聖なる神々は神界と呼ばれる場所に祀られておつてな。下界には決して干渉してはならぬという暗黙の了解が存在しておるのじゃ」

「・・・成程な。暗黙というのはそれが常識だからか。不干渉の理由は下界のパワーバランスを不用意に崩さないようにするためか」

「!?!」

すると、アंकクの発言に驚いたのか、死神は目を剥いて少しだけ笑った。

「ほっほっ。やはりお主の直観はいつ見ても凄まじいの。何か？読心術の類でも持っておるのかの？」

「・・・そんな事はどうでもいいからさっさと話を続ける。なぜ奴らはこの下界とやりに干渉してきた？」

「ふむ。恐らくお主というイレギュラーが発生しておるからじゃろ
うのう」

「……………なに？」

「……………」

今度はアंकが驚く番だった。死神の発言にアंकは驚愕をあらわにした。

その表情を見たカリムは何かを感じたのが、アंकの手を握り締めた。

「……………俺がイレギュラーってのはどういう事だ？」

「ふむ。わしはお主が復活する前に、何人かの人間の名前を問うた事があったの？」

「ああ。確かクライド・ハラウンとかプレシア・テスタロッサとかの名前を聞いてきたなあ。確かそいつらは本来死ぬはずだったとか何とか。それがどうした？」

「実は転生者共が居た世界では、この世界はアニメや書籍の話として扱われているのじゃよ」

「何だと!？」

「・・・・・・・・・・」

この質問にはさすがにアंकも冷静でいることが出来なかったのか、思い切り立ち上がる。そしてカリムはその質問に対しても無言だった。

「それじゃ復活前に聞いてきた人物は、物語の上では過去に死ぬはずだった人物だったってのか!？」

「その通りじゃ」

「・・・・・・・・・・はは・・・・・・・・・・。マジかよ・・・・・・・・・・」

アंकはまるで力が抜けたように呟いて、床に座り込んでしまった。

「アंक・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

カリムはアंकに寄り添うも、アंकは何の反応も示さなかった。

「（・・・流石にインパクトが強すぎたか）・・・すまんが、話を続けても良いかの？」

「・・・好きにしろ」

死神は内心で罪悪感を感じ、アंकに問うた。しかしアंकは未だに頂垂れたままそうつぶやいただけだった。

「ふむ、そうさせてもらおうかのお。その死ぬべき人物達の話は一旦隅に置いておいて次にイレギュラーの話じゃな」

「ジン・ヘイストン。お主は本来、機動6課自体に関わる予定も未来もなかったのじゃ」

「え・・・？」

今度声を漏らしたのはカリムだった。アंकの頭を肩に乗せながらも、目だけは驚愕に染まっていた。

「衝撃的じゃろうが事実じゃ。お主は本来、機動6課ではなく管理

局の自然保護観察官というモブキャラが就くような任務について、普通に結婚し、普通に年老いて、普通に引退して、普通に死んでいくという一生を迎える予定じゃった。じゃが、そのお主の歴史を勝手に変えてしまった愚か者がおった。それがお主達が先程出会った神、『アマテラス』じゃ」

「アマテラス……、それが奴の名ですね!!!」

カリムは先程の光景を思い出したのか、右拳を強く握りしめ、顔を憎々しげにゆがめた。

「……いきりたち怒りに燃えるのは若い者の特権のような感じやが、出来れば儂の話を聞き終わってからにしてもらいたいのお」

「あ……、す、すみません……」

カリムは握りしめていた右手を解すと、一度座りなおして話を聞く態勢を整えなおした（余談だがそれをやっている間も左手はアंकの手を握っており、それを見ていた死神が若干ほほえましそうに見ていたらしい）。

「さて、話を続けさせてもらうぞい。実はつい最近、アマテラスには協力者がいると判明してお。そやつの名は『ミカエル』。アマテラス、ミカエルともに神界の中でも屈指の力の持ち主じゃ。この

二人は初めこそまともに仕事をしておつたんじゃが、何時の頃からか下界の人間をこの世界を含むありとあらゆる世界に事故と偽って落とし始めたんじゃ。

そしてそういう事をしていく内に奴はこの世界にたどり着いたのじや。じゃがそのアマテラスが転生者の一人であるレイとかいう男に惚れてしもつたんじゃ」

「成程……。奴があれ程の凄まじい能力を持っているのには何か裏があるかと思っていたが、そういう事だったのか」

すると今まで俯いていたアंकクが再び会話に参入してきた。

「アंकク。もう大丈夫なの？」

「ああ。取り乱してすまなかつたな。死神、話を続けてくれ」

アंकクはカリムに軽く謝ると、再び死神のほうに向きなおつて話の催促をした。

「……さつきお主が言った通り、アマテラスは自分の力の一端である能力をメイステイマーへと移し替えてこの世界へと送り込んだ。そして……。アマテラスは下界の人間を蘇らせ、別世界へと行かせておつたミカエルを抱え込み、ミカエルが持つておる能力『人

生の創造』を使わせて、お主がこの世に生を受ける前に本来のお主の人生をすべて書き換え、そしてメイスティーマがお主を倒すように、そしてすべての存在からの嫌われ者になるようにしたのじゃ。

まあ、奴自身、カリムがこちら側につくとは思ってみなかつたようじゃがの」

「その計画を知った僕はすぐにお主を見つけ出して復活させた。その際にお主の記憶を見せてもらったが、まさかあそこまで過酷な人生を送つてるとは思わなかつたわい。」

そして、僕はお主を復活させた後、アマテラスとミカエルの事を徹底的に洗い出した。すると出てくる出てくる、偽造や捏造の嵐じゃつたよ。それこそお主が今まで殺してきた人数なんぞ足元にも及ばぬくらいの量があつたわい」

おかげで神界は大混乱じゃわい、と行って死神はあごひげをなでる。一方アंकは偽造捏造の量の多さに驚いていた。ちなみにアंकは自らが手を下して殺した人間の数はほぼ覚えていた。その人数はざつと45,238人だそうだ(ただし、間接的に死んだ者や即死でなかつたものはカウントされていないので、実際はそれよりも多いらしいが)。ちなみにそういう事をしている理由は、弔いとか謝罪とかではなく、ただの趣味だそうだ。

「しかし、おぬしも知っている通り組織というのは動くのが遅い。そこで僕が神界の連中を脅して、こうして奴らに制裁を与えにやってきたというわけじゃ。これで僕がここに来た理由はわかつてもらえたかの?」

「大体な。カリムは？」

「ほとんどはわかりましたから大丈夫よ」

「何よりじゃ」

そう言っつて死神は嬉しそうに笑い、立ち上がって杖を構える。

「帰るのか？」

「うむ。一度神界に戻ってこの事を報告せねばなるまい。それに奴らを倒すにはそれなりの準備が必要じゃからの」

「……………大変だなあんたも」

「ほっほっ。お主やカリム程ではないて。では、の」

アंकは心底同情したような口調で言うと、死神は軽く苦笑しながらそう答えた。そして、パチンという音と共に死神は消えた。

「・・・転移魔法かしら？」

「さてな。さて、俺らはこれからどっ」

ゴトッ

「「？何^だ？」」

二人がこれからどうするかを相談しようとする、突如、少し大きめのジェラルミンケースが現われた。アंकが訝しげに中を開けるとそこには・・・

「これは・・・」

「ガイア・・・メモリ？」

そこにはA～Zまでの純正化された27本のガイアメモリが、まるで使われるのを今か今かと待ちわびているかのように、ケースの中に収められていた。

そのラインナップは、

- 『 ANT (蟻の記憶) 』
- 『 BETTLE (カブトムシの記憶) 』
- 『 CUT (切断の記憶) 』
- 『 DIMENSION (次元の記憶) 』
- 『 DEVIL (悪魔の記憶) 』
- 『 ETERNAL (永遠の記憶) 』
- 『 FIRE (火の記憶) 』
- 『 GUNNER (砲手の記憶) 』
- 『 HIT (打撃の記憶) 』
- 『 ICE (氷の記憶) 』
- 『 JESTER (道化師の記憶) 』
- 『 KNIGHT (騎士の記憶) 』
- 『 LONG (長さの記憶) 』
- 『 NET (網の記憶) 』
- 『 MAGNET (磁石の記憶) 』

『OCCELOT（オセロットの記憶）』

『PLANT（植物の記憶）』

『QUICK（速さの記憶）』

『RECALL（召喚の記憶）』

『STORM（嵐の記憶）』

『TIME（時間の記憶）』

『UNICORN（一角獣の記憶）』

『VISION（映像の記憶）』

『WEATHER（天気 of 記憶）』

『XTREME（超越の記憶）』

『YEGG（強盗の記憶）』

『ZONE（地帯の記憶）』

と、選り取り見取りだった。とここで、アंकがケースの奥底に置いてあった紙に気がついた。そこには丁寧な字でこう書いてあった。

『儂からの選別じゃ。上手く使うようにの。DEVILのメモリじやが、それは神の能力やチート系の力を封じ込める為のものじゃ。』

それ以外の人物に使っても大した効力は望めんから使わんことをお
勧めするぞい。

D・A・

追伸

D・Aは僕の姿のモデルとなった人物の名じゃ。名は確か『アルバ
ス・ダンブルドア』とかいっとったのでの。じゃから、お主もその
名で呼んでくれると助かるわい』

「……ふん。死神……いや、アルバスも粹なことをしてくれ
るなあ」

アंकは頬を吊り上げて薄く笑い、プライムに指示を出す。

「プライム」

『Yas・What is it?（はい。何でしょうか?）』

「俺が作ったメダルを出せ」

『is it all right? although tha
t has reached the level which
can still be said to be comple

tion - - completeness . . . certainty . (よろしいのですか？あれはまだ完成とは言えるレベルに達してはいますが、完全とは、かしこまりました)』

アंकの言葉に最初こそ反対していたプライムだったが、並々ならぬ決意を秘めたアंकの眼光に負け、渋々ながらも言われた通りのものを出した。アंकはプライムから出された物をつかみ、カリムの方を向いて、ある物を差し出した。

「!?!これは!?!」

カリムはそれを見て驚愕した。そこに会ったのは、クジャク・コンドル・ライオン・チーター・ゴリラ・ゾウ・トリケラ・ティラノのコアメダルだった。トリケラとティラノを除けば、すべて今のカリムが持っていないメダルばかりだった。

「.このメダルは、アストラの研究ノートを見て俺が新たに作り出したメダル達だ。今までは俺が状況に応じてメダルを渡したが、それだけじゃどう頑張っても対応が出来ないことがあるからな。それにコンボを組めるのがタトバ、プトティラ、シャウタ、ブラカワニだけじゃキツイだろ」

「まあ、確かに」

それは、かつての欲望事変の際に初代オーズだったアストラが率いた5体のグリードのうちの一人、猫科のグリード『カザリ』だった。

「はあ……はあ……」

キュイイイイイイイイイン

カザリは息を荒く肩を上下させながら元の人間態へと戻り、地面に寝転がりそのまま熟睡を始めた。

〈2時間後〉

「……ん……？何だこの毛布……」

2時間程眠りについていたアークは、2時間程経ってから目を覚ました。そして、自分にかかっている毛布に気がついた。

少し辺りを見渡すと、近くに同じような毛布を被って寝ているカリムの姿が見えた。その顔は穏やかで、とても幸せそうに見えた。

「……どうやらカリムが毛布をかけてくれたようだな」

アंकはフツと笑うと、自分にかかっていた毛布を退かして、カリムの毛布をかけなおす。

「うう・・・アंक・・・」

「ん？」

カリムが寝言で自分の名前が出た事に気が付きカリムの方を向くと、何やら苦しそうな表情かおで何かを呻うめいていた。アंकは多少気になったが、大したことはないだろうと判断して歩き去ろうとする。

「行かないで・・・アंक・・・」

「・・・・・・はあ」

アंकはカリムのその寝言を聞いて、カリムの傍に行き、その手を握った。

「・・・俺はどこにも行かない。だからゆっくり眠ってる」

「スウ・・・スウ・・・」

アंकクがそう囁くと、カリムは穏やかな顔に戻り、再び安らかな寝息を立て始めた。

それを確認すると、アंकクは物思いに更け始めた。

(・・・こいつはいつもそうだ。自分の事はそっちのけで俺なんざの事を優先して考えてくれる。それは夢の中でも変わらないのか。俺は、いい女に好かれたな(・・・))

そう思つてアंकクは穏やかな顔で笑う。実は、アंकクはカリムが自分に向けてくれている好意に気が付いていたのだ。

正直、アंकクは嬉しかった。

こんな自分でも気にかけてくれる人がいる。そして心配してくれる人がいる。アंकクという、ジンという人物の存在を認めてくれる。暗い深海のような場所で過ごしていた自分に一筋の道をくれた。そして今度は自らの人生をも犠牲にし、自分という血に塗れた化け物に着いてきてくれた。自分に道を、そして光を射してくれただけでもありがたいのに、人生を棒に振ってまで着いてきてくれる女の心情に、アंकクが気がつかないわけがなかった。

そしてアंकクも・・・。

(いや・・・)

そこまで思っ、再び笑う。その顔には自虐の表情が浮かんでいた。

（俺に幸せは似合わない。たとえ似合ったとしても、世界は俺を幸せにさせてはくれないだろう。所詮俺は化け物だからな。だが今だけは・・・）

この幸せな時間に身を浸らせてもらいたい・・・。

アंकは心の底からそう願った。

ちなみにアंकは先程の行動に羞恥を感じたのか、カリムが起きて数時間くらいは若干顔が紅かった。

（数日後）

アंकとカリムは時空管理局・地上本部へと赴いていた。そして近くの木陰に隠れる。

「さて・・・、とつと潰して帰るか」

「ええ。そうしましょう」

そう言つてアंकはロストドライバーとETARNALを、カリムはオーズドライバーを取り出し、タカ・トラ・バッタのコアメダルを装填する。

『ETARNAL』

キキキーン!!

「「変身」」

ギユイン!!

『ETARNAL』

『タカ!トラ!バッタ!!タ・ト・バ タトバタ・ト・バ』

アंकはETARNALを起動させて、ロストドライバーに装填し、エターナルへ、カリムはコアメダルを装填してオーズ・タトバコンボへと変身した。

そしてエターナルは死神に渡されたメモリの内の一本『LONG』を取り出し、右腰のマキシマムスロットへと装填する。

『LONG!! MAXIMUM DRIVE!!』

そしてそれを確認したエターナルは、エターナルエッジを取り出し、ロストドライバーに装填されているETARNALメモリを抜き、エターナルエッジへと装填した。

『ETARNAL!! MAXIMUM DRIVE!!』

「「「あああああああああ!!?!」「」」

すると、地上本部の門番兼見回りをしていた局員が、エターナル・レクイエムの効力により、悲鳴と苦痛に満ちた叫び声を上げて地面に倒れこむ。

しかしそれは門番だけに止まらず、レクイエムの波動は本部全体を包み込むだけではなく、本局がある町全体を包み込んでしまったのだ。

これがLONGの能力である。

通常、ガイアメモリは効力の範囲が限られているが、長さの記憶をもつLONGは持ち主の意思に応じて効力の範囲を無限大に広げてくれるのだ。

「さて、地上本部にいる上層部の屑を根こそぎなぎ払っぞ」

「了解よ、エターナル」

ドシユ

オーズはエターナルにそう返すと、近くにいた局員の心臓をトラ・クローで貫き、息の根を止めた。

「ラスト・プロード!!」

「断罪の雷!!」

「!!」

二人が本部に入ろうとした瞬間、二人に向かって雷が落ち、地面が爆発した。二人はそれを左右に飛んで回避し、その元凶であろう二人……ミカエルとアマテラスを睨みつける。

「ちい……この間の奴か!!」

「悪いわね化物。これ以上私の旦那様の邪魔はさせないわよ?」

「私の転生者達を何人も殺してくれるとはな……、覚悟は出来ているか小僧……」

「はっ!! 悪いがテメエラと話す舌は持ち合わせてねえな!!!!」

エターナルは叫ぶと同時に腕のマキシマムスロットにSTOMEを、右腰のマキシマムスロットにUNICORNを装填した。

『UNICORN!! MAXIMUM DRIVE!!』

『STOME!! MAXIMUM DRIVE!!』

「はぁ!?!」

ゴオオオオオオオオ!!!!

するとエターナルの腕に青と緑の風がまとわりつき、それを確認したエターナルは即座にそれを放つ。

「ふん……。その程度のもの」

ミカエルはその技を嘲笑し、右手を前に出す。するとアマテラスと同じようにかき消されてしまった。

『QUICK!! MAXIMUM DRIVE!!』

「なに!?!」

しかし、そのガイアウィスパーが響くと同時に、エターナルとオーズは姿を消してしまった。

「ちい!! 何処行った!?!」

「QUICKは速さの記憶を秘めているはずよ。ということとは奴らは超高速で建物の中に駆け込んでいったと考えるのが常套ね」

「ちい! そう簡単にはいかせるか」

『残念じゃが、そう簡単に行ってしまうんじゃないのう』

「「!?!」」

二人は声がした方向へと顔を向ける。そこには、険しい表情をしたアルバスが杖を構えて立っていた。

「あら。誰かと思ったたらあなたか。それで？死神風情が神である私達に何の用かしら？」

アマテラスは余裕の表情を崩さず、さらにはアルバスを見下したかのような口調で問うた。それに対してアルバスはその険しい顔つきを崩さないが、その飄々とした態度だけは崩してはいなかった。

「ほっほっ。アマテラスのババアはともかく、ミカエルお主の事じや。もう検討はついておるのではないかの？」

死神は文句を言っているアマテラスを無視しミカエルの方に顔を向けると、ミカエルは体を震わせ、顔には怖れと驚愕の表情が張り付いていた。

「まさか・・・、最高神様が!?!」

「そうじゃ。お前達の上司《最高神》が儼に直々の命令を下した。

『GODDESS FORM』

そう言つてアマテラスは金色のケースのようなもの『ゴッドパス』を取り出し、金銀のベルト『電王ベルト』にタッチした。

すると細かい金属片にアマテラスの体が覆われ、桃、亀、斧、竜、翼を模した5つの仮面のようなものが胸、右肩、左肩、顔、背中に装着され、顔の仮面が左右にスライドし、その体を金と銀のみの色に変え、その姿を『仮面ライダー電王・ゴツデスフォーム』へと変身させた。

「はあああああああああ………変身!!!」

ブウウウウウウウン!!!

ミカエルはベルト……『オルタリング』の両サイドのボタンを強く叩いた。すると、ミカエルの全身を強烈な光が覆い、その光が止むとそこには、金色の角と屈強な肢体、竜を思わせるような顔をした戦士『仮面ライダーアギト・グランドフォーム』へと変身していた。

「ふふふ……。あなたみたいな落ちこぼれには私のような高貴な存在は絶対に倒せないわ。私を倒せるのはただ一人、私のダーリンであるレイ・メイステーマ様ただ一人……」

「そういうわけで悪いが死神、お前を殺させてもらうぞ」

アマテラスは惚気るのをやめ、ミカエルも殺気や覇気を放って死神をけん制する。

それを見たアルバスは、やれやれとため息をつき、杖を懐にしまいこんだ。

「やれやれ。前・最高神様も厄介なものをお残しになられる方じゃ。人間から成り上がった神を残していくとは……。振り回される此方の身にもなってもらいたいものじゃ」

「……何を言っている？」

「なに。お主の言う死神如きの戯言じゃ。別に気にせんでいいわい」

そう言ってアルバスはロープを翻す。するとロープの内側から、じつとしていれば芸術品か何かと勘違いしそうな黒い蝙蝠が羽ばたいて出てきた。

「さて、久しぶりに戦おうかのう。『キバット』」

『まったく……久し振りに呼び出したかと思えば、いきなり戦闘か……。まあ、それも一興だな』

黒い蝙蝠『キバットバット？世』は、ため息を吐くような仕草をしてみせるも、嬉しそうにアルバスの周りをクルクルと周りだした。

一方、アギトと電王は困惑していた。なぜなら、あれ《キバットバット？世》は別世界のもので、本来はアルバスが持っていることが出来ないはずのものだからだ。

その困惑した視線に気がついたのか、アルバスはほくそ笑みながらキバット？世を手に乗せる。

「ほっほっ。それでは行くとしようかの。キバット」

『ありがたく思え。貴様らには真の絶望を与えてやろう。ガブリッ』

そう言つてキバット？世はアルバスの手にかみつく。すると、アルバスの顔や体にステンドグラスのような紋様が浮かび上がる。そしてそれに呼応するかのように鎖がアルバスの腰に纏わりつき、紅い止まり木のようなベルトへと変化した。

「変身」

アルバスのその掛け声とともにキバット？世は止まり木のベルト『キバットベルト』に収まる。すると、緑の波動と銀色の液体が彼の体を包み、それをはじけ飛ばして右手を振ると、そこには果てしない暗黒を表し、そして蝙蝠を模したかのような仮面を身につけ、印象的な黒いマントを風になびかせた漆黒の戦士『仮面ライダークキバ』が姿を現した。

「さあ、儂に敵うと思う奴はかかってこい」

その言葉と同時に、アギトと電王がダークキバに飛びかかった。

〔NEXT STAGE〕

死神とメモリと秘めたる心（後書き）

はいやっつと終わりました。クタクタの最高総司令官です。

ぶっっちゃけると、随分とグダグダだなおい！？

さて、此処で制作秘話を若干申し上げますと、実はDEVILのメモリは制作当初は登場の予定はありませんでした。

しかし神共の侵略を止めるには、それを上回る力がないとマズイと言う事で、急遽このメモリを作ることとなった次第です。

ちなみにYとQのメモリを考えるのに、約1週間掛かった事は秘密です。

正直言ってかなり大変な作業だったと自負しております。一応、Atozに出てきたメモリはあまり使わず、殆どをオリジナルやら敵ドールパントとして出てきたメモリを使わせました。

ちなみに現状で一番役に立たなさそうなメモリはRECALLとVISIONだったりします。

さて、次回の予告と致しましては、地上本部攻略戦と共に、アルバスの戦いを少しばかり見ていこうかと思えます。恐らく、二部構成になるかもしれないです（ならない可能性もあるから、ならない可能性としては、大体60%ぐらいだと思います）。

なお、友人から「フォーゼは出ないの？」と聞かれたので、一応いっておきます。

多分出ない。

ではまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4263v/>

SPECIAL EDITION MAGICAL GIRL LIRICAL NANOHA STRIKER 'S

2011年12月1日23時54分発行